

# 島根県浜田市遺跡地図IV(弥栄自治区)

## 浜田城下町遺跡試掘調査

平成 22 年度 市内遺跡発掘調査報告書



2012年3月

島根県 浜田市教育委員会

## 序

浜田市教育委員会では市内の遺跡を確認するため、平成 11 年度から国庫補助事業を受けて市内遺跡の発掘調査を実施しています。平成 18 年度からは市町村合併に伴い、旧那賀郡（金城町・旭町・三隅町・弥栄村）も含めた新浜田市を対象として事業を実施しています。

本書は弥栄自治区の遺跡位置を示した地図をまとめており、文化財保護のための基礎資料です。学校教育や生涯学習・開発事業との調整などひろく活用され、文化財保護思想の普及、地域史研究への一助となることを願っております。

おわりに、本書を刊行するにあたり御協力をいただきました地元の皆様、島根県教育委員会をはじめとした関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成 24 年 3 月

浜田市教育委員会  
教育長 山田 洋夫

## 例 言

1. 本書は浜田市教育委員会が平成 22・23 年度に国庫補助を受けて実施した市内遺跡発掘調査事業の報告書である。事業は遺跡分布調査と台帳整理、試掘確認調査と関連遺物の整理作業を実施した。
2. 調査は以下の組織で行った。

- 調査主体 浜田市教育委員会教育長 山田洋夫
- 調査指導 上田俊雄（浜田市文化財保護審議委員）平成 22・23 年度  
阿部志朗（浜田高校教諭・元島根県歴史の道調査委員）平成 22・23 年度
- 西尾克己（島根県古代文化センター長）平成 22・23 年度  
岩崎仁志（山口廻埋蔵文化財センター 文化財専門員）平成 23 年度  
佐伯純也（米子市埋蔵文化財調査室 主任調査員）平成 23 年度
- 島根県教育委員会 文化財課
- 調査員 梶原博英（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事）  
藤田大輔（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主事）
- 事務局 浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係  
文化振興課長 岡本好明・文化財係長 川本（原）裕司・主事 宮脇 勝（平成 22 年度）
3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。  
調査協力 松江刑務所、浜田市立安城公民館、ふるさと伝承会、椿 真治（島根県古代文化センター）  
調査参加 坪倉ひとみ、中田貴子、中田洋子、原田勝義、半場利定、吉田安男
  4. 遺物実測図は 1/4 スケール、土器底部の回転系切りは記号で示している。土層図は 1/50 スケールである。  
出土遺物、実測図及び写真、台帳類の記録は浜田市教育委員会に保管している。
  5. 本書の執筆は調査員が分担してを行い、文責は文末に示した。ただし、第 5 章第 4 節は文化財調査コンサルタント株式会社の分析結果報告を藤田が一部調整した。全体の編集は榎原が行なった。

## 本 文 目 次

第 1 章 事業の経過.....	1
第 2 章 弥栄自治区遺跡地図（遺跡分布図・遺跡一覧・指定文化財一覧・参考文献）.....	1
第 3 章 埋蔵文化財の事務手続きフロー.....	35
第 4 章 弥栄自治区の埋蔵文化財について.....	38
第 5 章 浜田城下町遺跡試掘調査.....	44
第 1 節 調査の経過.....	44
第 2 節 層序と遺構.....	44
第 3 節 遺 物.....	53
第 4 節 自然科学分析（花粉分析・ $^{14}\text{C}$ 年代測定）.....	57
第 5 節 総 括.....	61

## 第1章 事業の経過

浜田市教育委員会では国庫補助事業を受けて市内遺跡の試掘確認調査を平成11年度より実施している。平成17年（2005年）10月1日の市町村合併により、那賀郡（金城町・旭町・三隅町・弥栄村）を含めた新浜田市の範囲を対象とする事業となった。

これまでの調査結果については、以下の報告書を刊行している。

『浜田市遺跡詳細分布調査-国府地区I-』浜田市教育委員会 平成14年3月

『史跡 石見国分寺跡・県史跡 石見国分尼寺跡』浜田市教育委員会 平成18年3月

『浜田市遺跡詳細分布調査-周布地区I-』浜田市教育委員会 平成19年3月

『史跡 周布古墳・藏地宅後古墳・市史跡 金田1号墳』浜田市教育委員会 平成20年3月

『島根県浜田市遺跡地図 I（浜田自治区）・仕切遺跡』浜田市教育委員会 平成21年3月

『島根県浜田市遺跡地図 II（金城自治区）・七渡瀬II遺跡』浜田市教育委員会 平成22年3月

『島根県浜田市遺跡地図 III（三隅自治区）・史跡 石見国分寺跡』浜田市教育委員会 平成23年3月

本報告書に収録した内容は、平成22年度に実施した浜田城下町の試掘調査と市内分布調査・台帳整理に基づく弥栄自治区の遺跡地図である。

## 第2章 弥栄自治区遺跡地図

島根県教育委員会 2002『島根県遺跡地図II（石見編）』に基づき、P1から一連番号を付した。

指定文化財には別番号（史跡：国史、県史、市史・天然記念物：国天、県天、市天・登録文化財：国登）を付した。このため、埋蔵文化財と史跡の番号は二重になっており、史跡指定範囲（一点鎖線）と埋蔵文化財の範囲は異なっている。

遺跡は種別によって下記のとおり分け、赤色の記号であらわした。種類が複数になるものは主なもので代表させている。遺跡の範囲が明確なものは塗りつぶし、不明確なものは白抜きで示した。

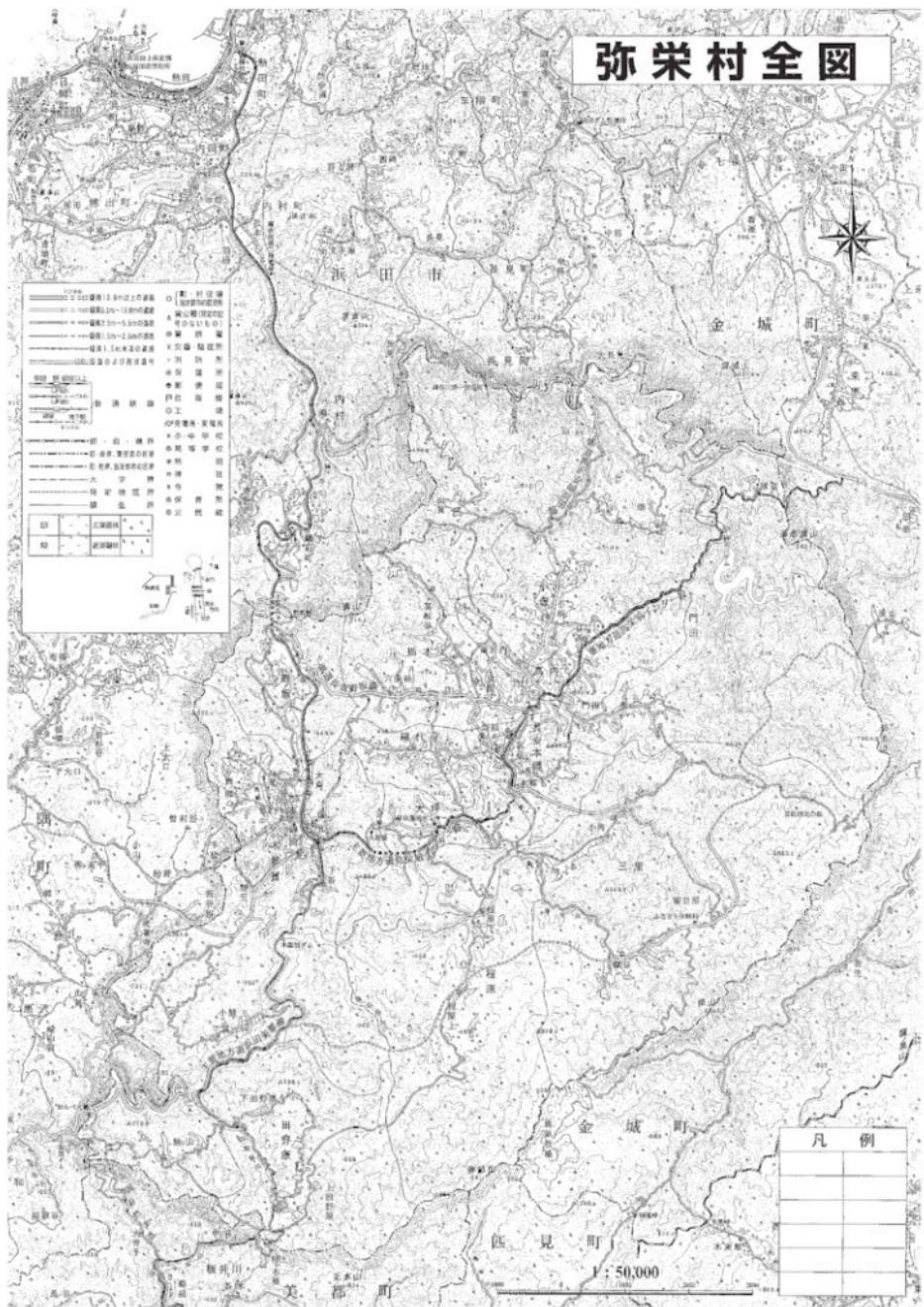
街道跡は島根県歴史の道調査報告書と調査指導者の補足を反映したものである。およそ江戸時代後期から近代にかけてのもので、道筋は諸説あるため1本に統一していない。

● 遺跡	○ 遺跡（不明確）
- 遺跡範囲	… 遺跡範囲（不明確）
▲ 古墳・墳墓	△ 古墳・墳墓（不明確）
■ 古墓・石碑など石造物	▲ 古墓・石碑など石造物（不明確）
▲ 窯業関係遺跡	△ 窯業関係遺跡（不明確）
▼ 製鉄関係遺跡	▽ 製鉄関係遺跡（不明確）
記 寺院跡	○ その他の遺跡
■ 調査実施地点・遺跡確認	□ 調査実施地点・遺跡なし
----- 指定範囲（史跡・登録文化財）-----	
▲ 天然記念物（樹木）	★ 天然記念物（樹木以外）

地図上に示した遺跡は、現段階で確認できたものを掲載しています。図示されていない地点にも遺跡が存在する可能性があるため、現地確認などの予備調査（分布調査・試掘調査など）が必要になります。開発行為を計画する場合は浜田市教育委員会に照会していただきたい。

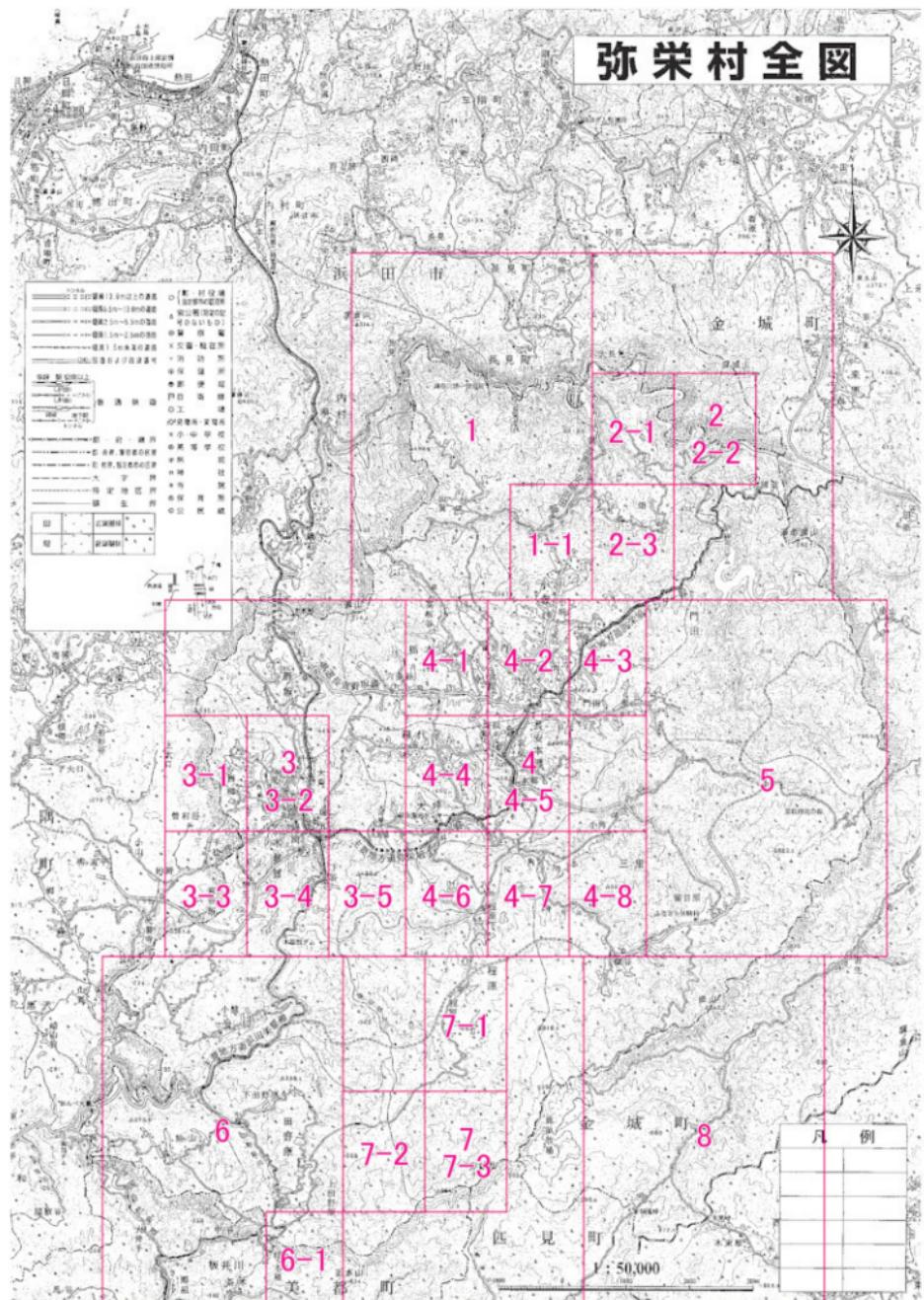
掲載した地図（1/50,000、1/25,000、1/8,000）は、浜田市弥栄支所で保管している1/50,000、1/25,000の弥栄村全図（平成12年測図）・1/8,000の弥栄町平面図（平成18年測図）を使用した。平成17年の市町村合併により、那賀郡弥栄村は浜田市弥栄町になっている。

# 弥栄村全図

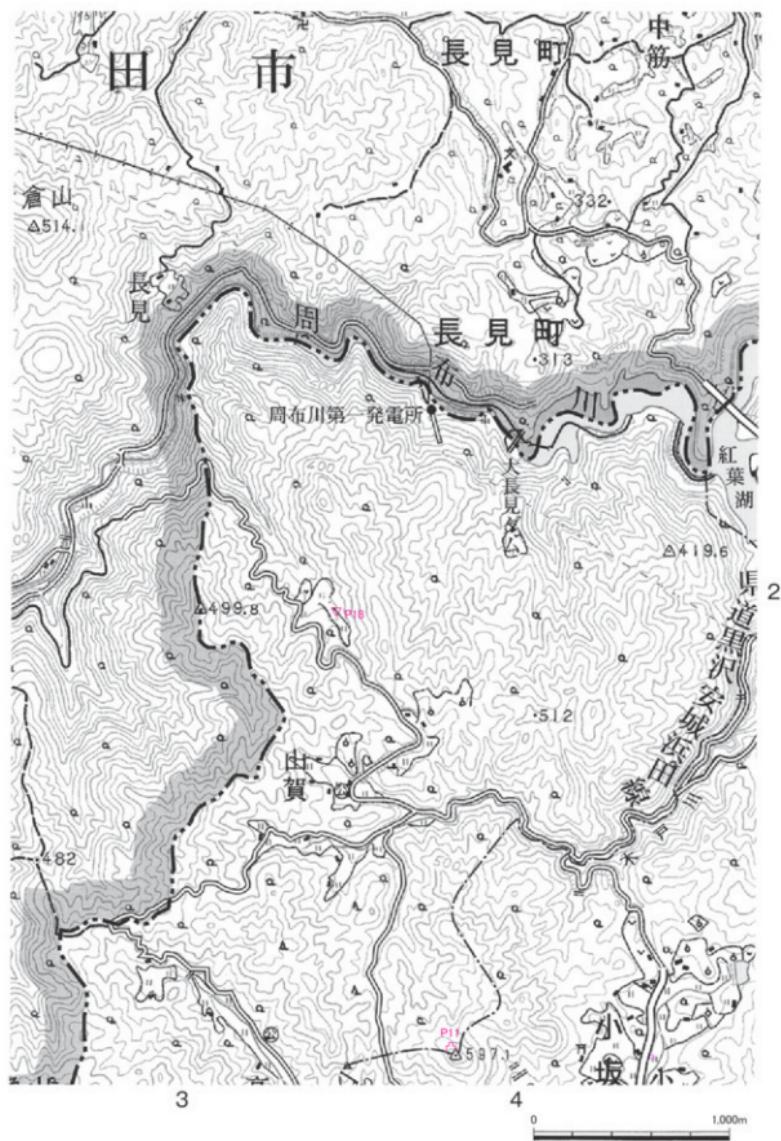


凡例

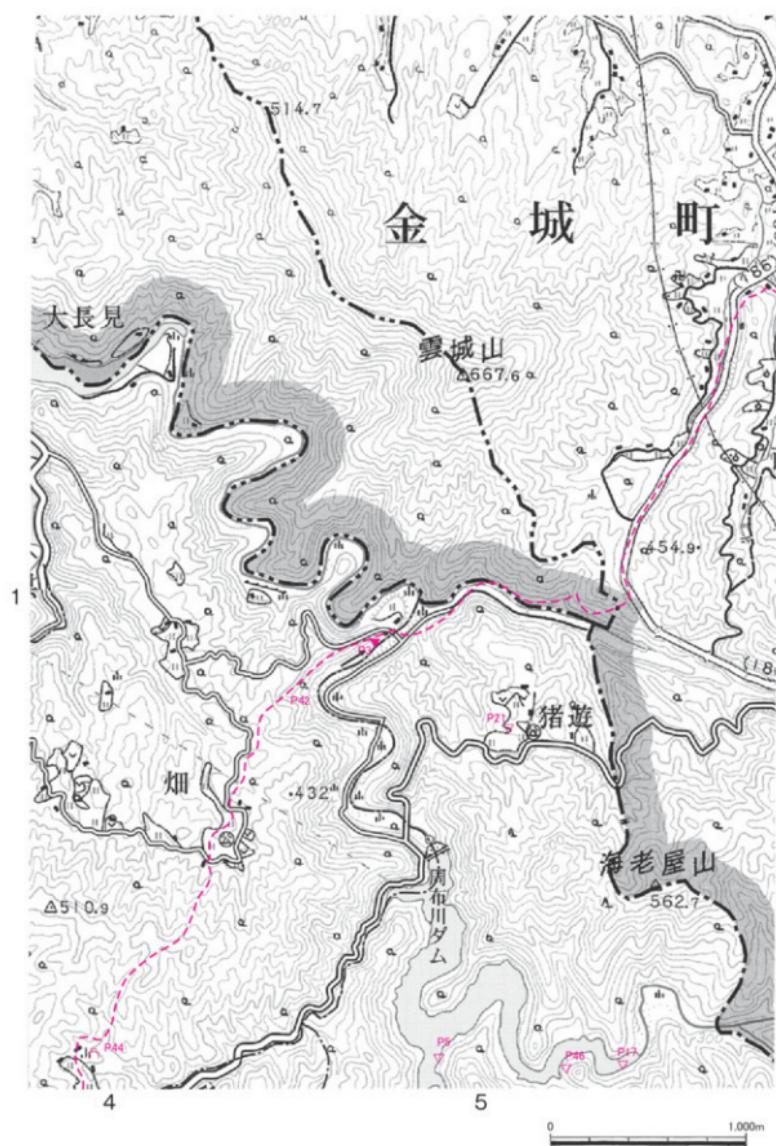
# 弥栄村全図



1

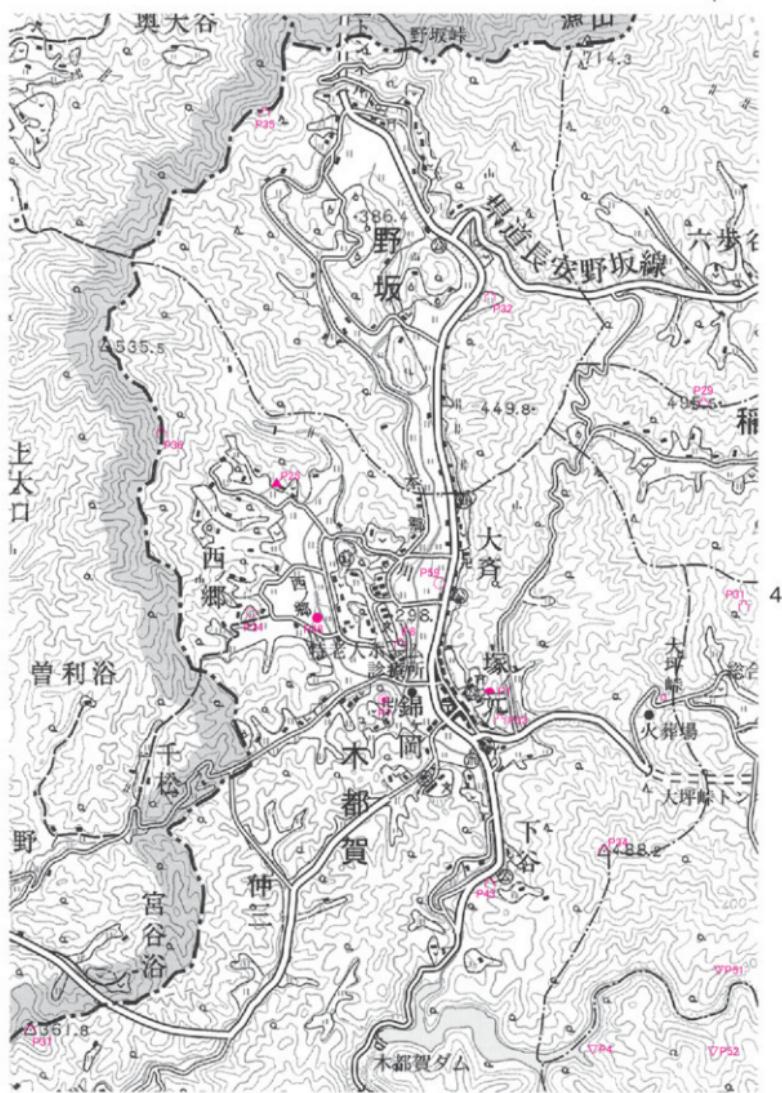


P11 千穂山城跡 (高木城跡・小坂城跡) P18 大井谷鉛跡



P3 畑鉄跡 P5 高源鉄跡 P17 青尾鉄跡 P21 猪遊鉄跡 P42 津和野奥筋往還

P44 日高城跡 P46 名ヶ瀬鉄跡



6

7

P1 おつかさん古墳 P4 大橋鉢跡 P7 木都賀銘塚

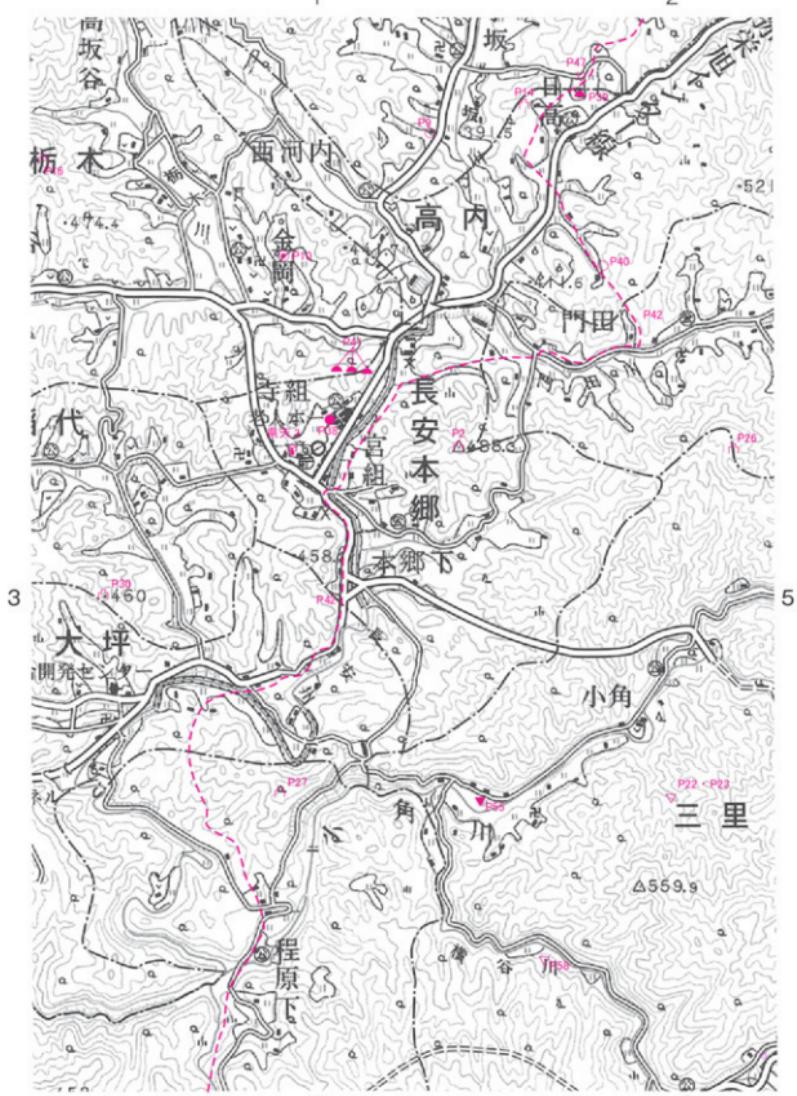
0 1,000m

P8 田屋城跡 (木東城跡) P24 王子ヶ原遺跡 P25 西ノ郷窯跡 P29 鷹の巣城跡

P31 大坪城跡 P32 野城跡 P33 東城跡 P34 天ノ城跡 P35 王城跡 (O79 猪股城跡)

P36 鷹泊城跡 (O41 と同一) P37 白狐城跡 (O49 と同一) P43 西城跡 P48 王子ヶ原東遺跡

P51 大坪鉢跡 P52 小屋ヶ谷鉢跡 P59 大齊遺跡



P2 矢懸城跡（永安城跡） P9 小坂遺跡

0 1,000m

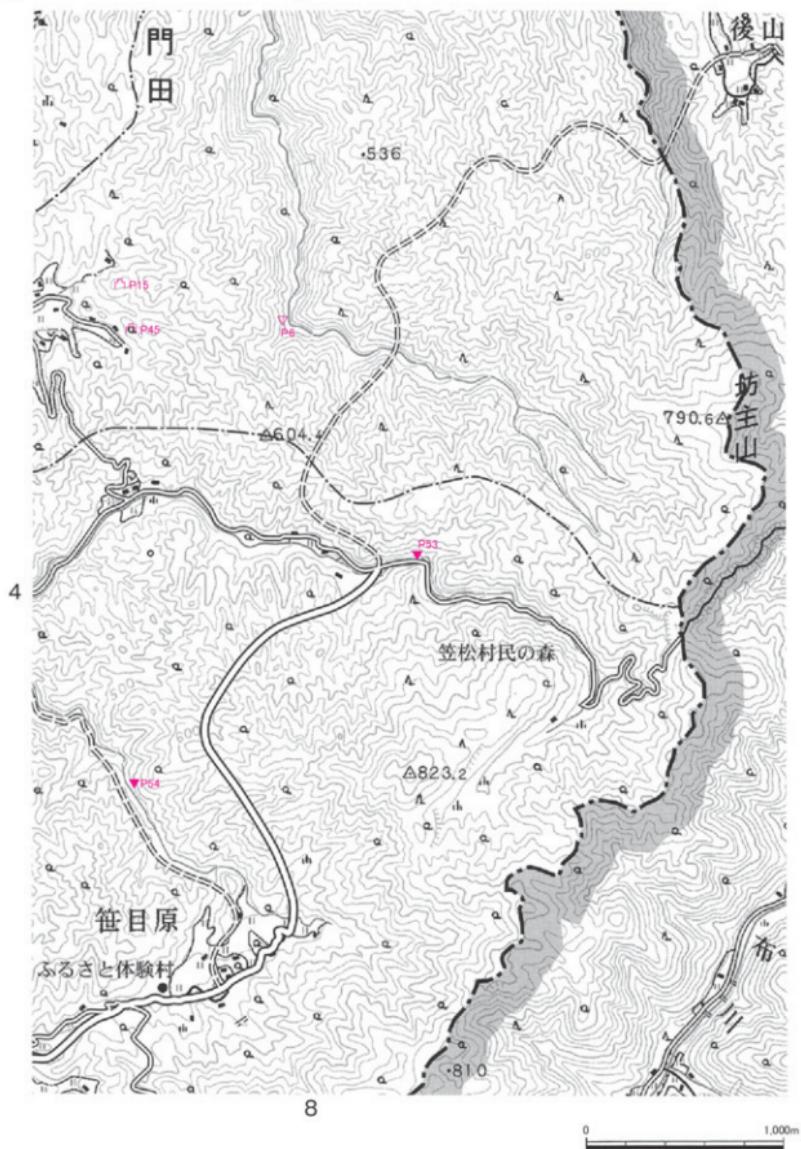
P10 大前上経塚 P14 小坂日高城跡 P16 天龍山城跡 P22 梨ヶ谷I鉢跡

P23 梨ヶ谷II鉢跡 P26 高丸城跡 P27 矢川城跡（矢ヶ尾城跡） P30 火の口城跡

P38 神代屋遺跡 P39 奥の原古墳群 P40 遠越遺跡 P41 坂本古墳群 P42 津和野奥筋往還

P47 上ヶ原鉢跡 P55 中屋鉢跡 P58 クズレイワ鉢跡

県天3 長安本郷の八幡宮並木杉



P6 明比谷城跡 P15 門田城跡(古城跡) P45 古城跡 P53 鎧木城跡

P54 松ヶ谷城跡



P13 熊の山城跡 P19 道円坊鉛跡 P42 津和野奥筋往還

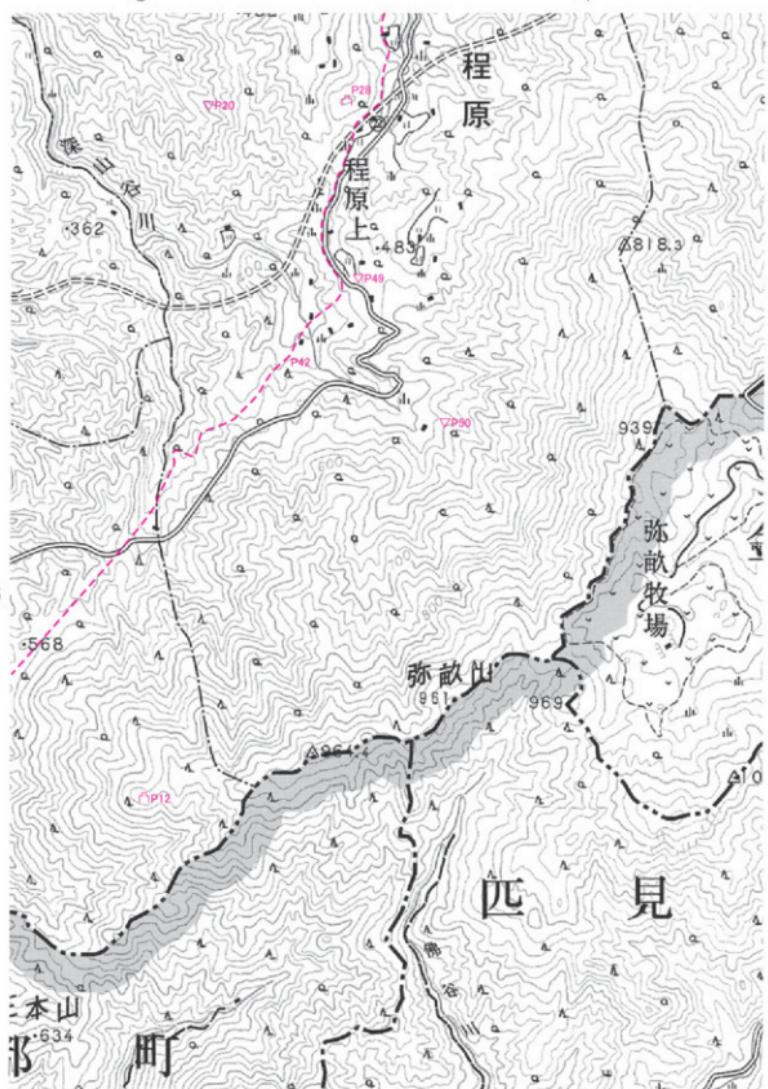
7

3

4

6

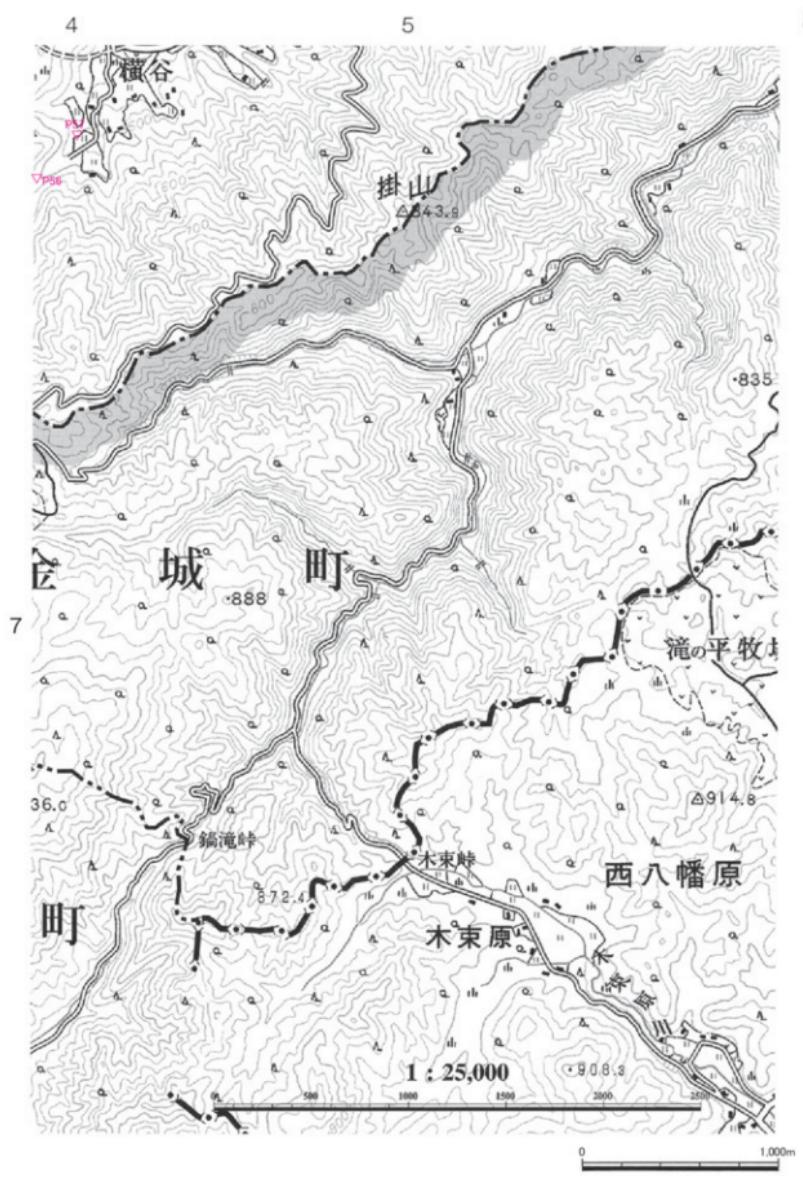
8



0 1,000m

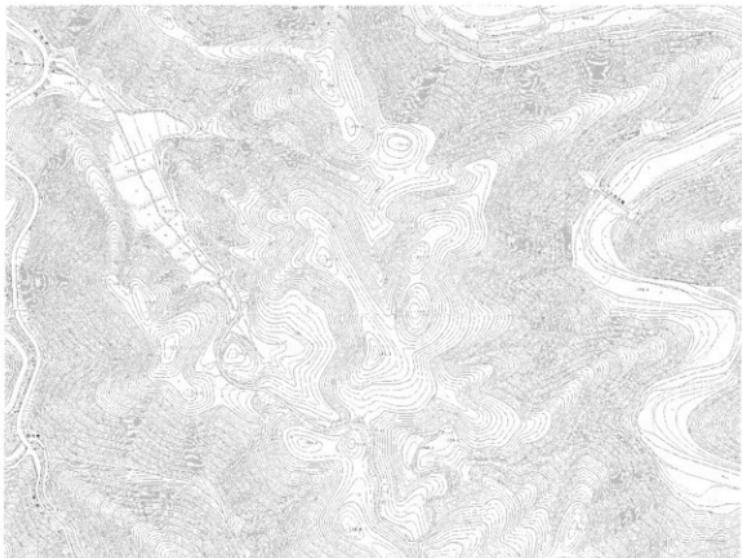
P12 大鹿城跡 P20 程原鉄跡 P28 城ヶ谷城跡 P42 津和野奥筋往還

P49 伊屋山鉄跡 P50 熊藪鉄跡



P56 岩倉鉄跡 P57 向イ原田鉄跡

2-1



2-2

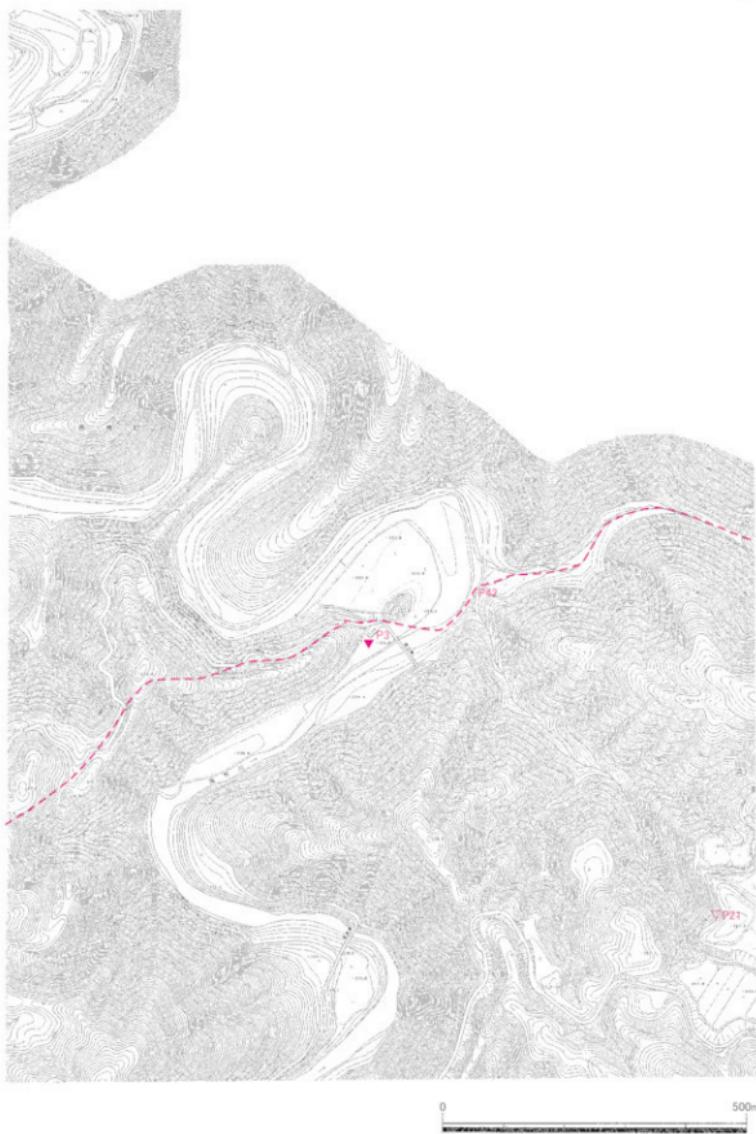


2-3



P42 津和野奥筋往還

2-1



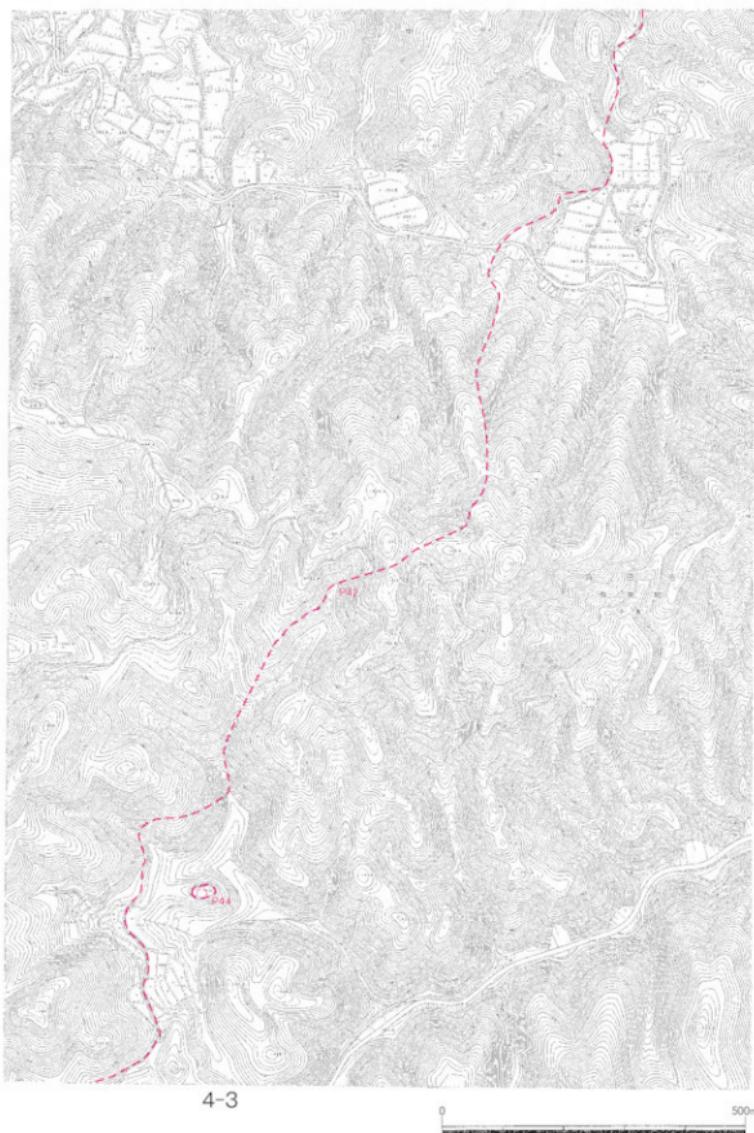
P3 烟鉢跡 P21 猪遊鉢跡 P42 津和野奥筋往還

2-3

2-1

1-1

4-3



P42 津和野奥筋往還 P44 日高城跡

3-1



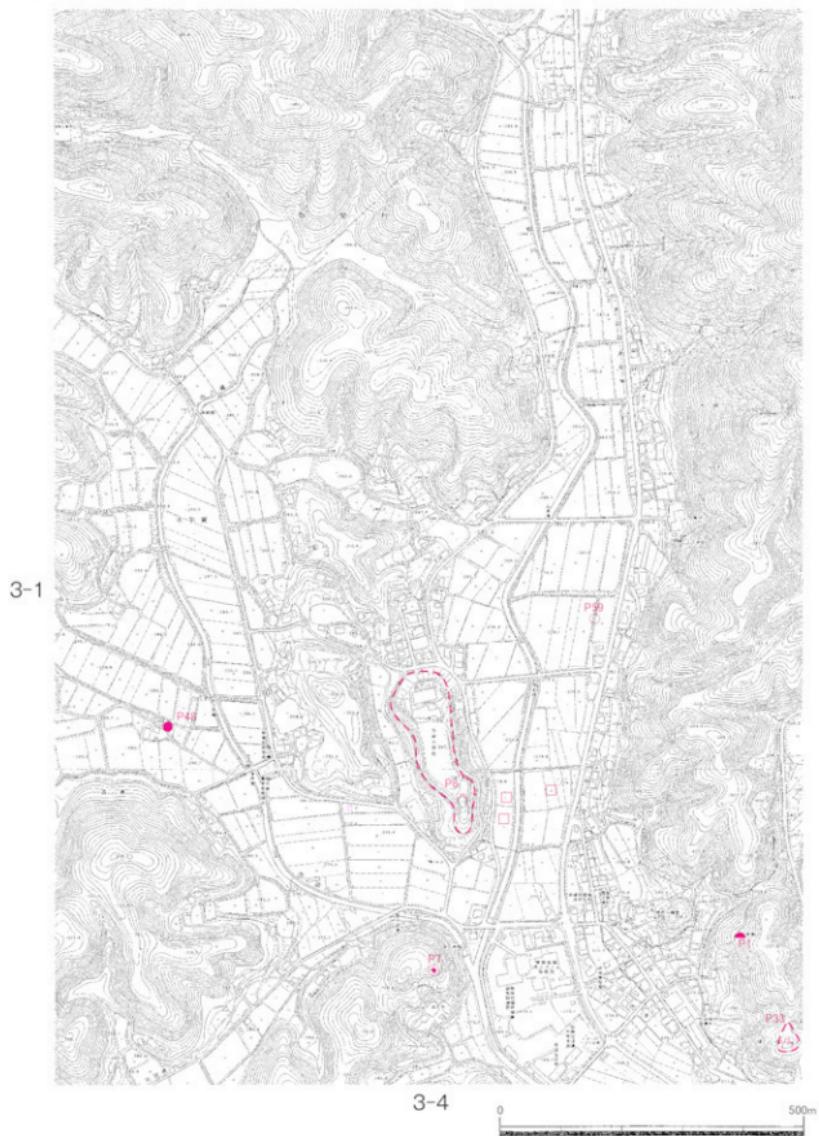
3-2



3-3



P24 王子ヶ原遺跡 P25 西ノ郷窯跡 P36 鷹泊城跡



P1 おつかさん古墳 P7 本都賀経塚 P8 田屋城跡（木東城跡）P33 東城跡

P48 王子ヶ原東遺跡 P59 大齊遺跡

3-1

3-3



3-4



P37 白狐城跡（O49 と同一）

3-4

3-2



3-3

3-5



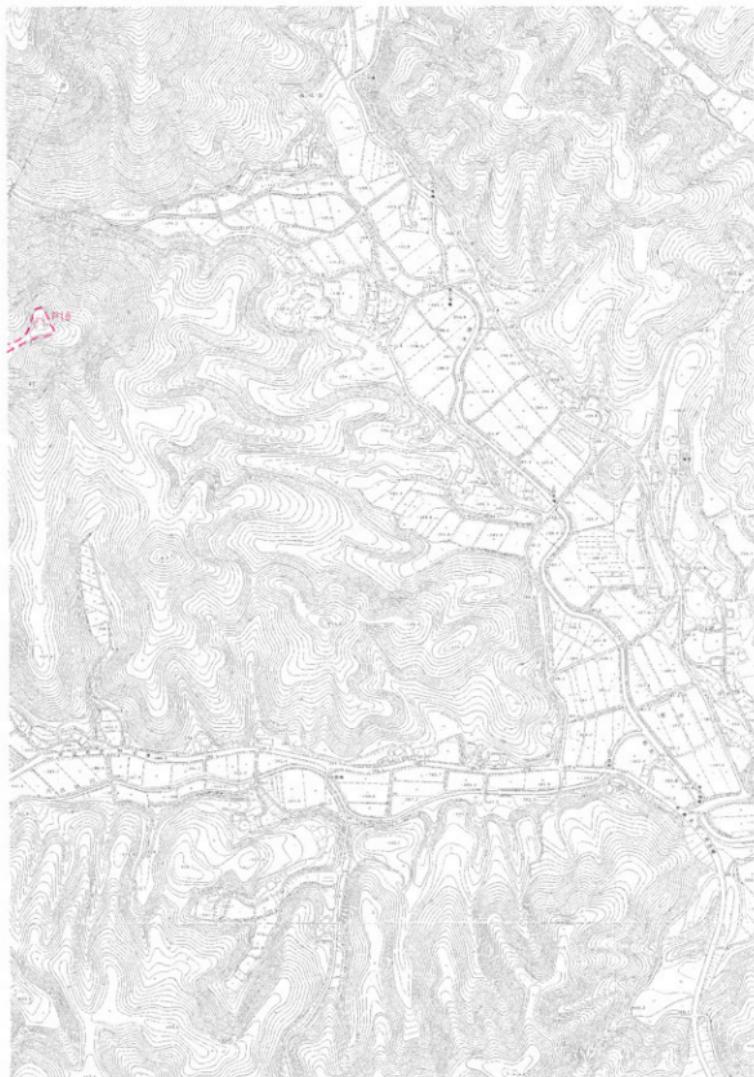
P43 西城跡

3-4



P4 大橋鉢跡 P51 大坪鉢跡 P52 小屋ヶ谷鉢跡

4-1



4-2

4-4



P16 天龍山城跡

1-1

4-2

4-1

4-3

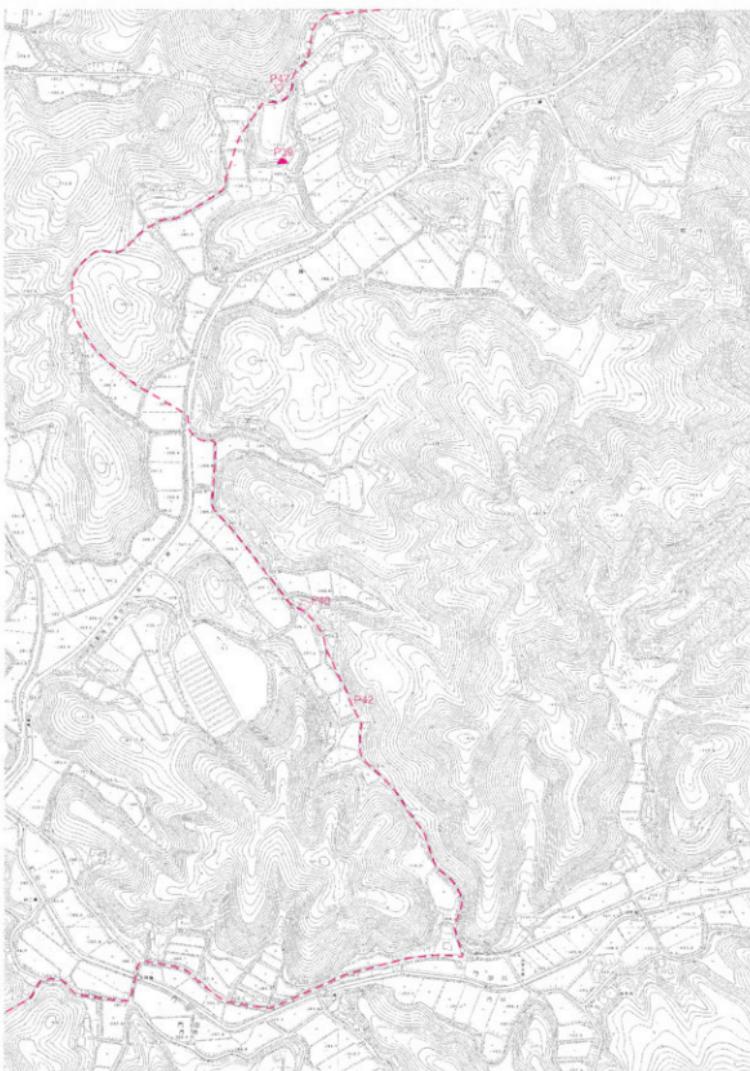
4-5

A horizontal scale bar at the bottom right of the map, showing a distance of 500 meters.

P9 小坂遺跡 P10 大前上経塚 P41 坂本古墳群 P42 津和野奥筋往還

4-3

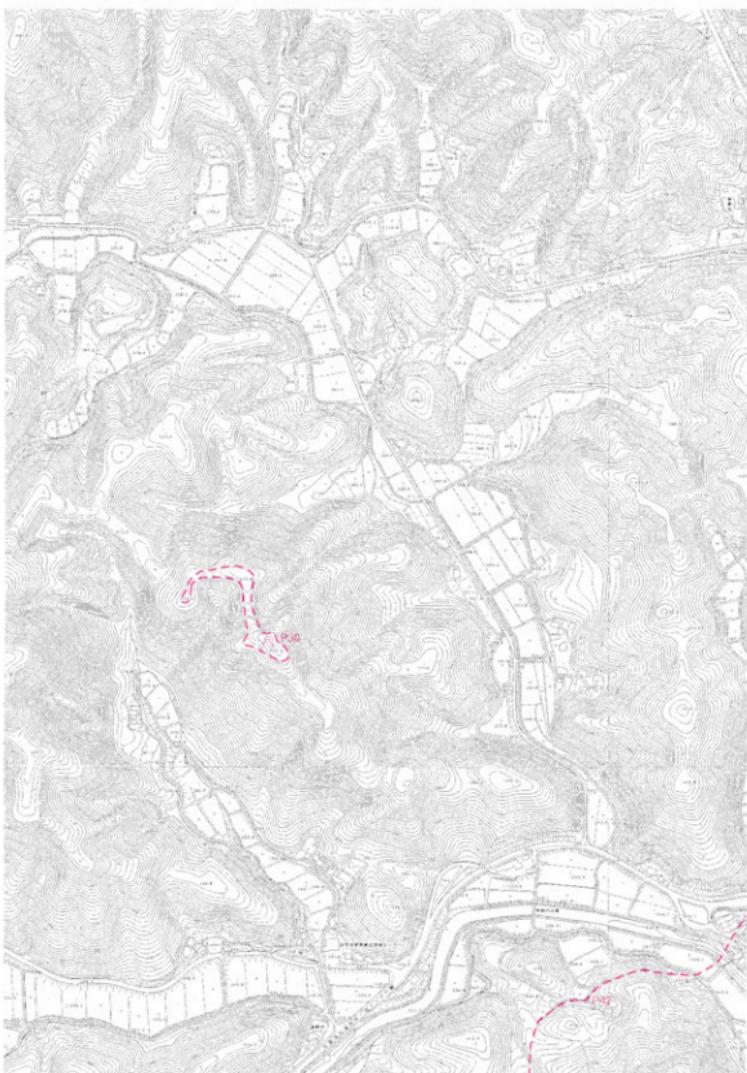
2-3



P39 奥の原古墳群 P40 遠越遺跡 P42 津和野奥筋往還 P47 上ヶ原鉱跡

4-1

4-4



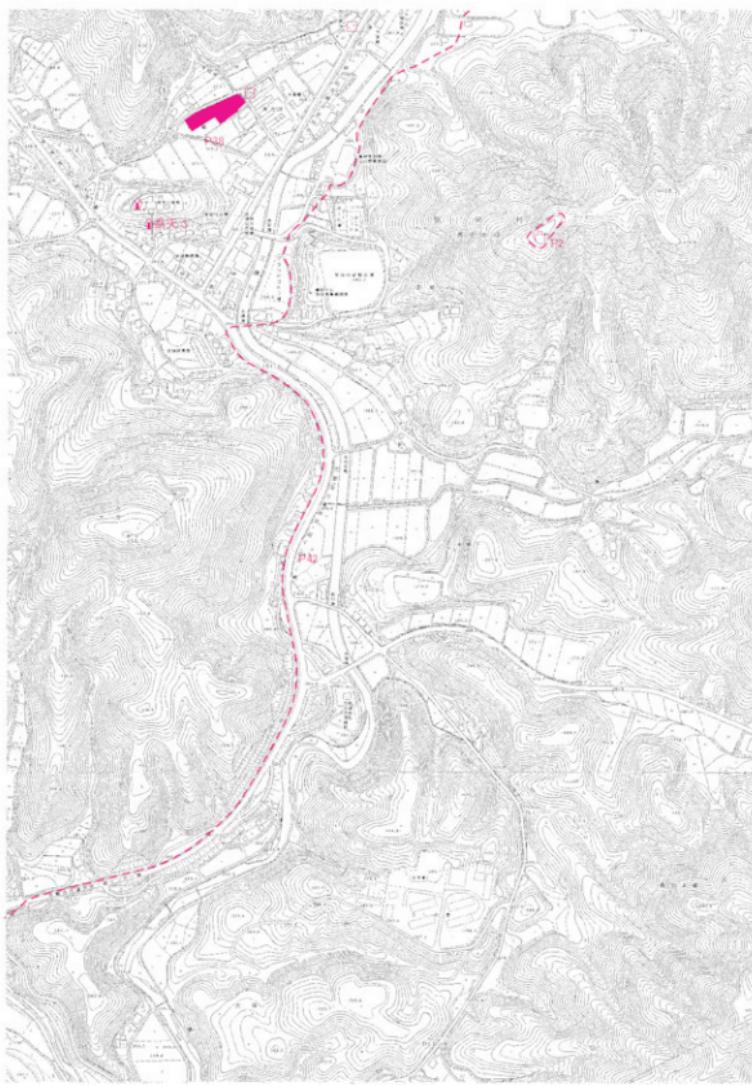
4-6



P30 火の口城跡 P42 津和野奥筋往還

4-5

4-2



4-7

P2 矢懸城跡（永安城跡） P38 神代屋遺跡 P42 津和野奥筋往還  
県天3 長安本郷の八幡宮並木杉

4-4

4-6

3-5

4-7

7-1

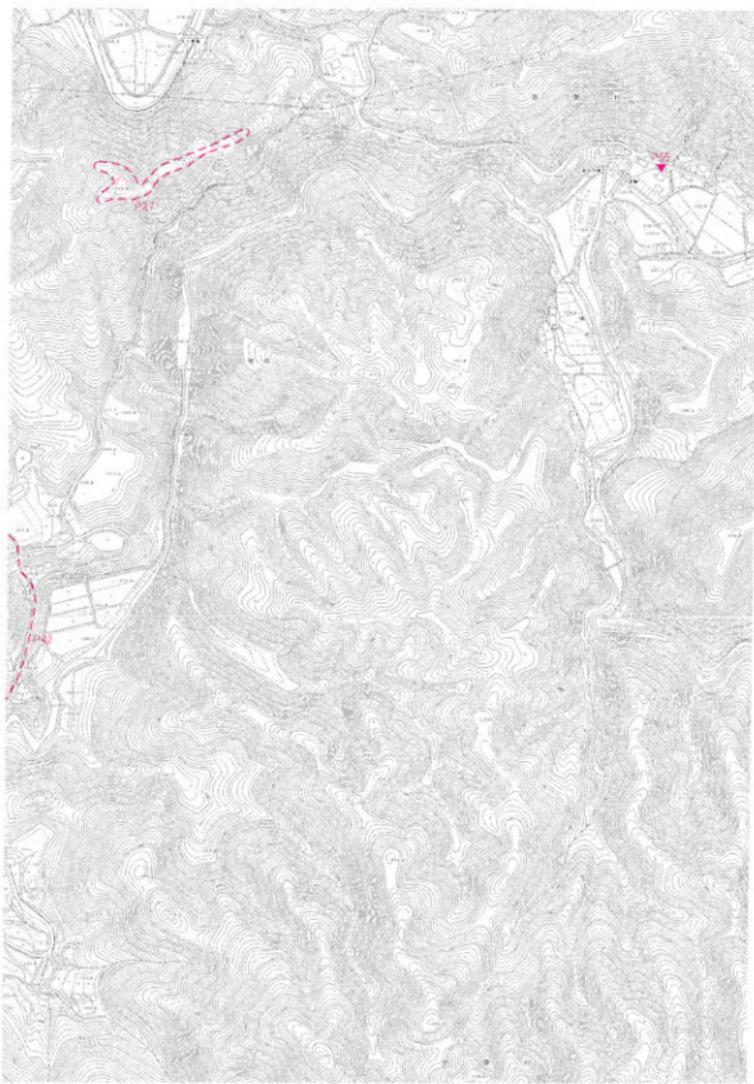
0

500m

P42 津和野奥筋往還

4-7

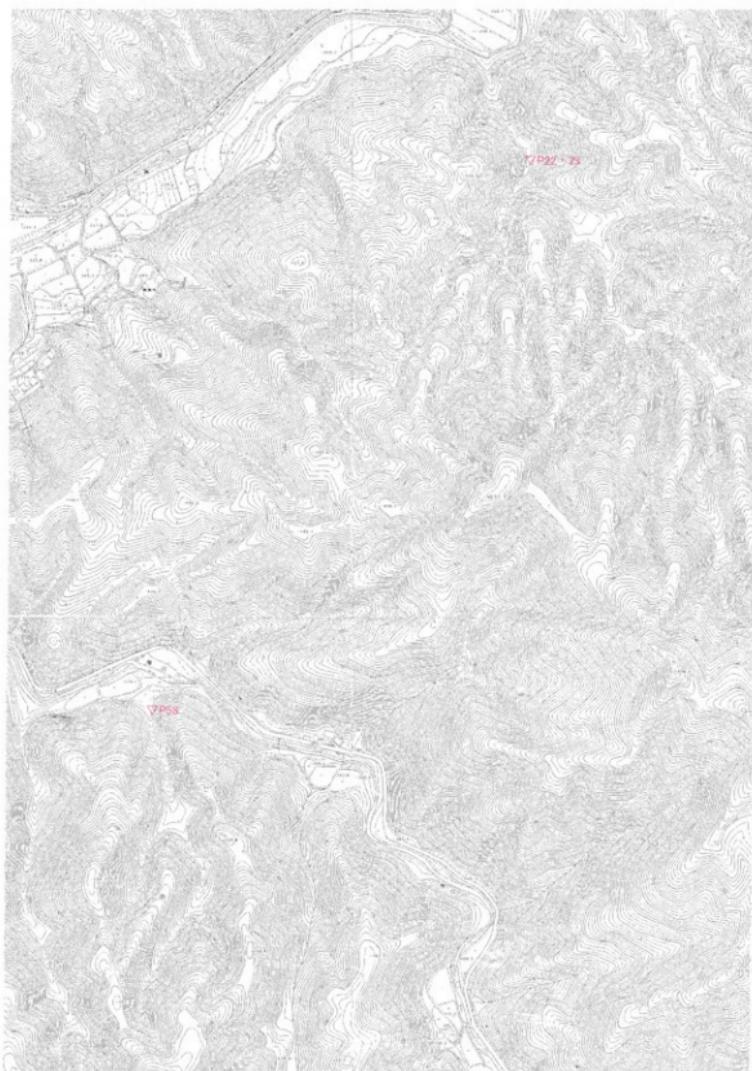
4-5



7-1

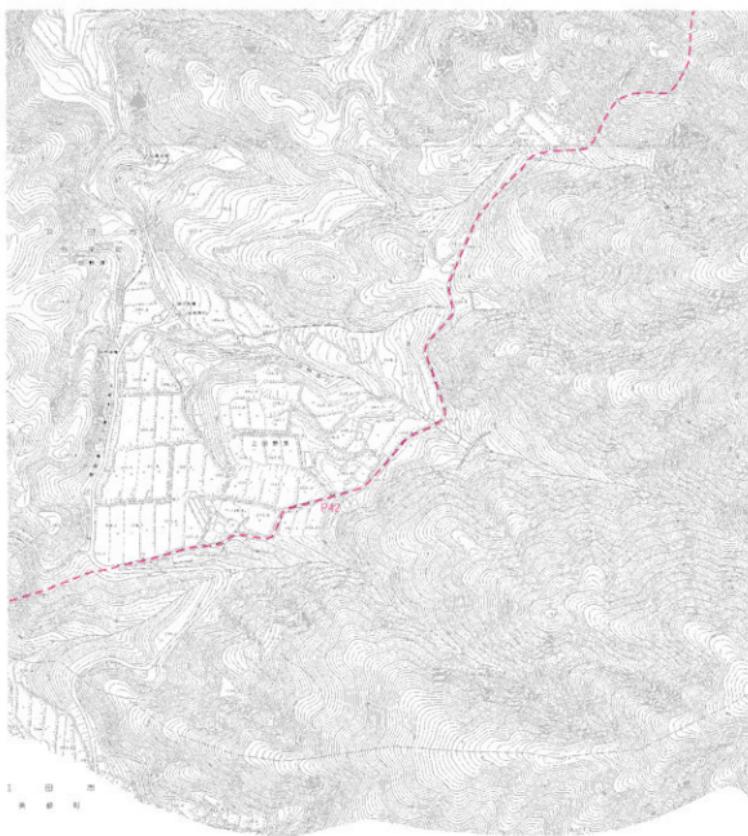


P27 矢川城跡（矢ヶ尾城跡） P42 津和野奥筋往還 P55 中屋鉢跡



4-7

P22 梨ヶ谷Ⅰ鉱跡 P23 梨ヶ谷Ⅱ鉱跡 P58 クズレイワ鉱跡

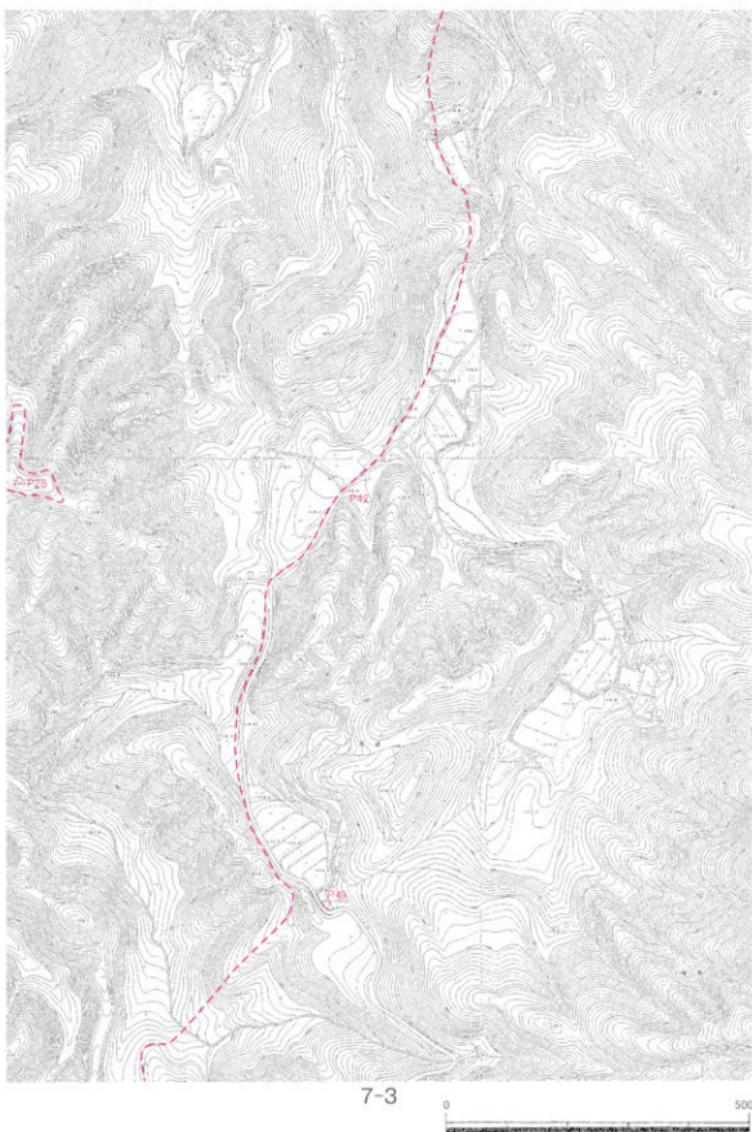


P42 津和野奥筋往還

4-6

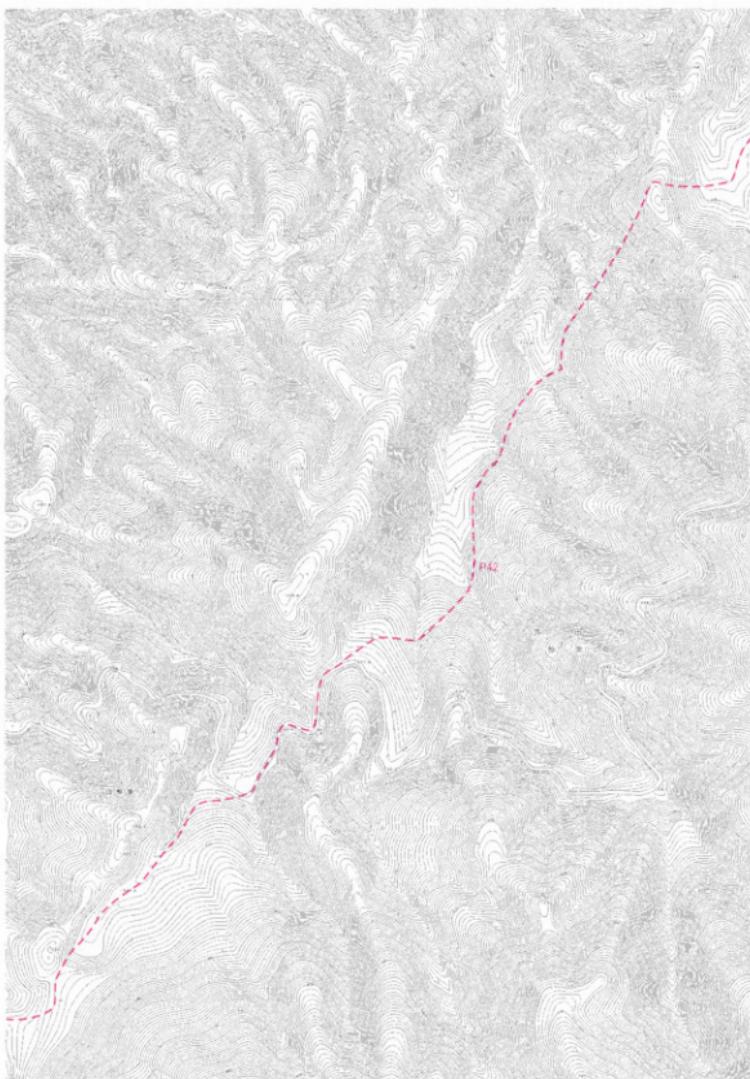
4-7

7-1



P28 城ヶ谷城跡 P42 津和野奥筋往還 P49 伊屋山鉄跡

7-2



7-3

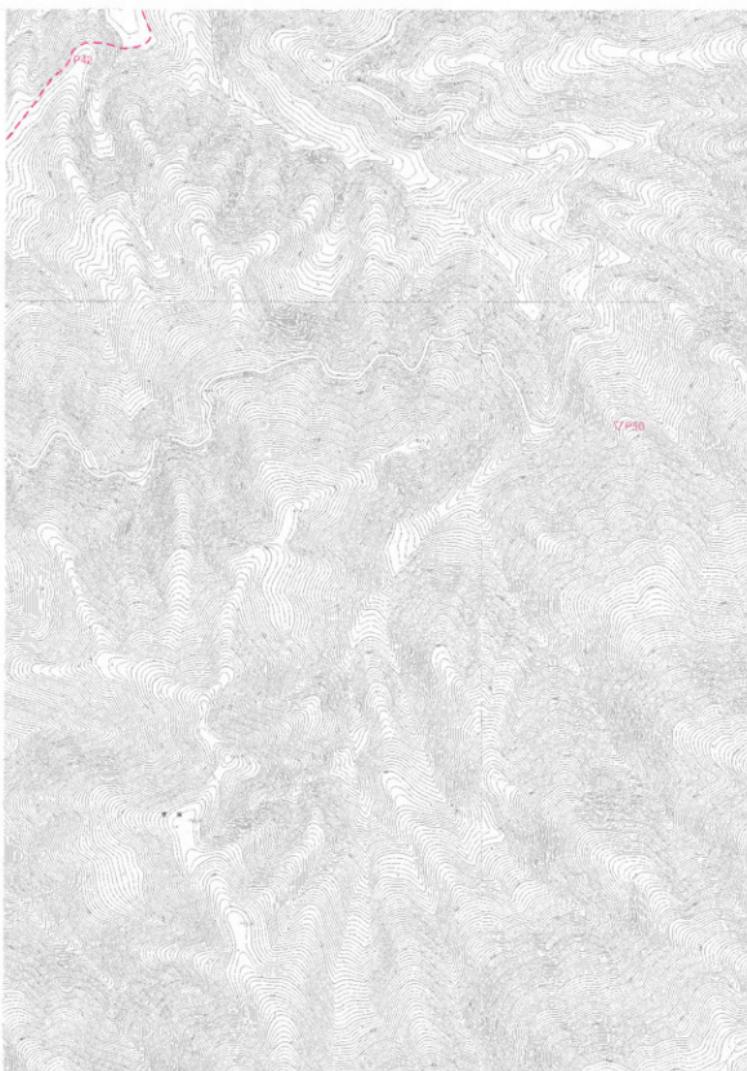


P42 津和野筋往還

7-1

7-3

7-2



P42 津和野奥筋往還 P50 熊藏鉢跡

番号	P 名 称	種 別	所在地	概 要	備 考	地図番号
1	おかさん古墳	古墳	木都賀	円墳		3・3-2
2	矢張城跡	城跡	長安本郷	山城、本丸	永安城跡	4・4-5
3	頬附跡	製鉄遺跡	柳木 頬	鉄滓、金星炉跡		2・2-2
4	大槻御跡	製鉄遺跡	大坪		消滅	3・3-5
5	高岸御跡	製鉄遺跡	門田 高原		消滅	2
6	明比谷御跡	製鉄遺跡	門田 明比谷		消滅	6
7	木都賀経塚	経塚	木都賀	円塚、壺		3・3-2
8	田屋城跡	城跡	木都賀	山城	木東城跡	3・3-2
9	小坂道跡	敷布施	小坂			4・4-2
10	大前上経塚	経塚	柳木 大前上	円塚、宝篋印塔片		4・4-2
11	千疊山城跡	城跡	小坂 城山	山城、二段郭	高木城跡、坂城跡	1
12	大鹿城跡	城跡	木都賀	田野原		7
13	鶴の山城跡	城跡	木都賀	田野原		6
14	小坂日高城跡	城跡	高内	郭		4
15	門田城跡	城跡	門田			5
16	大瀧山城跡	城跡	柳木			4・4-1
17	青尾御跡	製鉄遺跡	門田 猪進		消滅	2
18	大井谷御跡	製鉄遺跡	柳木 大井谷			1
19	道円坊御跡	製鉄遺跡	木都賀	熊の山	鉄滓	6
20	程原御跡	製鉄遺跡	程原			7
21	猪進御跡	製鉄遺跡	門田 猪進			2・2-2
22	梨ケ谷御跡	製鉄遺跡	三里 小角	梨ケ谷		4・4-8
23	梨ケ谷日御跡	製鉄遺跡	三里 小角			4・4-8
24	王子ノ原遺跡	敷布施	木都賀	土師器、須恵器	一部破壊	3・3-1
25	西ノ郷御跡	塗跡	木都賀	須恵器、土師器		3・3-1
26	高丸城跡	城跡	門田	郭、土堤		4
27	矢川城跡	城跡	大坪	郭、帶郭、腰郭、土堤、廻切、堅塀、積塀	矢ヶ尾城跡	4・4-7
28	城ヶ谷城跡	城跡	程原	郭		7・7-1
29	栗の栗城跡	城跡	程代	郭		3
30	火の山城跡	城跡	柳代	郭		4・4-4
31	大坪城跡	城跡	大坪	郭、腰郭、土堤		3
32	野坂城跡	城跡	野坂	郭、土堤		3
33	東城跡	城跡	木都賀	郭、土堤、廻切		3・3-2
34	八ノ城跡	城跡	木都賀	郭、石垣		3
35	王城跡	城跡	野坂			3
36	鷹治城跡	城跡	木都賀		猪股城跡、O79と同じ	3
37	日島城跡	城跡	木都賀	郭	O41と同じ	3・3-1
38	神代屋遺跡	築造跡	長安本郷	住居址、土師器、須恵器	一部発掘調査	4・4-5
39	奥の原古墳群	古墳	高内	前期古墳、円墳、竪穴	平塙	4・4-3
40	蓬松遺跡	敷布施	高内	須恵器		4・4-3
41	坂本古墳群	古墳	柳木	9基、方墳		4・4-2
42	津和野奥筋往還	街道跡		近世街道跡		
43	西城跡	城跡	木都賀			3・3-4
44	日高城跡	城跡	高内			2・2-3
45	古城跡	城跡	門田			5
46	明ヶ瀬御跡	製鉄遺跡	門田		消滅	2
47	上ヶ見御跡	製鉄遺跡	小坂	鉄滓	消滅	4・4-3
48	王子ノ原御跡	敷布施	木都賀	弥生土器、土師器、須恵器		3・3-2
49	伊屋山御跡	製鉄遺跡	程原			7・7-1
50	鶴敷御跡	製鉄遺跡	程原			7・7-3
51	大坪御跡	製鉄遺跡	大坪			3・3-5
52	小原ヶ谷御跡	製鉄遺跡	大坪			3・3-5
53	柳木御跡	製鉄遺跡	三里	鉄滓		5
54	松ヶ谷御跡	製鉄遺跡	三里	鉄滓 - 底塗		5
55	中屋御跡	製鉄遺跡	三里			4・4-7
56	若曾御跡	製鉄遺跡	三里			8
57	向ノ原御跡	製鉄遺跡	三里			8
58	クズレカワ御跡	製鉄遺跡	三里			4・4-8
59	大齊遺跡	敷布施	木都賀	弥生土器		3・3-2

### 主要参考文献

- 鳥根県立八雲立つ風土記の丘資料館 1976「山陰の仏教考古」  
 八雲立つ風土記の丘資料館 1978「古代の石見」  
 村上 勇 1979「山陰のやきものに関する覚え書」「松江考古」第2号 松江考古学談話会  
 弥宋村 1980「弥宋村誌」  
 村上 勇 1981「山陰の古代・中世窯」「日本やきものの集成8山陰」平凡社  
 山陰中央新報社 1981「鳥根県大百科事典」上巻・下巻  
 廣田八穂 1985「西石見の豪族と山城」  
 吉岡康鶴 1985「経外容器からみた初期中世陶器の地域相一須恵系中世陶器を中心に」『紀要 第14号』石川県立歴史資料館のち 吉岡康鶴 1991「中世須恵器の研究」吉川弘文館に収録  
 鳥根県教育委員会 1986「鳥根県立歴史資料分布調査報告書」  
 鳥根県教育委員会 1987「鳥根県立歴史資料分布調査報告書」  
 寺井敦 1991「石見福屋の櫓尾城、松山城、波佐一本松城跡の歴史認識についての考察」「鳥根考古学会誌」第8集  
 鳥根考古学会  
 平凡社 1995「日本歴史地名大系第三三巻」鳥根県の地名」

間野大介 1996「三瀬町の中世石造物」「八雲立つ風土記の丘」  
 140 鳥根県立八雲立つ風土記の丘

鳥根県教育委員会 1997「鳥根県中近世城館分布調査報告書」  
 第1集「石見の城館跡」

鳥根県教育委員会 1998「歴史の道調査報告書」津和野廿日市街道 津和野奥筋往還」鳥根県歴史の道調査報告書第六集

今岡 稔 1999「山陰の石塔二三について」鳥根考古学会誌第16集 鳥根考古学会

鳥根県教育委員会 2002「島根県遺跡地図II(石見編)」

鳥根県都賀郡ゆすべ村教育委員会 2002「長安本郷神代前遺跡」

樹林舎 2006「定本 鳥根県の歴史街道」

樹林舎 2006「島根県歴史街道地図」

郡土出版社 2009「石見ふるさと大百科」

神原博美 2010「石見国の須恵器生産と出雲産須恵器」「出雲國の形成と國府成立の研究 - 古代山陰地域の土器様相と領域性 - 」鳥根県古代文化センター

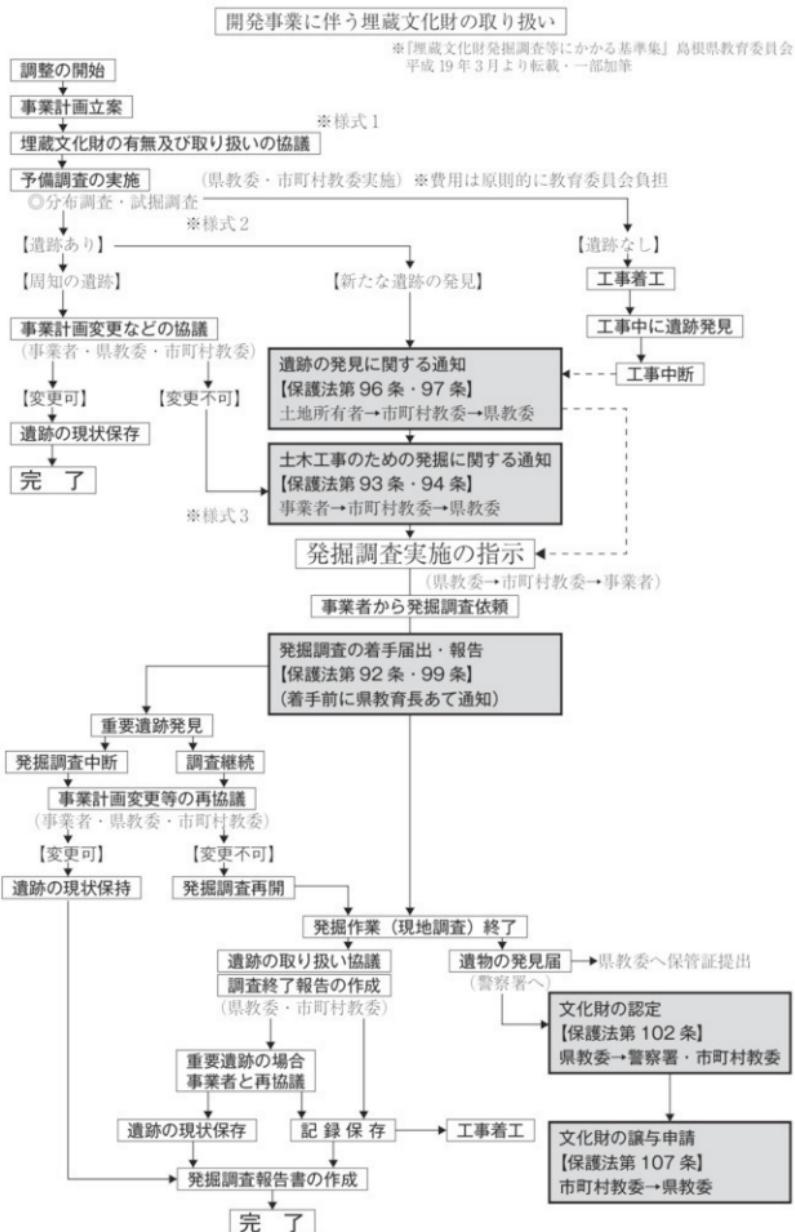
浜田市立安城公民館・ふるさと伝承同好会 2008 ~ 2010「矢懸の里」

## 浜田市内指定文化財一覧(地図番号は浜田・金城・三隅・弥栄自治会)

地図番号	道路番号	番号	区分	指定年月日	名 称	所 在 地	所有者・保持者
【国指定文化財】							
		1	彌陀	大 9. 4.15	木造阿彌陀如来立像	松原町	心靈院
		2	工芸技術	昭 44. 4.15	石州手紙	三隅町古市場	石州手紙技術者会
		3	有形民俗文化財	昭 46.12.15	渡佐の山村生産用具	金城町渡佐	西中國山地民具を守る会
国史 1	L6	4	史跡	大 10. 3. 3	石見国分寺跡	因幡町4024(道)、1521-1.1526、1527-1527號、1.1528.1.1528-1.1528.4、1530-1531.1534-1.1534-2.1548-1	金成寺
国史 2	L49	5	史跡	昭 11.12.16	周吉古墳	治和町1009-1	個人
国史 3	L13	6	史跡	昭 12. 6.15	下府摩寺塔跡	下府町632-4	浜田市
						国分寺 1187.1.1979-1、1982-1.1982-2、1983-1984、1985-1.1985-2.1986.1987、1988-1989-1.1989-2.1989-3.1989-4.2.2007-1、2207-2.2208.2.2209-1.2209-2.2209-3.2209-4.2210-1.2210-2.2210-3.2210-4.2210-5.2210-6.2210-7.2210-8.2210-9.2210-10.2210-11、2210-12.2210-13	国・市・民
国天 2		8	天然記念物	昭 10. 4.11	三鷹大字板	三隅町矢原 1262-274-1	個人
【鳥取県指定文化財】							
		9	彌陀	昭 47. 2.28	桧木黒削彌陀大師山線起	三隅町室谷	大麻山神社
		10	彌陀	昭 32. 6.12	木造迦陵童子立像	三隅町三隅	法正寺
		11	彌陀	昭 42. 5.30	木造阿彌陀佛	生湯町	多陀寺
		12	彌陀	昭 43. 6. 7	木造善光寺如来坐像	三隅町三隅	法正寺
		13	青銅	昭 32. 6.12	純木黒削大般若經	三隅町芦谷	鶴善寺
		14	古文書	平 12. 12.28	紙本香色見石國總	黒川町 浜田市浜田郷土資料館	浜田市
		15	古文資料	昭 35. 9.20	めんくろ古墳出土品	治和町	個人
		16	有形民俗文化財	昭 47. 7.28	渡佐の山村生活用具	金城町波波	西中國山地民具を守る会
		17	有形民俗文化財	昭 32. 6.12	丹井神業	鷲町井野	井野神業保持者会
		18	有形民俗文化財	昭 35. 3.26	有福神	下有福町	有福神業保持者会
		19	有形民俗文化財	昭 40. 4. 1	黒坂御子田	三隅町黒沢	黒坂御子田保存会
県史 1	L7	20	史跡	昭 33. 8. 1	石見国分寺跡	国分町 216.217.225.5.1886-1.1886-2.1886-3	国分寺
県史 2	L27	21	史跡	昭 31. 6.12	由田城跡	駿河町 123-1.123-6.123-10.131-1.131-4	浜田市
県史 3	L5	22	史跡	昭 42. 5.30	石見国分寺瓦窯跡	国分寺 408-1	浜田市
県天 1		23	天然記念物	昭 41. 5.31	黄長石霞玄武岩	長浜町 276-1	個人
県天 2		24	天然記念物	昭 47. 3.31	常盤山の杉	金城町波佐	八幡宮(波佐常盤山八幡宮)
県天 3		25	天然記念物	昭 47. 3.31	安長本郡の八幡宮並木杉	弥栄町安長本郷	八幡宮(安長八幡宮)
【浜田市指定文化財】							
		26	繪画	昭 41.11. 3	板絵着色垂口ヶ島傳説圖	瀬戸ヶ島町	瀬戸ヶ島神社
		27	繪画	昭 48. 6. 3	南本著色石門源義祖相	清水町	洞泉寺
		28	繪画	昭 48. 6. 3	南本著色佐望聖母	因布町	淨琳寺
		29	繪画	昭 48. 6. 3	南本著色聖母	黒川町	浜田高等学校同窓会
		30	繪画	昭 48. 5. 3	無題「小林高吉筆絵師味布」	野原町 浜田市世界こども美術館	浜田市
		31	繪画	昭 56. 3.29	云雀海岸の三佛西輪	三隅町芦谷	徳雲寺
		32	繪画	平 14. 2.22	紙本著色仏涅槃圖	因布町	瀬戸ヶ島神社
		33	繪画	平 14. 2.22	船鉈馬	瀬戸ヶ島町	瀬戸ヶ島神社
		34	彌陀	昭 51. 3.25	木造北山開基院久親王殿立像	黒川町 浜田市浜田郷土資料館	浜田市
		35	彌陀	平 7. 3.28	木造阿彌陀如來半坐像	三隅町芦谷	龍雲寺
		36	彌陀	平 7. 3.28	木造阿彌陀如來立像	三隅町添浦	極樂寺
		37	工芸品	昭 44.11. 3	箆絵	久代町	石見安達美術館
		38	工芸品	昭 44.11. 3	刀刃	久代町	石見安達美術館
		39	工芸品	昭 48. 5. 1	五方	駿町	浜田護國神社
		40	工芸品	昭 51. 2.25	刀 月 4日	久代町	石見安達美術館
		41	工芸品	昭 56. 3.28	古和・尊弘	三隅町上古和	個人
		42	工芸品	平 14. 2.22	和船模型	瀬戸ヶ島町	瀬戸ヶ島神社
		43	工芸品	平 14. 2.22	漆朱の桐刷毛妻襷二枚組足具羽輪鉢兜付	野原町 浜田市世界こども美術館	浜田市
		44	工芸品	平 20. 7.23	如来坐像	金城町今福	安樂寺
		45	青銅	昭 48. 5. 1	紙本黒削大般若経	大沢町	福智寺
		46	青銅	昭 56. 3.28	鏡面朱金金剛經	三隅町芦谷	瀬戸ヶ島
		47	青銅	昭 44.11. 3	紙本高僧升宗崇著書	治和町	個人
		48	古文書	昭 56. 3.28	透写高僧文書	三隅町圓見	個人
		49	古文書	昭 56. 3.28	二月仲古文書	三隅町三隅	二月神社
		50	古文書	平 7. 3.28	諸國の御利軒	外ノ浦町	個人
		51	古文書	平 9. 7.11	石見国勘定帳	高佐町	個人
		52	古文書	平 9. 7.11	浜田城下町貢納統領	高佐町	個人
		53	古文書	平 9. 7.11	浜田城下町貢納統領	蛭子町	個人
		54	古文書	平 9. 7.11	自負鍛造主浜浦海岸鉢	外ノ浦町	個人
		55	古文書	平 14. 2.22	透写御内和帽	外ノ浦町	個人
		56	古文書	平 14. 2.22	紙本黒削神榮台本	因布町	個人
		57	古文書	平 20. 7.23	吉川元昌・元兵連署安堵狀	金城町今福	安樂寺
		58	古文資料	昭 58.12.20	金目 1号噴出土品	金城町 浜田市金城歴史民俗資料館	浜田市
		59	古文資料	平 7. 3.28	鷹石磨削出土品	黒川町 浜田市浜田郷土資料館	浜田市
		60	古文資料	平 7. 3.28	南高麗生煎油立	黒川町 浜田市浜田郷土資料館	浜田市
		61	歴史資料	平 9. 7.11	石見国大保園国壁紙改切繪圖	黒川町 浜田市浜田郷土資料館	浜田市
		62	歴史資料	平 20. 7.23	能吏覽著寶資料	金城町 浜田市金城歴史民俗資料館	浜田市
		63	有形民俗文化財	昭 48. 5. 1	獅子頭	片庭町	個人
		64	有形民俗文化財	昭 48. 5. 1	獅子頭	日脚町	天人岡八幡宮

65	有形民俗文化財	平 14. 222	神楽木耶面	下有知町 上府町 佐野町 長浜町 日御町 内村町 田横町 鴻石町	有福神樂保持者会 石見神代神樂上府町中 石見神乐佐野神樂社中 石見神樂長浜町中 日御神代神樂社中 個人 石見神樂美川西神樂保存会 鴻石神樂社中	
市史 1	L10	66	史跡	昭 44.11. 3 片山古墳	下府町 1930 荒町町口 527.5m 内 1.537.1537.2538.538 附 1 個人	
市史 2	L43	67	史跡	昭 44.11. 3 喜多城跡	荒町町口 92.5m 1.92.3528.529.531.532.533 536.536.内 1.537.内 1.537.3.537.4.537.5.537.6 個人	
市史 3		68	史跡	昭 51. 325 東海御生之墓	喜光町 63 外ノノ町 1489-2	越谷寺
市史 4	L26	69	史跡	昭 51. 325 日和山丸角石	浜田市	
市史 9	O74	70	史跡	昭 56. 328 正法寺の院	二瀬町三瀬 1722-3	正法寺
市史 10	O18	71	史跡	昭 56. 328 等次の墓	二瀬町黒沢	個人
市史 11	O20	72	史跡	昭 56. 328 大和町山道中石	二瀬町東平原、二瀬町室谷	個人
市史 12	O65	73	史跡	昭 56. 328 成田郡・舟出記念碑	三瀬町三瀬 407-10	浜田市
市史 13	O76	74	史跡	昭 56. 328 佐野水道	三瀬町井川	個人
市史 14	O77	75	史跡	昭 56. 328 鮎吉法輪寺	三瀬町三瀬	個人
市史 15	N5-1	76	史跡	昭 58.12.26 金田1号墳	金城町下采原 1334-3	個人
市史 16	N71	77	史跡	昭 58.12.26 金田2号石器遺	金城町波佐	個人
市史 8	N8	78	史跡	昭 62.12.18 波佐一松城跡及び岡邊施設	金城町波佐	個人
市史 5	L22	79	史跡	平 14. 222 上条通跡（城山崩壊出土地）	上府町 224-5	大歳神社
市天 1		80	天然記念物	昭 44.11. 3 ピロードンダ及び群生地	河内町	個人
市天 2		81	天然記念物	昭 44.11. 3 多尾のクスノキ	生湯町 1767	多陀寺
市天 3		82	天然記念物	昭 44.11. 3 多尾のヒノキ	生湯町 1767	多陀寺
市天 4		83	天然記念物	昭 48. 5 多尾のシイ・タブ林	生湯町 1767	多陀寺
市天 5		84	天然記念物	昭 48. 5 (伊賀神社の)シヨウ	下府町 935-2	伊賀神社
市天 6		85	天然記念物	昭 48. 5 (伊賀神社の)ムクノキ	下府町 935-2	伊賀神社
市天 7-1				金城町の巨樹・錦木		
市天 7-2				大久保のシキミ群生	金城町今福 1531	個人
市天 7-3				大久保の木ズミサシ	金城町今福 1531	個人
市天 7-4				大久保のヒヨクシバ	金城町今福 406	個人
市天 7-5				大久保のエノキ	金城町今福 415	個人
市天 7-6				山藤のクロマツ	金城町今福 111	個人
市天 7-7				下大岳のシキミ	金城町今佐イ 1024-4	個人
市天 7-8				大綿糸社のスダジイ及びエノキ巨樹	金城町今佐イ 1277	個人
市天 7-9				新開町のシコク	金城町七条イ 1035	新開町内会
市天 7-10				伊木八幡宮の大フジ	金城町七条口 415	伊木八幡宮
市天 7-11				伊木八幡宮のイチイガシ	金城町七条口 415	伊木八幡宮
市天 7-12				上栗原大元社のタブなど巨樹群	金城町上栗原 63-1	個人
市天 7-13				大谷のシマガキ	金城町上栗原 628	個人
市天 7-14				山上のアベマキ	金城町上栗原人見田	個人
市天 7-15				光祖寺の大イチョウ	金城町小国ハ 239-3	光祖寺
市天 7-16				不老坂のヤツリギ巨樹及びケヤキ巨樹群	金城町波佐イ 1097-1.11097-3	個人
【登録文化財】				菅足の大モミ	金城町波佐イ 1190	個人・平 21. 615 痕死のため指定解除
市天 7-17				水呑寺の大スギ	金城町波佐イ 1192-1	水呑寺
市天 7-18				千谷寺の連理のモミジ	金城町波佐イ 1202	個人
市天 7-19				長田郷の大エノキ	金城町長田イ 25	個人
市天 7-20				東谷の大ガシ	金城町長田イ 396-2	個人
市天 7-21				淨蓮寺のハクモクレン	金城町長田イ 356-4	個人
市天 7-22				吉井のケヤキ巨樹群	金城町波佐イ 1310	個人
市天 7-23				吉井の木のモミジ	金城町波佐イ 1351-2	個人
市天 7-24				鶴鳴のカツラ	金城町波佐イ 1319-41	個人
市天 8		87	天然記念物	平 7. 3.28 お美月1号墳	三瀬町井野ハ 782	個人
市天 9		88	天然記念物	平 17. 9.22 各々木板	三瀬町三瀬 666-3	個人
市天 10		89	天然記念物	平 17. 9.22 海老谷板	三瀬町向野田 935-4	個人

### 第3章 埋蔵文化財の事務手続きフロー



※様式1

第 年 月 日  
号

浜田市教育委員会教育長 様

浜田市教育委員会教育長 様

平成 年 月 日  
年 月 日

浜田市教育委員会教育長 様

土地所有者

住所

住所

氏名

氏名

㊞

㊞

住所

発掘調査承諾書

文化財等の有無及び取扱いについて（協議）

このたび下記のとおり開発工事を計画していますので、文化財等の有

無及び取扱いについて協議します。

また、計画地立ち入りと予備調査（現地確認等）の協力に同意します。

1 開発事業名

2 開発計画場所

3 施行面積 (m<sup>2</sup>)

4 開発予定期間

5 その他（回答希望時期など）

添付書類

◎位置図 (1/25,000) • 計画図 (工事画面、地籍図など)

※様式2

浜田市が実施する埋蔵文化財調査について、下記のとおり承諾します。

記

1. 調査場所

浜田市

番地

2. 調査期間

平成 年 月 日～平成 年 月 日

3. その他

埋蔵文化財に関する権利を放棄し、浜田市教育委員会に

一任する。

### ※様式3

第2号様式

別記

93条第1項・94条第1項 (○で囲むこと)

鳥取県教育委員会教務長 権

私文書登録等

年 月 日

1. 所在地	2. 面積	3. 土地所有者
住所 氏名等	印	住所 氏名等
4. 地形の種類		
敷地面積　農地　贝冢　官地跡　城跡跡　社寺跡　古墳 橋穴墓　その他の墓　生産地　その他の遺跡（ ）		
5. 遺跡の名称		
宅地　木田　細地　山林　道路　荒地等　原野　その他（ ）		
6. 遺跡の現状		
石垣　礎文　外生　古墳　奈良　平安　中世　近世　その他の（ ）		
7. 遺跡の時代		
過熟　新道　空港　河川　港湾　ダム　学校建設　集合住宅　個人住宅 工場　店舗　個人住宅兼工場又は工場　その他の建物（ ）		
8. 工事の目的		
宅地造成　土地区画整理　公園造成　ブルーム　觀光開発 ガス、電気、水道等　農業基盤整備事業（農道等を含む） その他の農業関係事業　土地保険　その他の（ ）		
9. 工事の種類		
10. 工事主体者		
11. 施行責任者		
12. 参照者の所在		
13. 当該土木工事等の施工担当者の氏名及び住所		
14. 土木工事等をしようとする土地の所在及び地番		
15. 土木工事等をしようとする土地の所有者の氏名又は名称及び住所		
16. 当該土木工事等の主体となる者（当該土木工事等が請負契約等によりなされるとときは、契約の当事者）の氏名及び住所（法人その他の団体の場合、その名称及び代表者の氏名並びに事務所の所在）		
17. 当該土木工事等の施工担当者の氏名及び住所		
18. 当該土木工事等の着手の予定期間		
19. 当該土木工事等の終了の予定期間		
20. その他参考となるべき事項		

【注意事項】 ①太枠内は届出・通知書が記入。②指導事項欄は監督教育委員会で記入。  
③遺跡の種類・現状・時代及び工事の目的欄は該当項目を○で囲み、該当項目のない場合は（ ）内に記入。

別付書類1

土木工事等をしようとする土地及びその付近の施設並びに当該土木工事等の概要を示す書類及  
び図面

#### 第4章 弥栄自治区の埋蔵文化財について

弥栄自治区（市町村合併以前の那賀郡弥栄村）では、平成10年度から試掘調査等が行なわれ、平成13年度に初めて神代屋遺跡で発掘調査が行なわれた。それ以前は弥栄村誌で一部の埋蔵文化財の写真等が掲載されるのみであった。今回の遺跡地図作成に伴う分布調査結果と1988年頃の島根県埋蔵文化財包蔵地調査カード等を基に、主な埋蔵文化財の概要を時代順に紹介する。

#### P24 王子ヶ原遺跡（第2図7、8）

弥栄町木都賀西の郷に所在する遺物散布地だが、以前の出土地点や実物は不明確である。近くの台地上にある王子家の屋号が「王子ヶ原」である。谷側は圃場整備のため不明確だが、水田面から1段高い畠部分に弥生土器と須恵器が散布している。弥生土器は細片のため図化していないが、(7)は糸切り底の須恵器・(8)は須恵器の甕片で内面に同心円の当具痕が残る。また、東側へ続く低丘陵一帯も大部分で圃場整備が行なわれている。低丘陵上の宅地周辺で弥生土器や須恵器片が採取でき、王子ヶ原東遺跡（P48）とした。低丘陵上から南側の谷斜面に遺跡が所在したと見られる。

#### P39 奥の原古墳群（第1図・第2図1、2）

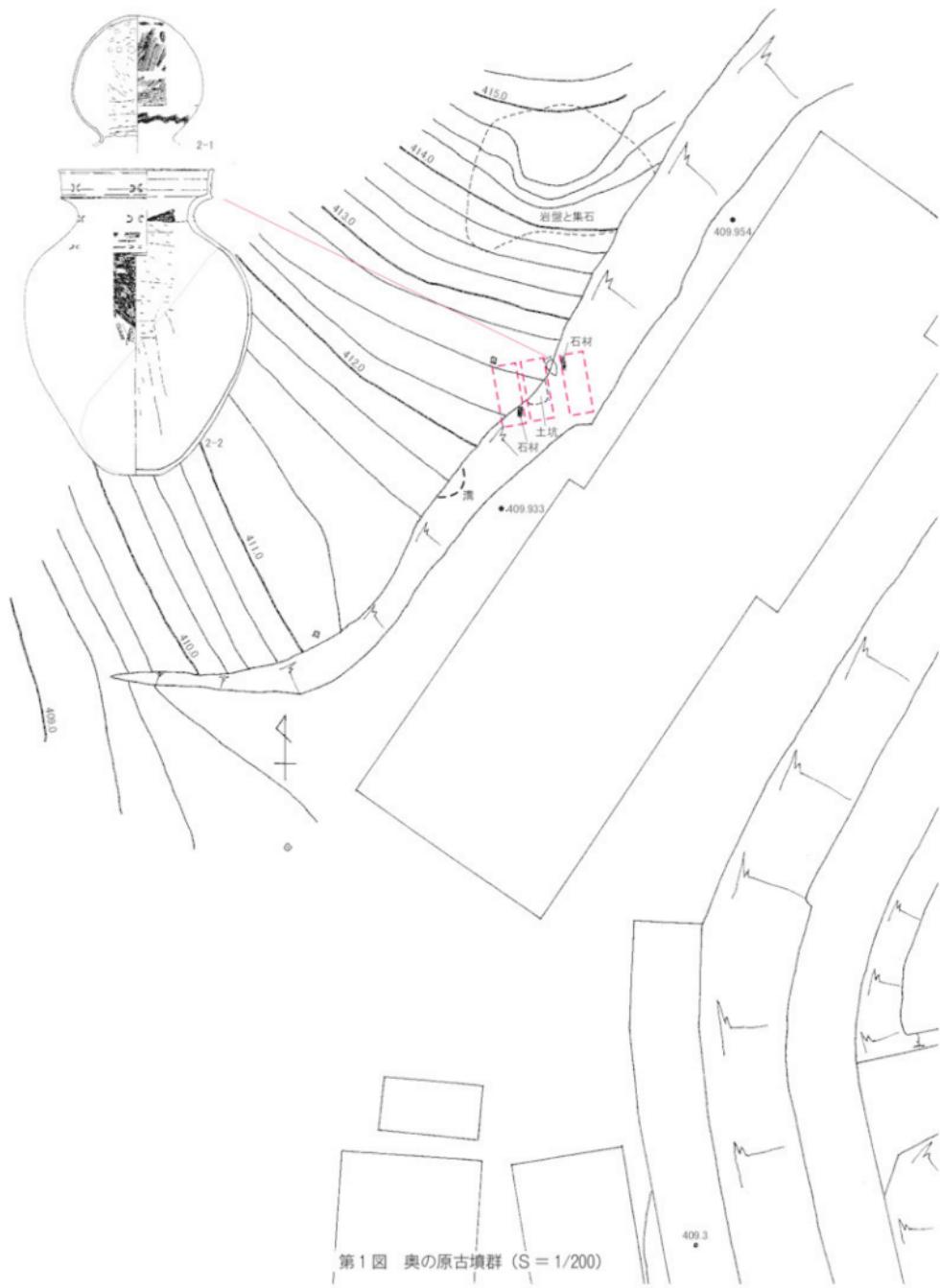
浜田市弥栄町高内日高に所在する古墳である。南方向に延びる丘陵上に位置する。丘陵西側は笠が茂り地形が不明確で古墳が所在する可能性もある。平成7年頃に現在の丘陵西側の標高約411.5m以下を平坦に造成しており、現況では丘陵尾根の西側がかなり広くなる。もともと尾根筋は細く南側へ延び東側が削平されたようである。平成12年5月に宅地後の丘陵を削った際に土器棺が露出した。当時の写真と記録から隣接して石材も見られ、断面観察で主体部4（中央に土坑1・左右に石棺2・土器棺1）・溝1が確認されている。土坑の底面レベルが深い順で中央土坑→東石棺→西石棺→土器棺となり、築造順を示す可能性がある。断面の溝は古墳の周溝の可能性もあるが、上面は整地されており方向は不明である。

現地の略測を行い、崖面と遺構の位置は当時の記録と合成した（第1図）。崖面は崩壊が進み、當時露出していた溝や土坑・石の断面は実見できなかつたため不明確な点も多い。

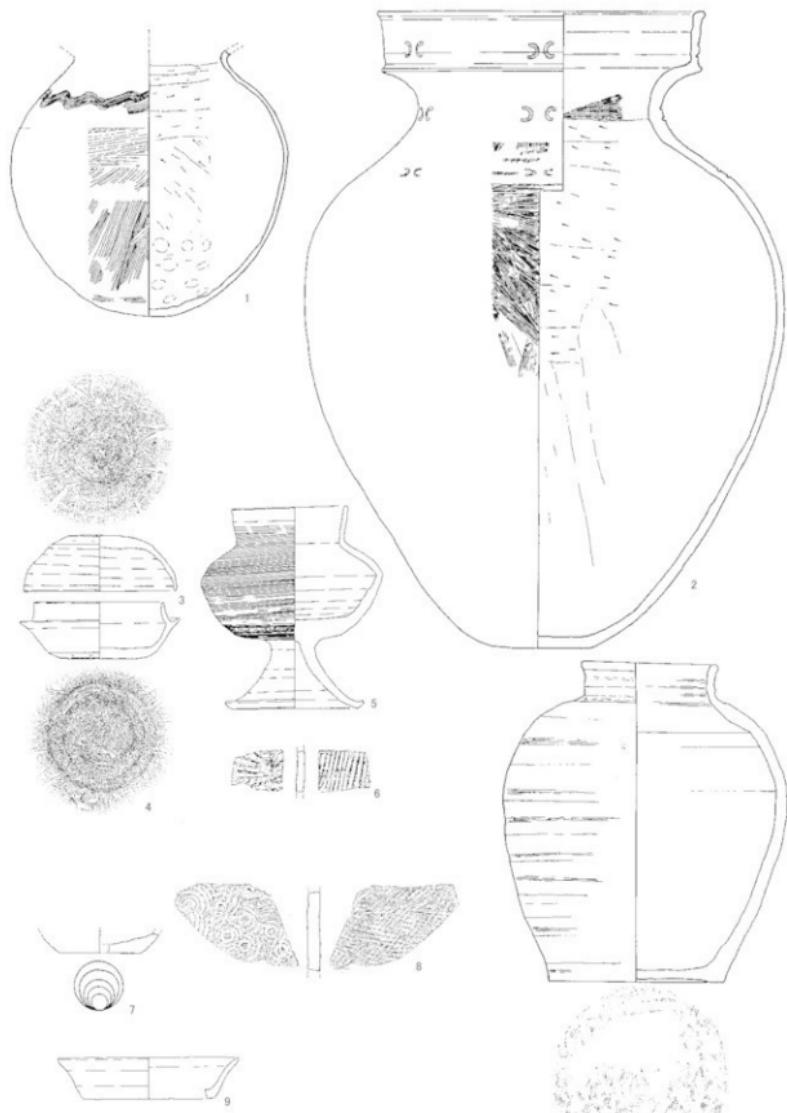
なお、遺構よりやや高所に風化した岩盤と集石があり直径5~7m・高さ1mほどの不正円形のたかまりになっている。積石の墳丘のようにもみえるが、丘陵に露出した岩盤が風化して細く碎け、開墾等による集石が行なわれたようにも見える。集石の間には近代のガラス片や石見焼も見られ、近年まで集積が行われている。測量図より北側には宅地跡の平坦面が残っている。集石には江戸時代中頃（17世紀末）以降の遺物が見られ、肥前系陶磁器の陶胎染付椀・広東形椀・須佐唐津焼や鉄滓もある。この地域は近世には津和野藩領にあたり、西側の谷を津和野奥筋往還（P42）が通っている。なお、発掘調査が行われた神代屋遺跡でも肥前系陶磁器等の近世遺物が出土している。

周辺が削平されたためか、主体部は確認されたが明確な墳丘は認められない。高所側は先述の露出する岩盤の下場と見られる。南側は先述の溝あたりと見られるが、墳丘規模に対して溝が大きすぎる印象もある。現段階で、最大約14mの大きさになる。なお、浜田市（旧那賀郡）山間部では金城町波佐の千年比丘1号墳が直径15m・高さ2m程の円墳で山頂に造られている（金城町教育委員会1994）。主体部は小型の南主体が長さ約22.4m・幅0.8mで今回の復元にも参照している。図上の復元だが奥の原古墳は千年比丘1号墳よりやや後出の小型前期古墳と見られるが、墳形は不明である。

土器棺は弥栄小学校内の弥栄郷土資料室に展示されている（第2図1・2）。口縁を打ちかいた小型甕の蓋（1）と大型甕（2）の身がある。おおまかに古墳時代前半・益田平野の古墳時代の土器編年1期（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター2010）である。大型甕の複合口縁が直立する点や部体と口縁に竹管状の紋様を施す点から、概ね在地系土器とみられる。大型甕の口縁端部内面に帶状に黒漆が付着しており、蓋の密閉に用いられた可能性がある。甕は内外面に煤が付着する。



第1図 奥の原古墳群 ( $S = 1/200$ )



1・2 奥の原古墳群 10 木都賀經塚 村上 1979より転載  
 3・6 遠越遺跡  
 7・8 王子ヶ原遺跡  
 9 西ノ郷塚跡

0 1 20cm

第2図 弥栄町内出土遺物

#### P40 遠越遺跡（第2図3～6）

浜田市弥栄町高内日高に所在し、昭和18年頃の災害時に斜面が崩落し須恵器の蓋1・杯1・脚付短頭壺1・甕片1が出土し弥栄村誌にも掲載されている。周辺の現地確認では基本的に東向きの斜面から出土したようだが、位置は特定できなかった。谷側には津和野奥筋往還（P42）が通っている。道路沿いの崖面上に自然石を立てた墓地があり、道路直上に集石も見られることからこの付近出土の可能性がある。（3）は蓋で口径12.5cm・器高4.6cmである。（4）は杯で受部径13.2cm・器高4.65cmである。底部には回転ヘラケズリのち、中心約1.5～2cmの範囲に板状圧痕が残る。（5）は脚付短頭壺で口径9.5cm・器高16.6cm・脚部径10.4cmである。（6）は甕の破片で内面に放射状の当具痕が残る。須恵器杯は、底部が平坦で板状圧痕が残る「石見型」の杯（浜田市教育委員会2008）だが、板状圧痕のつく範囲は狭い。脚付短頭壺は浜田市森ヶ曾根古墳（浜田市教育委員会1986）で同様の器種が出土している。石見の須恵器編年4～5・6a期（柳原2010）と考えられる。先述の前期古墳である奥の原古墳群と同地域にあり、遠越遺跡は遺物が完形に近く時期的に横穴式石室をもつ後期古墳の可能性がある。

#### P25 西ノ郷窯跡（第2図9・第3図）

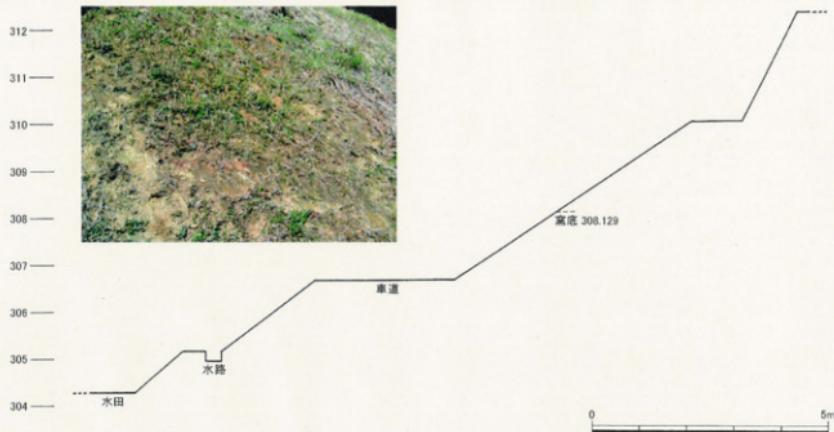
浜田市弥栄町木本賀西の郷に所在し、弥栄で唯一の須恵器窯跡である。約20年前に道路で法面を削平した際に幅1.55m×高さ2m程の窯窓断面が露出し、須恵器が出土している。床面は現在の車道から1.4m上の位置にあたり、かつては周辺に須恵器（甕片）や窯壁片があったようである。現状では斜面に草が生えており、かろうじて焼土が断面で観察できるが遺物はほとんど見られない。車道と水路の間の斜面で須恵器を2点採取した。（9）は須恵器の皿で復元口径14.6cm・底径10.6cm・器高3.4cmで平安時代頃と見られる。窯は小型で出土品も少なく、複数の窯床面も見られないようである。おおまかに平安時代初めころの短期間の操業と見られる。古代には那賀郡杵東郷にあたり、周辺の遺跡には王子ヶ原遺跡（P24）、やや離れて神代屋遺跡（P38）があり、窯の規模からみても須恵器の流通範囲は狭かったと見られる（柳原2010）。

#### P7 木本賀経塚（第2図10）

浜田市弥栄町木本賀の真宗淨久寺裏山頂上にあり、西の郷川側の平地からの比高は約43mである。直径6.5～6.7m・高さ0.9mの円丘があり、30～40cm大の自然の山石が多く見られる。かつて塚頂部の下から壺が見つかり、中は空だったとのことで弥栄村誌にも掲載されている。現在は墳頂に「千部塚」の石碑が建てられ五輪塔も置かれているが、2個体が混在しており旧状は不明である。

この塚から出土した須恵器系中世陶器の壺は以前から紹介されている（第2図10・村上1979）。現在は島根県立古代出雲歴史博物館に寄託されている。器高26cm・底径14cm・口径11cmで、口縁外側が茶褐色だが全体は灰褐色でやや軟質な焼成である。島根県立八雲立つ風土記の丘資料館1976では「須恵賀経筒」、村上1979では「器壁などは備前焼の特徴をそなえているが土質の感じなどが異なる」「備前焼であろう」、村上1981では「叩き目痕をもたない壺類」、吉岡1985では「備前窯の製品で16世紀代の廻国納経盛行期に属する小形壺」とされている。

他に在地産の可能性のある須恵器系中世陶器では、益田市農田神社経筒（島根県立博物館1981）のうち須恵質の壺が器高18cm・底径9.8cm・口径12.3cmと、木本賀経塚の壺よりやや小型で口径が広い。また、在地産の土器（壺器系か）は益田市美都町宇津川の丸子山遺跡（益田市教育委員会2010）で集石群の中央で北宋錢を入れた壺が出土している。器高43cm・底径14cm・口径20.5cmとやや大型で胴部が約41cmと張り出す。全面にロクロナデ痕が残り、内面はヨコハケが施されている。（柳原）



第3図 西ノ郷窯跡

参考文献（32頁の弥栄自治区関連以外）

島根県立博物館 1981『石見の美術と文化財』

浜田市教育委員会 1986『周布小建設予定地内埋蔵文化財（森ヶ曾根古墳）発掘調査報告書』

金城町教育委員会 1994『波佐（島根県那賀郡金城町波佐地区における考古学的調査）』

浜田市教育委員会 2008『蔵地宅後古墳』

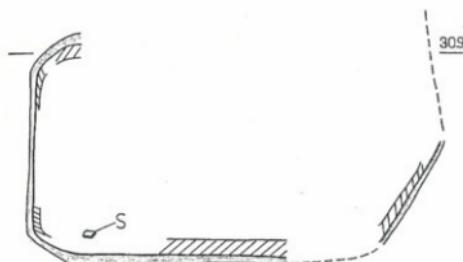
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010『久城東遺跡・若葉台遺跡・久城西Ⅰ遺跡・久城西Ⅱ遺跡・原浜遺跡』

柳原博英 2010『石見国の須恵器生産と出雲產須恵器』『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』島根県古代文化センター

益田市教育委員会 2010『丸子山遺跡』

現地では窯跡の酸化層・還元層が断片的に観察できる。

露出している断面が窯の長軸に直行しているか不明であるが、露出部の規模は最大幅 1.7m、高さ 0.85m で不整形である。東側は不明瞭ではあるが、上方に赤褐色の酸化層が伸びているのが確認できる。現状では酸化層は一面しか観察できず、最大厚は 5cm を測る。還元層は下部で 7cm 程度確認できる。



西ノ郷窯跡断面図(S=1/20) 塗りつぶし部・赤褐色土(酸化層)  
斜 線 部・暗青灰色土(還元層)



奥の原古墳群



奥の原古墳群 出土遺物（第2図1）



奥の原古墳群 出土遺物（第2図2）



奥の原古墳群 壺棺復元



遠越遺跡 出土遺物



遠越遺跡 出土遺物（第2図3）



遠越遺跡 出土遺物（第2図4）



西ノ郷窯跡 表採遺物（左・第2図9）

## 第5章 浜田城下町の試掘調査

### 第1節 調査の経過

平成 21 年 10 月 13 日付で松江刑務所より浜田市殿町・松原町の国有地についての不動産鑑定依頼があった。現地確認の結果、現地は建物（官舎）解体後に更地になっていたが、浜田城跡の東側の市街地で江戸時代には城の大手口と町の北側にあたり、中世の港町など埋蔵文化財の存在する可能性があると判断された。このため、平成 22 年 3 月 5 日付で地下の状況が不明確なため試掘調査を実施したいという回答を行った。

試掘調査は平成 22 年 6 月 1 日から平成 22 年 8 月 6 日に実施した。調査地番は浜田市殿町 79 番地 47・松原町 268 番地 5、調査面積は 25m<sup>2</sup>（2 地点）である。

調査の結果、殿町で近世の浜田城下町に関する石列・弥生時代や近世の遺物が確認され、松原町でも江戸時代の遺物が出土した。このため 8 月 1 日に殿町の現地説明会を実施し、51 名の参加があった。現地はその後埋め戻しを行い、平成 23 年現在、更地の状態である。

文化財保護法に基づき、平成 22 年 8 月 24 日付で遺跡発見通知書が松江刑務所から浜田市教育委員会経由で島根県教育委員会へ提出された。これに基づき、遺跡名は浜田城下町遺跡（殿町 79 番地 47）、浜田城下町遺跡（松原町 268 番地 5）としている。

なお、浜田城跡は現在の城山の一部が昭和 37 年に島根県指定史跡に指定され、浜田市 HP (<http://www.city.hamada.shimane.jp/>) に城の概要が掲載されている。周辺の発掘調査結果は以下の報告書に掲載されており、島根県遺跡資料リポジトリ (<http://rar.lib.shimane-u.ac.jp/Repository/>) から PDF ファイルが利用できる。

浜田市教育委員会 2007 『浜田城跡（庭園跡の調査 1）』

浜田市教育委員会 2007 『浜田城跡（庭園跡の調査 2）』

浜田城は元和 5 年（1619）に古田大膳大夫重治が松坂から浜田に国替になり、益田・三隅・周布などを検分し、現在の場所に築かれた。元和 9 年（1623）には城と城下の諸工事を完了したと伝えられている。本丸には高さ約 14 m の三重櫓（天守）があり、城内にはこの外に櫓はなかった。二ノ丸には櫓台、焼硝蔵、本丸常番所、時打番所、三ノ丸には諸役所、土蔵、表屋敷、南屋敷などがあった。城門は一ノ門、二ノ門、中ノ門、大手門などがあり、二ノ門、中ノ門は多門造りで他は冠木門であった。さらにタ日ヶ丘の西側には庭園、茶屋等が設けられていた（浜田市教育委員会 2002・2005）。

浜田藩は古田家 2 代 30 年・松平周防守家 5 代 111 年・本多中務家 3 代 11 年・松平周防守家 4 代 68 年・松平右近将監家 4 代 31 年と続く。慶応 2 年（1866）の第二次長州戦争の際に城と城下が焼かれた。しかしすべて焼失はせず、天守などは残っていたと考えられている。

おおまかに、浜田川を挟んで北東側・浜田城周辺には侍町があり、北東側の松原海岸には松原浦の集落がある。浜田川の南側が、江戸時代には浜田八町と呼ばれた町人町で、西側に一部侍屋敷があった。寺院は浜田八町の北西側に多い。

### 第2節 層序と遺構

殿町 79 番地 47 2m × 5m 拡張後 15m<sup>2</sup> 現地標高 2.2m

表土下は近年まで官舎として用いられていたため、コンクリート基礎などが確認され、近現代の遺物が多く出土する。調査区東側は地表下約 0.8m（標高 1.4m）から砂層になり、近世の遺物が出土する。地表下約 1.45m からは粘質土になり、砂層から堆積状況が変わる。砂層下位（第 14 層）より下では遺物は出土しなかった。第 18 層（暗灰色粘土）中の炭化物の<sup>14</sup>C 年代測定（第 4 節参照）では、365 ± 20yrBP (AD1467 – 1516 AD1596 – 1618 : σ) の年代が得られている。中世後期から近世初頭には湿地帯で、その後砂が堆積した可能性がある。出土遺物には弥生時代や室町時代頃に廻るものも数点ある。

遺構（生活）面は第 13 層の砂層上面とその下の第 17 層の粘質土上面と見られる。調査区西側で第

13層の砂層上面にあたるレベルで石積みと $0.6 \times 0.4m$ 大の3個以上の石列を確認した。石列の下場は地表下約1.7mになる。石は流紋岩で西側にノミで加工した平坦面を2列以上揃えて据え、基礎石のみが残っている。本来はさらに上に石が積まれ、塀などが立っていた可能性がある。石列の上と西側が焼土で覆われ、東側には裏込めとみられる石積列が残り焼土は石積で止まっている。

石列下の第17層上面では土層断面で粘質土に掘り込んだ幅約1.9m・深さ0.3mの溝状の落ち込みが観察できた。時期は不明確だが当初は溝状の落ち込みがあり、それが埋ったあとに石列が据え付けられている。溝状の落ち込みの埋土（第15層）は粘質土ブロックが混じり、人為的に埋めた可能性がある。石列が据えられてからは、石の西側の砂層が東に比べ約20cm低く、何らかの区画であったことは明らかである。瓦等を含む焼土も石列の西側と上を覆っている。

焼土には約900点の焼けた瓦や少量の陶磁器が含まれ、江戸時代末の建物（塀）が焼失したものと後に片付けたと見られる。周辺は慶応2年（1866）の石州口の戦の際に焼失しており、その後の整地の可能性がある。

遺物は砂層上の近現代層を中心に陶磁器・瓦が約2000点出土し、全体でコンテナ約5箱になる。土層は大きく上から表土下の近現代層・焼土層（幕末）・砂層（近世）・暗灰色粘質土と分けられ、最下層の暗灰色粘質土から遺物は出土しなかった。

#### 松原町268番地5 2m×5m 10m<sup>2</sup> 現地標高2m

基本的に海からの風成砂が堆積している。地表下約30cmから遺物が出土するが、特に標高1.5m（地表下50cm）周辺に遺物が多い。江戸時代の陶磁器片や瓦片が出土し、砂も一部暗褐色系になる。遺構面は第7層の砂層上面と見られるが、湧水もあり明確な遺構は確認できなかった。標高1.1m（地表下90cm）の褐色中粒砂から多量の湧水がある。

遺物は砂層を中心に陶磁器類・瓦が約500点出土し、全体でコンテナ約2箱になる。（柳原）



平成 11 年発行・番号は表 1 に対応



明治 34 年発行・番号は表 1 に対応

第 1 図 遺跡周辺図 ( $S = 1/25,000$ )

鳥根県 遺跡番号	遺 跡 名	所 在	種 別	概 要
L274	浜田城下町遺跡 (殿町79番地47)	殿町	城下町遺跡	弥生土器・貿易陶磁器・肥前系陶磁器・近世瓦浜田城内掘東側の大手通～侍町、試掘調査で石列と遺物出土
L275	浜田城下町遺跡 (松原町268番地5)	松原町	城下町遺跡	肥前系陶磁器・近世瓦浜田城外掘北東側の侍町、試掘調査で遺物出土
L27	浜田城跡(庭園跡)	殿町 古城山	城跡	須恵器・貿易陶磁器・備前焼 近世～昭和40年頃の庭園跡、発掘調査実施
L27	浜田城跡	殿町 古城山	城跡	1623(元和9)～1866(慶応2)、平山城、黒瓦、磨製石斧、亀山城、県指定史跡
L28	夕日ヶ丘古墳	殿町 夕日ヶ丘	古墳?	石組、消滅
L235	動木窯跡	港町 動木	窯跡(陶器・石見焼)	江戸末～、窯跡3基
L197	三重城跡	綾屋町	山城跡	郭、堀切
L26	日和山方角石	外ノ浦町	その他(石碑)	天保5年建立、市指定史跡
L163	皿山窯跡	外ノ浦町	窯跡?	文化年間創業?、丸物、茶器、雑器
L173	富島窯跡	浅井町	窯跡?(瓦)	伝 浜田城瓦窯
L29	社家地古墳群	相生町 社家地	古墳	横穴式石室、須恵器

表1 周辺の遺跡概要

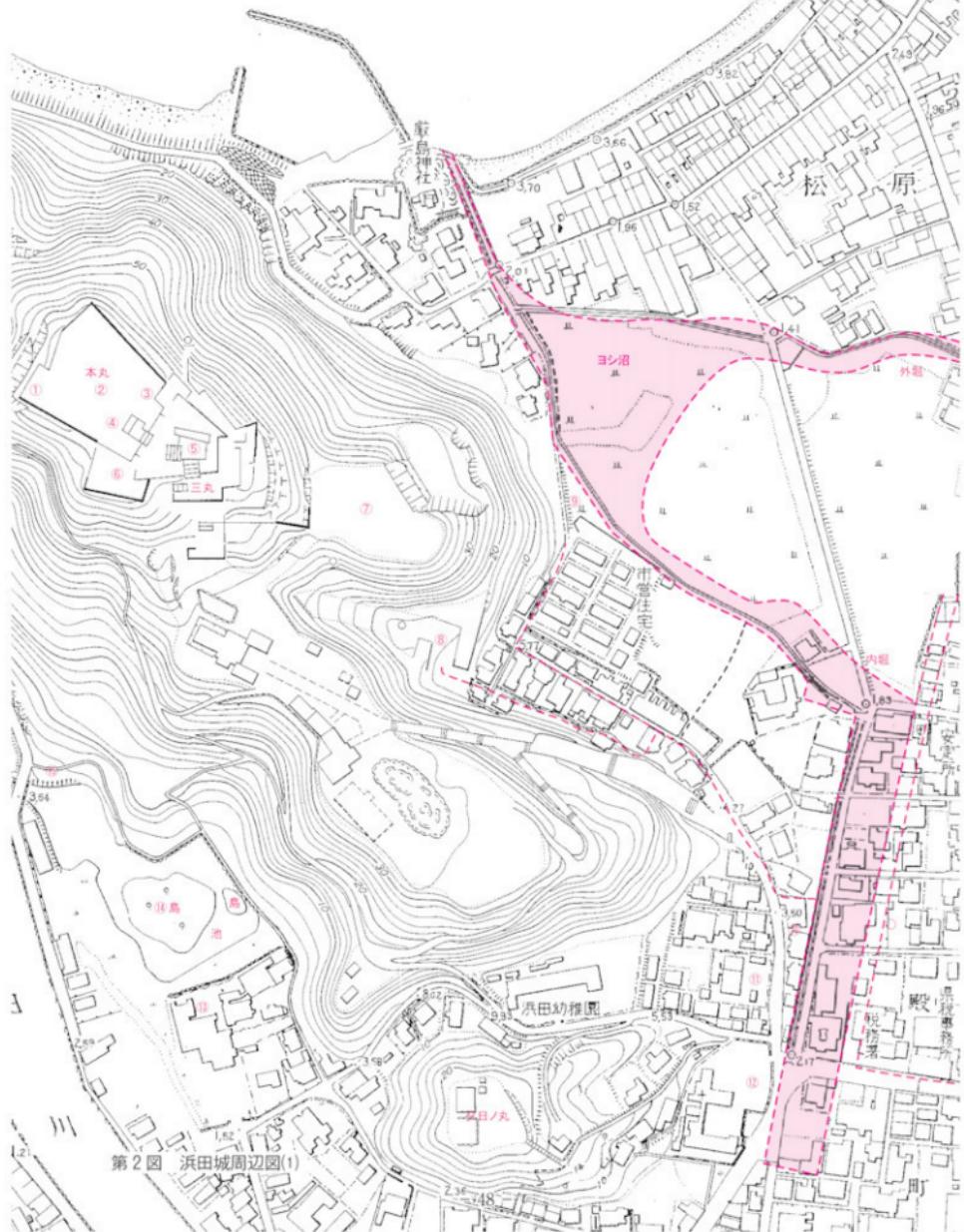
\*島根県遺跡地図番号は、島根県教育委員会「島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)」・浜田市教育委員会2009「島根県浜田市遺跡地図Ⅰ(浜田自治区)・仕切道路」による。生産遺跡の一部は地図非掲載。城下町遺跡は遺跡地図刊行後に発見されたもの。

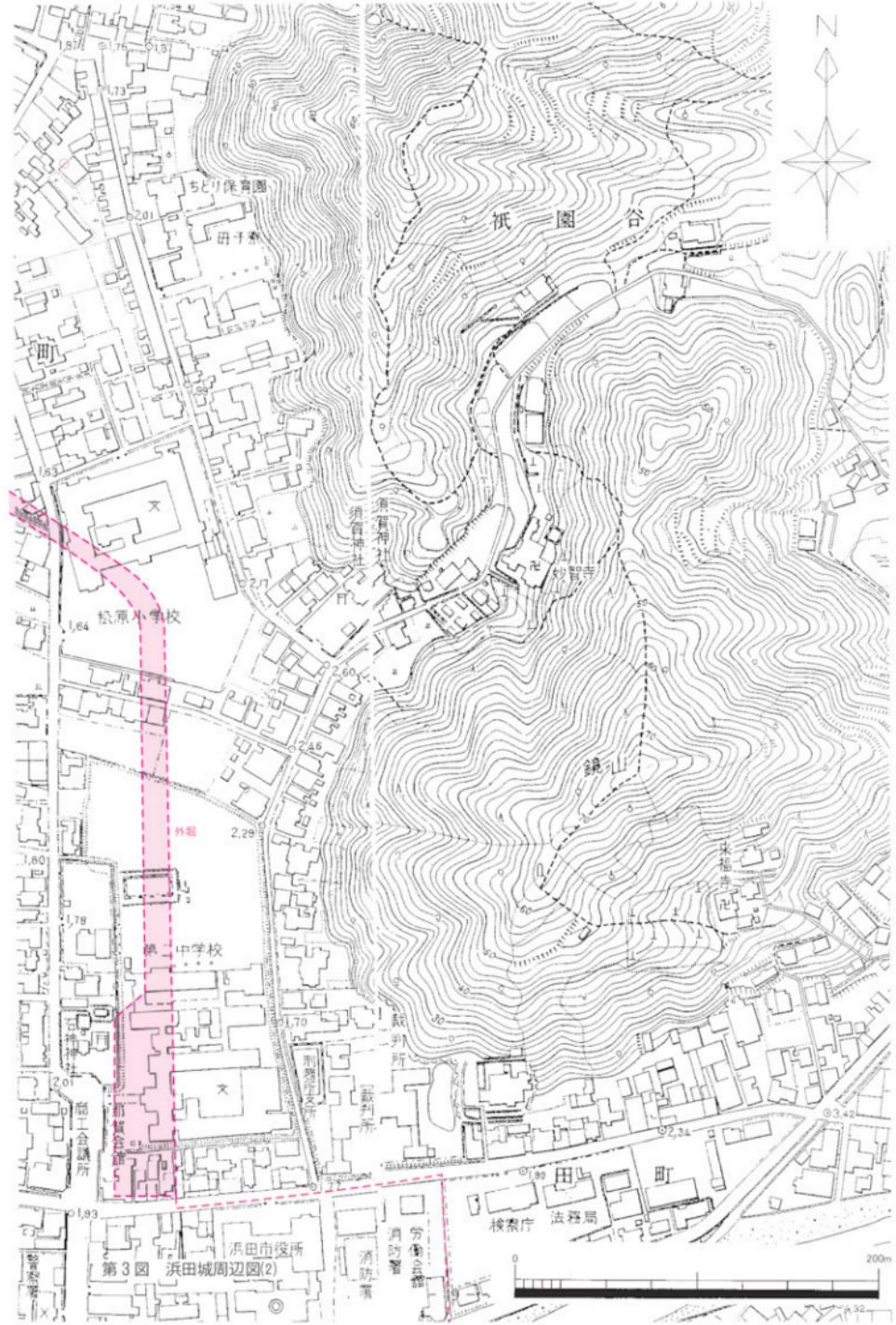


現地説明会

- ①三重櫓 ②玉櫓 ③六間長屋 ④本丸一ノ門 ⑤二ノ門  
 ⑥出丸 ⑦鳩硝櫓 ⑧中ノ門 ⑨裏門 ⑩大手門  
 ⑪御殿 ⑫南御殿 ⑬茶屋 ⑭厩園 ⑮船藏  
 (地図は昭和 31 年のもの)

松原 湾

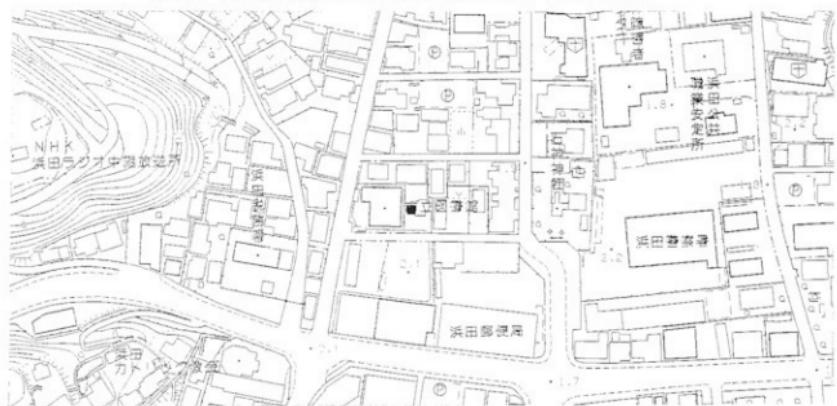




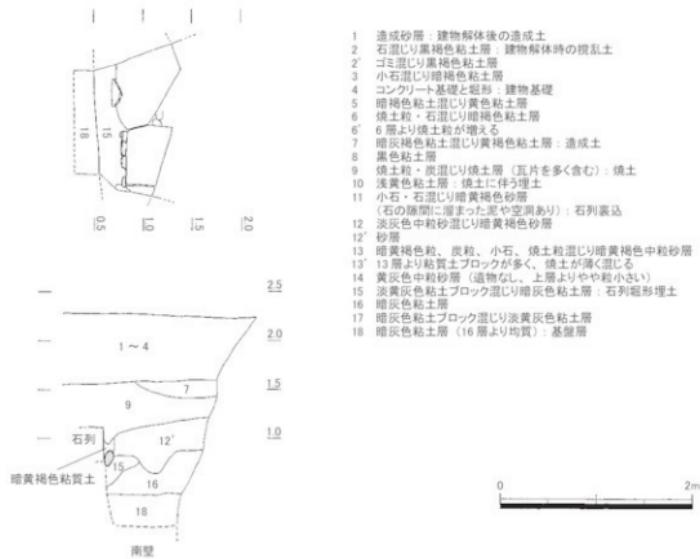
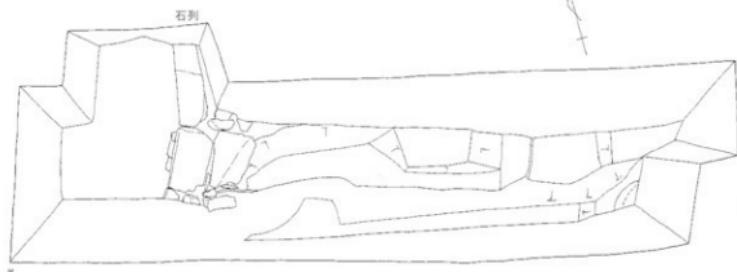
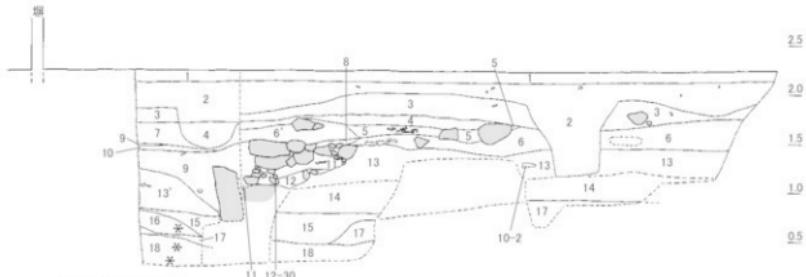
城下図（元文2年—1737年）



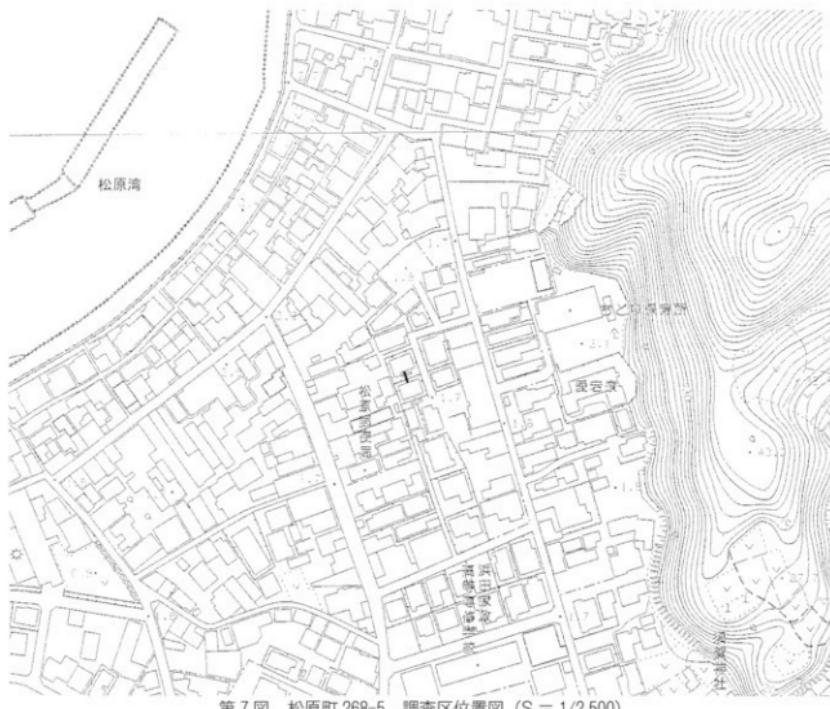
第4図 浜田城下図（浜田市教育委員会 1977 より転載・調査地点を加筆）



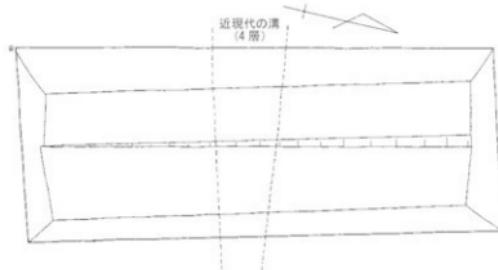
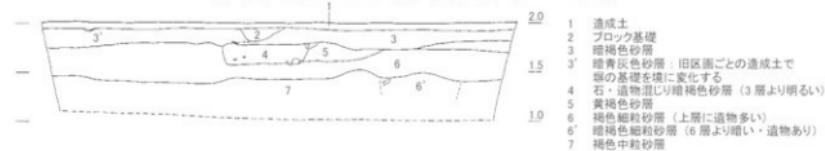
第5図 殿町79-47 調査区位置図 (S = 1/2,500)



第6図 殿町79-47 調査区・土層図・実測図 (S = 1/50)



第7図 松原町 268-5 調査区位置図 (S = 1/2,500)



0 2m

第8図 松原町 268-5 調査区・土層図・実測図 (S = 1/50)

### 第3節 遺物

出土陶磁器の組成は表2に示している。

#### 殿町79番地47

##### 砂層出土遺物（第10・11図）

1～5は瓦。1は軒丸瓦。上半を欠いているが、巴文に珠文を配している。復元すると直径18.8cm、珠文は19点配置される。2は輪違瓦。内面に布目とコビキBの痕跡が見える。側面を2面取りしている。3は雁振瓦。直線的なカーブを描く。先端部は欠損している。4は熨斗瓦。焼成後に半裁された割熨斗で、4条の平行線をついている。2次被熱によるものか、側面側が銀化している。5は平瓦。他の瓦と比べ厚手で、胎土は粗く、焼成も悪く焼きしまっていない。

6～10は肥前系磁器。6は小杯。口縁がやや外反し筒型を呈する。7は皿。8は鉢か。波状口縁。9は青磁の椀。見込み中心に「吉」、その周りに4文字を配す。「金玉満堂」か。施釉は、豊付、高台内側まで及び、胎土は陶器質である。10は青磁の香炉。波状口縁。

11～18は陶器。11は陶胎染付椀。12は肥前灰釉陶器皿。唐津。13は溝縁皿。溝縁は退化している。14は肥前の甕。内面に同心円の当て具痕、外面に格子目叩き痕が残る。15は在地系の鉢。口縁を折り返し肥厚させる。2次被熱している。16は蓋。内面施釉、鉄絵を描く。外面は露胎である。17・18は擂鉢。產地は不明。

19～26は土器。19は弥生土器の高杯脚部片。20・21は古墳時代の土師器甕の破片。22～26は土師器皿。22は他に比べ焼成が悪く、器壁も厚いため中世の可能性がある。25・26は灯明皿。口縁端部に油煙痕が付着している。

27は石製火鉢。底部中央を削り、脚部を成形している。脚部には鉄分が溶着している。

##### 石列裏込出土遺物（第12図）

28は丸瓦。内面にコビキBの痕跡が残る。29は熨斗瓦。割熨斗で4条の平行線をつける。粗い胎土である。

30・31は土師器皿である。

##### 焼土層出土遺物（第13～19図）

32～49は瓦類。焼土層からは724点の瓦片が出土している。その内訳は平・棟瓦片595点、熨斗瓦片21点、丸瓦片8点、雁振瓦片8点、軒棟瓦片3点、輪違瓦片3点、不明破片86点となっている。出土瓦の大半が赤褐色や灰白色を呈し、2次被熱による煙の黒色からの退色と考えられる。また葺き土の遺存、表面劣化も確認できる。32・33は軒枝瓦。中心飾りは不明であるが、いずれも唐草文を配している。また、33には「□常」の刻印が確認できる。35・36は丸瓦で内面に布目を残す。36は小型であり、2次被熱のため赤褐色を呈する。37～40は棟瓦。棟部が確認できるものは全て右棟であり、今回出土した棟瓦において確実に左棟と判別できるものは確認できなかった。また棟瓦の中には2種類の刻印が確認できるが、判読できない。37は亀甲、40には33と同じ刻印が見られる。38には直径1cm程度の釘孔が2箇所穿たれている。41・42は熨斗瓦。41は割熨斗で4条の平行線をつけ、粗い胎土。42は分割線が入り、8条単位の平行線をついている。43は雁振瓦。44～47は輪違瓦。いずれも前端面に劣化が見られる。44～46は体部が緩やかに屈曲し、内面には布目と工具痕が確認できる。47は体部が直線的で、内面は板状の工具痕が残る。48は袖瓦。釘孔が1箇所穿たれている。49は用途不明瓦。50・51は瓦質土器。箱状を呈し、板状の粘土を組み合わせて成形している。52は円状を呈しており、火消し壺の蓋か。

53～59は2次被熱している肥前系磁器。53は小椀。全面が被熱している。焼締の痕跡がある。54は皿。蛇ノ目凹型高台。見込みには1枚絵で植物を描く。55は皿。被熱している破片と被熱していない破片

が接合している。56は大型の皿。57は型打の輪花皿で口縁内面に花文を配し、外面にも紋様を描いている。58は扁平型の髪油壺。内面が被熱している。59は仏花瓶の底部か。内面は被熱のため著しく劣化している。

60～64は2次被熱している陶器。60は土瓶蓋。外面には鉄絵が描かれ、破面に2次被熱の痕跡がある。61は在地系の壺か甕。外面底部付近まで施釉し、内外面が2次被熱している。62は在地系土瓶。外面は全施釉、内面は露胎で上げ底状を呈する。63は在地系の水注。並釉で淡緑色を呈する。外面の一部及び内面見込みが2次被熱している。また見込みに目積痕が見られる。64は産地不明の擂鉢。内外面が2次被熱している。産地は明石・堺の可能性がある。

2次被熱している陶磁器の中で、時期が特定できるものには1枚絵の蛇ノ目凹型高台皿、山水文が描かれた量産大皿、輪花皿などがあり、19世紀代の遺物である。当該時期、当該地における火災に関する記述として見られるのは、慶応2年（1866）の石州口の戦が挙げられる。明治5年（1872）には浜田地震が起こっているが、当時の記録では当該地が火災にあった記述は見られない。重複になるが、55は被熱している破片と被熱していない破片が接合している。また63は内面見込み部及び一破片の外面のみが被熱している。上記のことを踏まると、完形時に被熱をしたとは考えにくく、破片になった状態で2次被熱したことがわかる。60の破面に2次被熱の痕跡があることも、上記の想定を補強する。焼土層は、慶応2年の浜田城自焼退城時の片付けにより堆積したと考えられるが、他の場所の焼土に当陶磁器が混入したため被熱したとは、被熱部の劣化等を考えると想定しにくい。また焼土包含時による被熱であれば、被熱部は破片の全面にわたるはずである。また瓦類に関しては、40の棧瓦は、他の棧瓦と接していた表面の後面と右側面は、その他の部位と比べ被熱の痕跡が異なっている。また輪違瓦も前端部に劣化が見られる。つまりは、2次被熱の遺物は、本来機能していた状態で被熱したものと考えられ、時期の下限として慶応2年を与えることのできる資料であると言える。

65～70は2次被熱していない磁器。65は同安窯の青磁皿。口縁端部は面をなす。66～70は肥前系。66は椀。外面に「福」の文字を記す。67は端反椀の蓋。外面に竹が描かれている。68は端反椀。外面には植物、内面口縁部には文様帯を施す。69は椀。70は段重。

71～80は2次被熱していない陶器。71は京焼風肥前陶器の椀。高台内に「清水」の刻印がある。72は備前焼の茶壺。体部下半にケズリを施す。73は須佐焼の擂鉢。高台内にカンナ目が見られる。74は在地の鉢。内外面には並釉を使用し口縁は波状を呈する。75も在地の鉢。74と同一個体の可能性もある。見込みに鉄絵による装飾を施している。76は在地の甕。内外面に釉を流しかけている。口縁の形状は肥前甕に似ており、その影響がうかがえる。77は在地の行平。78は在地の擂鉢。79は産地不明の土鍋。胎土が粗く、1～2mm程度の砂粒を多く含んでいる。80は産地不明の蓋。

81は佐野焼の瓦質火鉢。脚部に穿孔を確認できる。82は瓦質土器の土瓶片。

83は石硯。小型の携帶用である。

#### 近現代層出土遺物（第20図）

瓦類は軒瓦、丸瓦、輪違瓦が出土している。84は軒瓦。中心飾りは橋状の文様で唐草文を配する。85は輪違瓦。釘孔が1箇所穿孔される。

86・87は磁器。86は白磁の椀。87は瀬戸美濃の端反椀の底部。

88～93は陶器。88は産地不明の皿。外面の口縁部以外は露胎である。89は肥前系の椀。90は肥前系の擂鉢。口縁部上端を水平にして内部に若干尖らせている。口縁部内外面に綠褐釉を施す。17世紀後半。91は在地の擂鉢。玉緑状口縁で鉄釉。92は産地不明の皿。外面の口縁部以外は露胎であり、内面見込みに目跡が残る。93も産地不明の皿。2次被熱している。貼付け高台で、見込みには貝目跡が確認できる。

94～100は土器。94は土師質の七輪。佐野焼。口縁部内面に煤が付着している。95～97は弥生土器。

95は前期の壺胴部。3条の沈線に羽状文が施される。調整は風化のため不明である。96・97は前期の壺の胴部である。98～100は土師器の皿。98は復元口径8.8cm、復元底径4.75cm、器高1.1cmを測る。

松原町268番地5出土遺物（第21～24図）

101～112は瓦類。101は軒丸瓦。102～106は軒棟瓦。いずれも両端部が残存しておらず、軒平瓦の可能性も残る。瓦当破片の形状を見ると、上半部、下半部のみの破片が多く、瓦当部を2分割で作成し、接合して成形していたことがわかる。107は丸瓦。108・109は棟瓦。109の前面には「□□屋」の印刻が施されている。110は雁振瓦。直線的な形状をしている。111は輪違瓦。112は道具瓦である。

113～118は肥前系磁器。113は広東椀。114は小椀。115は広東椀蓋。外面に植物、内面には火炎文を描いている。116は皿。焼成が悪く、全体的に粗雑である。波状口縁。117は椀。見込みにコンニャク印判による五弁花文を描き、外青磁である。118も椀。見込みは五弁花文で、外面は連続的に記号を配する。

119～124は肥前系陶器。119は陶胎染付椀。120は皿。胎土目跡が1箇所確認できる。121は溝縁皿。122は皿。砂目跡が1箇所確認できる。123は甕。口縁端部を外面に引き出し、上端は面を作る。頸部は短く、鉄釉を使用している。124は土鍋。125は萩焼の開口椀。高台をシャープに削りだし、藁灰釉を使用している。外面は削り調整による砂粒の移動がわかる。126・127は椀。同一個体の可能性もある。萩焼か。128は瓶。外面は刷毛目装飾。肥前系か萩焼と思われる。129は徳利。130は須佐焼の鉢。頸部に2条の突帯が作りだされている。131は擂鉢。口縁下を横ナデにより段を形成している。肥前か須佐焼と思われる。132は須佐焼の灯明受け皿。133是在地の擂鉢。口縁を外面に引き出し、口縁部上端まで擂目が入っている。134～137は產地不明の陶器。134は壺。焼き縮まっており信楽焼の可能性もある。135は壺。外面はケズリ調整で、底部より上は施釉。内面は白色釉の下地に、緑色釉のポイントをつけている。136・137は擂鉢。137は平底である。

138・139は焰烙。2種類の口縁部形態がある。140は土師器の皿。

141は銅製煙管の雁首。肩部がなく、脂返しは直線的である。（藤田）

殷町 29 - 47 砂層		皿	碗	蓋	擂鉢	印型器	瓶	土瓶	土壺蓋	鉢	甕	水差	壺	急須	茶道具	德利	土鍋	香炉	不明	小計	計
Ⅲ期	肥前陶器	2																	2	2	
Ⅳ期	肥前陶器	1																	1	1	
Ⅴ期	肥前陶器	2																	2	2	
	肥前陶器	1		2							1							1	4	9	
	肥前磁器										1								1	2	
不明	在地系陶器										1								1	19	
	不明陶器	1		2															3		
	不明磁器																		4	4	
	合計	3	5	1	2	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	1	9	24	

殷町 29 - 47 燐土層		皿	碗	蓋	擂鉢	印型器	瓶	土瓶	土壺蓋	鉢	甕	水差	壺	急須	茶道具	德利	土鍋	香炉	不明	小計	計
Ⅲ期	青磁(同安來)	1																	1	1	
Ⅳ期	肥前陶器	2																	2	2	
Ⅴ期	肥前陶器	1																	1	2	
Ⅵ期	肥前磁器	1																	1		
Ⅶ期	肥前磁器	3		6															10	10	
	肥前陶器	1																	1		
	肥前磁器	2		6						1		1							48	58	
不明	備前																		1	127	
	頃佐	2																	2		
	在地系陶器	1							5		2	3	1					2	24	38	
	不明陶器	2		1														1	23	27	
	合計	8	15	2	4	0	1	5	0	3	3	1	2	0	0	0	0	3	0	95	
																			142	142	

殷町 29 - 47 近現代層		皿	碗	蓋	擂鉢	印型器	瓶	土瓶	土壺蓋	鉢	甕	水差	壺	急須	茶道具	德利	土鍋	香炉	不明	小計	計
Ⅲ期	白磁	1																	1	1	
Ⅳ期	肥前陶器	1																	1	1	
Ⅴ期	肥前陶器	2		1		1													4		
	瀬戸美濃	1																	1		
京都・信楽系																			1		
不明	頃佐	1																	1	3	
	白上	3																	67		
	在地系陶器	2		2				7		1		1	1		1				27	42	
	不明陶器	4		1					1		1		2						1	10	
	不明磁器	1		2				1											5		
	合計	10	9	2	2	0	8	0	1	1	0	0	3	1	2	2	0	0	28	69	
																			69	69	

松原町 268 - 5		皿	碗	蓋	擂鉢	印型器	瓶	土瓶	土壺蓋	鉢	甕	水差	壺	急須	茶道具	德利	土鍋	香炉	不明	小計	計
Ⅰ期	肥前陶器	2		1															3	3	
Ⅱ期	肥前陶器	1																	1	1	
Ⅲ期	肥前陶器	3																3			
Ⅳ期	肥前磁器	1		7	2													10	13		
	肥前磁器	3		4	4													7	7		
	肥前陶器	4			2	1	1		1		1	3	2		1			2	16		
	肥前磁器	1		1	1	1													3		
	瀬戸美濃	1										1							2		
不明	備前																1		1	1	
	京都・信楽系																		1		
	萩	5										1							1	7	
	頃佐	1		4	2							1							1	9	
	在地系陶器																		21	21	
	不明陶器	1		4									1						2	8	
	不明磁器	1		1															2		
	合計	10	24	7	10	2	1	0	0	4	3	0	3	0	0	2	0	0	28	94	
																			94	94	

\*時期区分は『九州陶磁の歴年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会2000を用いている。

\*表の数値は破片数を示したものであり、個体数を示したものではない。

\*機には、小环、段重を含める。

\*鉢には、植木鉢を含める。

\*甕には、小型甕、茶甕、醤油甕を含める。

表2 出土陶磁器分類表

#### 第4節 浜田城下町遺跡発掘調査に伴う自然科学分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

##### はじめに

浜田城下町の実態は、1866年（慶応2年）の第2次長州征伐に伴い城及び城下町が焼失したことから、江戸期に描かれた幾つかの絵図によってうかがい知る程度である。また、中世以前についても、港湾都市として発展していたことが知られている（井上、2001）が、その詳細は明らかにされていない。本報は、港湾都市であった、中世浜田の実体解明の一助とする目的で、浜田市が文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した花粉分析及びAMS年代測定分析業務の概報である。

##### 分析試料について

試料採取地点を調査トレンチ調査区平面図中に示す（図1）。また、試料採取層準を、花粉ダイアグラム（図2）中の模式柱状図に示す。

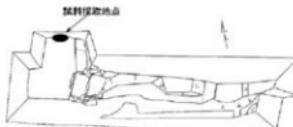


図1 試料採取地点

##### 分析方法及び分析結果

###### 1. 微化石概査

###### (1) 分析方法

後述の花粉分析用プレパラート及び残渣を観察した。

###### (2) 分析結果

表1に、花粉、珪藻の外、植物片、炭、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を5段階で表した。

###### 2. 花粉分析

###### (1) 分析方法

渡辺（2010）にしたがって分析処理を行った。花粉化石の同定は、光学顕微鏡下（400～1000倍）で観察し、200粒以上の木本花粉化石の検定、計数を試みた。

###### (2) 分析結果

花粉分析結果を図2に示した。花粉ダイアグラムでは、計数した木本花粉を基數にし、各々の木本花粉、草本花粉などと、一部の胞子について百分率を算出してスペクトルを表した。このほか、木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本・藤本花粉、胞子の総数を加えたものを基數として、分類群ごとに累積百分率として示した花粉総合ダイアグラムと、試料ごとの含有量（粒数/g）を算出した花粉含有量ダイアグラムを示している。またイネ科について、中村（1974）にしたがって、イネ属（*Oryza*）を含む可能性の高いイネ科（40ミクロン以上）と可能性の低いイネ科（40ミクロン未満）に細分した。

表1 微化石概査結果

試料No	花 粉	炭	植物片	珪 藻	火山ガラス	プラント・オパール
1	△×	◎	△	△×	△	○
2	○	◎	○	○	△	◎
3	○	◎	○	△	△	○

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる △：非常に少ない

△×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

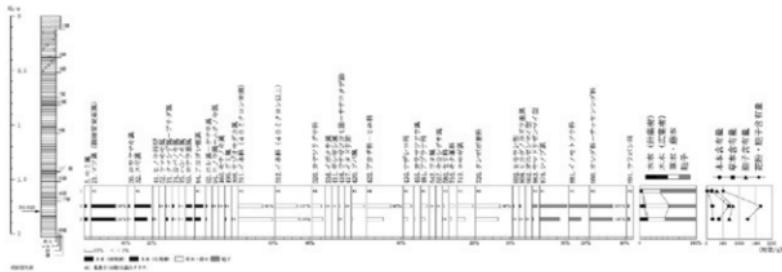


図2 花粉ダイアグラム

### 3. AMS 年代測定

#### (1) 分析方法

塩酸、水酸化ナトリウムによる酸-アルカリ-酸洗浄の後、二酸化炭素を生成、精製し、グラフアイトに調整した。 $^{14}\text{C}$ 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代校正には OxCal ver. 4.15 (Bronk Ramsey, 2009) を用い、INTCAL09 (Reimer et al., 2009) を利用した。

#### (2) 測定結果

測定結果を表2にまとめる。

表2 AMS 年代測定結果

試料No.	種別	出土地点(ほか)	重量(g)	測定年代 <sup>a)</sup> (yrBP±1 $\sigma$ )	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1 $\sigma$ )	補正年代 <sup>a)</sup> (yrBP±1 $\sigma$ )	暦年較正年代		測定番号 (PLD-)
								1 $\sigma$ 暦年範囲	2 $\sigma$ 暦年範囲	
℃-1	炭化物	北里Ⅲ層	0.0513	334±20	-2314±0.15	365±20	365±20	AD1467-1516(6.0%)	AD1452-1521(57%) AD1559-1563(12%) AD1551-1621(36.7%)	18166

\*1 $\delta^{13}\text{C}$ 補正無年代 \*2 $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代

#### 從来の花粉分析結果との比較・対比と堆積時期

18層（試料No.2、3層準）から採取した試料の年代測定が行われ、暦年較正年代として AD1446 – 1532 と AD1537 – 1635 (3 $\sigma$ ) (あるいは AD1467 – 1516 と AD1596 – 1618 ( $\sigma$ )) の2つの範囲が得られた。浜田城の築城が1619-1623年の間と考えられていることと、溝（堀？）の基盤から得られた試料であることから、いずれの値にも整合性はある。

一方、浜田城山を挟んだ西側、庭園跡において、池埋堆積物及び池の基盤を対象とした花粉分析が行われていた（渡辺, 2007）。ここでは、近世以降の植生を示唆するI帯と、それ以前（弥生時代中期から中世頃まで）の植生を示唆するII帯の存在が明らかにされており、更にI帯は、a ~ c 亜帯に細分されていた。今回分析した試料No.2、3から得られた花粉化石群集の特徴は、渡辺（2007）が明らかにしたI帯の特徴と一致する。

局地花粉帶の対比が正しいとすると、渡辺（2007）が推定した庭園跡での局地花粉帶の年代観と、今回の年代測定結果及び時代背景から推定できる測定年代値には若干の矛盾が示唆される。從来の年代観は浜田市東部の国府地区での花粉分析結果との対比から得られていた。マツ属（複雑管束亜属）（アカマツあるいはクロマツに由来）の増加は、開発行為に起因する二次林と関わりが深く、地域的な差が大きいと考えられる。浜田は15世紀末から16世紀初頭には港湾都市として開かれていたと考えられる（井上, 2001）から、從来のI帯には、16世紀以降の植生を反映していた可能性も示唆される。

花粉化石群集の対比を更に詳細に行うと、マツ属（複雑管束亜属）の減少とスギ属の増加傾向から、

今回の試料No.3～2の変遷は既知のb～a亜帯への変化と類似する。この場合、庭園が造られた時期（築城後？）と城下町が造られた時期（築城時）の間で矛盾が生じる。花粉化石群集の類似は、城山の東西という局地的な植生の差によって生じたものと考えられる。

### 古環境（堆積環境、古植生）の推定

#### （1）堆積環境

現在の地形から考えると、過去（中世以前）の浜田川の流路は、市役所東側辺りから北上して（あるいは西に行く流れと北上する流れに分かれ）、松原浦に抜けていた可能性がある。浜田川の河口に形成されたのが松原浦の砂州で、調査地点周辺は砂州で隔てられた河口域の小規模な海跡湖（沼沢地・湿地）の一部であったと考えられる。この沼沢地・湿地は中世末までには埋まり（あるいは埋め立てられ）、わずかに残った（意図的に残した）流路を利用して浜田城の内堀、外堀が設置された可能性がある。

微化石概査から微炭が多く含まれることが分かり、城下町の造成以前から調査地点近辺で人間活動が行われていたことが示唆される。一方、珪藻化石も少なからず検出されているが、堆積物が海成であるか、淡水成であるかを判断する「精査」を行っていない。また、分析試料は比較的均質な粘土であるが、花粉化石の含有量が少ない（通常泥質堆積物では、数万粒/gの含有量がある）ことから、比較的短期間に堆積したと考えられる。

#### （2）古植生

花粉分析結果では木本花粉の割合が低く、草本花粉、胞子の割合が高い。このような花粉化石は、近辺に樹木がまれな草地、湿地などで得られることが多い。また、比較的狭い水域（池、沼）でも同様の花粉化石群集が得られるが、広大な水域（湖など）では木本花粉の割合が高いこともある。このことから、木本花粉の多くは城山など調査地点周囲の丘陵から飛来、あるいは河川によって流入したと推定できる。一方、草本花粉や胞子は草地、湿地内の植生を示すと推定できる。

##### ①丘陵の植生

調査地周囲の丘陵は、アカマツを中心とし、ナラ類を伴う二次植生（薪炭林）で覆われていた。一方平野の南側に広がる中国山地には、カシ類にモミ、コウヤマキ、ヒノキを混淆する照葉樹林が広がっていたと考えられる。既知のⅡ帯ではスギ属が卓越する傾向にあり、浜田川沿いの湿地や谷沿いにスギが生育していたと考えていた（渡辺、2007）。今回の分析でも、スギが少なからず検出され、調査地周囲の丘陵を刻む谷筋や浜田川沿いの湿地にスギが残存していたものと考えられる。

##### ②近隣の植生

前述のように、調査地は沼沢地・湿地の一部であったと推定できるが、抽水植物由來の花粉化石がほとんど検出されず、沼、池は比較的開放的な環境であったと考えられる。一方でイネ科やカヤツリグサ科などの湿性植物、アカザ科・ヒユ科などの草地植物さらにはソバ属やワタ属などの畑作物まで検出され、陸域が近辺に迫っていたことがうかがわれる。

一方、調査地近辺で稲作が行われていたほか、ソバやワタなどの畑作物も行われていたことが分かる。アカザ科・ヒユ科には畑作物であるホウキギ（とんぶり）、オカヒジキ、ヒユが含まれ、これらが栽培されていた可能性も指摘できる。

### まとめ

浜田城遺跡発掘調査に伴い検出された溝（堀？）下位の堆積物を対象とした、花粉分析、AMS年代測定などを行った。この結果、以下の事柄が明らかになった。

- (1) AMS年代測定の結果、城下町造成以前と推定できる AD1446 - 1532 と AD1537 - 1635(3 σ)(あるいは AD1467 - 1516 と AD1596 - 1618 (σ)) の較正年代値が得られた。

- (2) 得られた花粉化石群集を既知の結果（渡辺、2007）と比較し、I 帯に対比した。ただし、亜帶レベルでの対比は、時期的な矛盾が生じることから、行わなかった。
- (3) 現在の地形から浜田城の内堀、外堀は旧浜田川の川筋、あるいは海跡湖（沼沢地・湿地）を利用したものであることが推定できた。城下町の一部は沼沢地・湿地の一部を造成したものであろう。
- (4) 中世以前の浜田は、港湾都市として繁栄していたと推定されていた。調査地は沼沢地・湿地の内部であったが、近辺で水田耕作や畑作（ソバ、ワタなど）などの生業活動が行われていた。
- (5) 調査地周囲の丘陵は、薪炭林で覆われていた。一方中国山地には、カシ類に針葉樹を混淆する照葉樹林が分布した。更に、中世以前に平野部で多く認められたスギ林が、残存していた。

#### 引用文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) . Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 井上寛司 (2001) 中世の港町・浜田。石見学ブックレット, 2, p.61.浜田市教育委員会, 鳥根。
- 中村 純 (1974) イネ科花粉について, とくにイネを中心として, 第四紀研究, 13,187-197.
- Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, L., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Southon, J. R., Talamo, S., Turney, C. S. M., van der Plicht, J., & Weyhenmeyer, C. E. (2009) . IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50.000 years cal BP. Radiocarbon, 51(4), 1111-1150.
- 渡辺正巳 (2007) 浜田城庭園跡発掘調査における微化石分析。浜田城跡（庭園跡の調査1）御便殿取得活用に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 18-23. 浜田市教育委員会, 鳥根。
- 渡辺正巳 (2010) 花粉分析法、必携 考古資料の自然科学調査法, 174-177. ニュー・サイエンス社

## 第5節 総括

近世の時期区分は、肥前系陶磁器のV期区分（大橋・西田1988・九州近世陶磁学会2002・大橋2004）を用い、肥前I期（1580～1610年代）・II期（1610～1650年代）III期（1650～1690年代）IV期（1690～1780年代）V期（1780～1860年代）としている。その後は石見焼など在地系陶器（註1）の区分を考慮し明治、大正～昭和40年代とした。石見銀山遺跡の時期区分の2～7期（守岡・新川2011）にも対応し、各時期の基準とした陶磁器等は文末の表3に示した。

### 殿町の調査区について

殿町の調査区で確認した石列は南北方向に内堀とはほぼ平行して並び、大手通と侍屋敷の区画と見られる。上に塀などがあった可能性もあるが、石列は基底部しか残っていなかった。石列の据付時期は特定できないが、石列下面で溝状の落ち込みが確認されたことから溝を埋め立てて石列を造った可能性もある。城と城下町の整備が完了したと伝えられる時期（元和9・1623年）以降とみられる。石列が据えられた後は、土層は粘質土が堆積する湿地帯から砂地に変化する。地形的に松原町の調査区のように風成砂が堆積する環境ではなく、砂は江戸時代初期の城下町造成と考えられる。

自然科学分析（第4節参照）では、<sup>14</sup>C年代測定で溝が掘り込まれた暗灰色粘土中の炭化物から365±20yrBP (AD1467-1516 AD1596-1618: σ) の年代が得られている。概ね中世後期から近世初頭には川筋、あるいは海跡湖（沼沢地・湿地）と見られる。弥生時代や中世の遺物細片が出土することから西側の山際に遺跡があり、花粉分析でもイネ・ソバ・ワタなど栽培種が検出されている。

城の堀は元の川筋を利用するか、川を付け替えて造ったとされている（浜田市1973,p.207）。浜田川の流路変遷（浜田市1973,pp.54-57）をみても、北側の砂州（松原）と南西側の砂州（元浜）の発達により亀山の東西に川の流路が規制される。南西側の状況は、近世山陰道の1本南側（真光町）の地点での立会で地下0.7m以下が暗灰褐色砂、1.3m以下は風成砂と見られる白色砂であった。時代は特定できないが西の元浜側からの風成砂が堆積する環境で生活面は砂層である。

これらの状況から、亀山東側の海跡湖（沼沢地・湿地）の造成と整備により内堀・外堀と城下町（侍町）が造られた可能性がある。なお、浜田河口西側は近世の絵図では川と繋がった沼地で、明治期の地図では埋め立てられている。沼地の南側にあたるベスト電器駐車場の立会では、近代以降のゴミが混じる黒色粘土が約2m以上堆積していた。亀山は東西に川・海跡湖や沼沢地が入り込む海側に突き出た丘陵で、中世の港町や近世の築城理由を考える上で示唆的である。

江戸時代の地層は基本的に砂層で、石列から東で明確な遺構は確認できなかった。石列を区画と見た場合は当時の屋敷地内にあたるが、庭園など空閑地であった可能性もある。

絵図等から調査地は前期松平周防守家（慶安2・1649年～宝暦8・1758年）には主席家老岡田竹右衛門の屋敷と大手通りにある。岡田竹右衛門は浜田転封の際は2,800石の禄高である（浜田市教育委員会1992,p.22）。なお、その後の松平右近将監家（天保7・1836年～慶応2・1866年）には敷地が細分されているが、母屋が藩校「道学館」として利用されていた（神山1991,pp.33-40）。史料ではその後も周辺を含めて「岡田屋敷」と呼ばれていたようである。

殿町では弥生・中世の遺物もあるが、下の砂層からは近世初頭から肥前II～IV期の遺物（肥前系陶磁器・在地系陶器）が混在して出土し、肥前V期を中心とした遺物は焼土で認められる。遺物の産地は多い順で肥前系陶磁器・在地系陶器（石見焼など）、須佐唐津焼、萩焼、佐野焼（岩崎2008）、備前系陶器、京都・信楽系陶器、瀬戸美濃系磁器等になる。

浜田城の堀は明治期に埋め立てが始まり、内堀は弁天川の川筋として一部残っていた。平成2年頃に工事で暗渠になり、現在は暗渠の蓋と城側の宅地との高い段差で内堀の西側ラインが推定できる。絵図等では堀の石垣は直線ではないが、現状では段差の直線ラインしか想定できない。この段差をたどると、西側にやや高い20m×8～10mの長方形の平坦地があり、現状で道路高よりやや高い宅地と駐車場が

ある。北側に大手門跡の標柱があり、現状で宅地との高い段差がなく城の中門方向に登れる場所はここのみである。ここに大手橋がかかっていたとみられ、大手門をくぐり元は石垣と見られる正面の段差を右折し鍵串がりに中門側へ上ると見られる。なお、東側に間島と呼ばれる岩山があったが、明治期に削平されて現在は宅地になっているため岩山の痕跡は残っていない。

史料には堀の幅が数種類記されているが、内堀にかかる橋の長さ（約 16 間 1 尺・29.391m）と浜田川にかかる大橋の幅（約 3 間・5.454m）を基準にすると、内堀（幅 15 間～21 間・約 27～38m）と大手通の幅（3～5 間・約 5～9m）が想定できる。各城下町絵図から内堀は城の南東側（現在の国道 9 号線よりやや南）までは幅広に周囲の石垣まで描かれている。南側では道に沿う水路になり浜田川と接続していたと見られる。

江戸から明治期の内堀周辺の状況を、史料から抜粋すると以下のとおりである。() 内の数値は 1 間 = 1818m・1 尺 = 0.303m・1 寸 = 0.03m として換算している。

『浜田御城内外浦町懇問敷書付』(元文元年・1736 頃の写) 浜田市立図書館蔵『浜田古事抜粋』内記載、(大島 1935,pp.568～574) にも同文書が掲載されているが一部書き落としがある。

同（城山）堀 長サ 百三拾間（236.34m）

幅 十五間一尺九寸（27.843m） 但南ノ方拾八間四尺五寸（34.086m）

同 橋 十六間壹尺（29.391m）

（中略）

大橋 長サ四十間余（72.72m）

幅三間（5.454m）

『浜田城地目録』(天保 7 年)、(浜田会 1892,pp.6～8)

幅 十六間（29.088m）

南の方十六間（29.088m） 北の方二十一間（38.178m）

深さ 水下 九尺（2.727m） 所により浅深あり

『浜田御城地目録』(天保 10 年頃・1839)、(鳥根県 1965, pp.271～274) を引用したが、同様の文書が浜田市誌にも掲載されている（浜田市 1973,pp.208～210）。

堀

廻り長 百三拾間（236.34m）

幅 拾六間（29.088m）

深サ水下九尺所ニヨリ浅深不同

幅南ノ方拾六間（29.088m） 北ノ方十壹間（38.178m）

『浜田城記』(鳥根県 1965, pp.274～279)

東ノ方ハ堀ナリ、幅十七間（30.906m）

『浜田市街之図』明治 12（1879）年（浜田市 1982,p15）

内堀にかかる大手橋はなくなり、新たに南側に橋ができるが、堀の形に大きな変化はない。

『明治 31（1898）年の地図』(浜田市 1982,p88)

内堀は埋められて細くなり、外堀とヨシ沼の大半が埋められている。

石列の堀側を埋めていた焼土は、慶応 2 年（1866）の石州口の戦の際に周辺が一部焼失した後の整地と見られる。明治 5 年（1872）の浜田地震の被災の可能性も残るが、被害状況（渡邊 1995）を見るに調査地周辺は家屋の全壊百分率が 20% 大で、他区の最大は 90% である。6 年しか時期差がないため、断定は出来ない。また、周辺の火災事例を年表（桑原・的場 1962、的場 1992）から探したが、いずれも浜田川南側の町屋や浜田浦の出火である。焼土は粒状になり近代と見られる陶磁器も含まれており、焼失後速やかに整地されたものとは考えにくい。整地範囲も下記史料のように一面焼野原の状態ではなく、部分的に焼失したと見られる。

慶応2年（1866）頃の内堀周辺の状況を史料から抜粋すると以下のとおりである。

『町方役用帳』（浜田市教育委員会 1997, p17）

「其日（18日）七ツ時過より俄に破の柄木鳴出ずや否や直に御城・岡田屋敷・大橋・番所・林小屋へは焼玉を以て大砲打込み夫々屋敷えも右の通焼玉大砲にて一時焼亡の結構目も氣も天に飛び周章騒時言語道断」

『津摩浦大年寄の日記』（田村 1988, p112）

「（略）家中屋敷は門・築地が残っている外、岡田屋敷・御厩・浦役所は焼け残り（略）」

焼土には被熱した瓦や陶磁器が含まれ、近世末の建物や塙が焼失したものを見られる。焼上から出土した遺物は被熱したものとそうでないものがあり、陶磁器は焼けて表面が粗くなっているが、瓦に比べて被熱は少ない。肥前系磁器・在地系陶器・瓦類があり、他の遺物で一部新しいものを含むが、ほぼ1866年（慶応2）～1872年（明治5）頃とみられる。肥前系磁器では肥前IV期の遺物も少量含まれるが、肥前V期（1780～1860年代）でも1820年代以降に増える端反形椀（67, 68）を含む。後の石見焼に近い器種として淡緑色の釉をかける鉢（74・75）、黒褐色釉をかける擂鉢（78）があるが、淡緑色の釉をかけ、淡褐色釉をなす小型甕（76）・小物の水注（63）など後に続かない器種もある。甕はやや頭部が長く、肥前系の影響があると見られる。

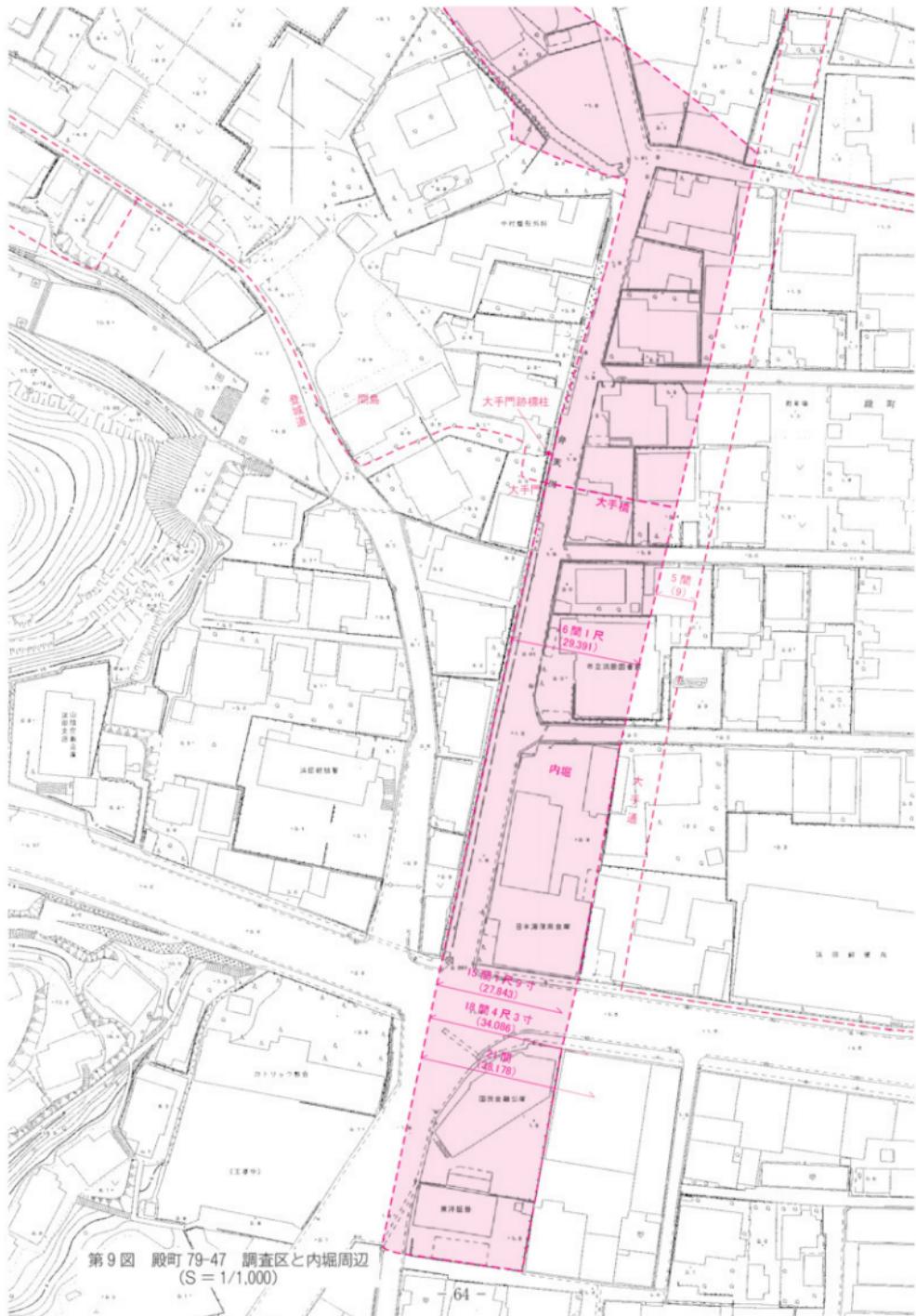
瓦は一見硬質な素焼瓦に見えるが、部分的に残る黒色面と被熱の赤色化面から表面の「いぶし」が剥げた黒瓦で、赤瓦（いわゆる石州瓦）は含まない。1867（慶応3）年に黒瓦の御用が途絶えたため、赤瓦生産を始めないと黒瓦焼きの御用瓦師が申し出た史料もある（山藤 1990・浜田市教育委員会 1992）。浜田城の表採品と庭園跡の出土資料から見ても、城と周辺の施設や武家屋敷には主に黒瓦が用いられ、地域的には赤瓦が主体になっていた可能性がある（浜田市教育委員会 2007）。瓦の種類は右棟瓦（39・40）・雁振（43）・熨斗（42）・輪違（44～47）で、棟などに使われた丸瓦（35・36）がごく少量含まれ、平瓦は確認されなかった。このため、焼失した建物は黒色の一般的な右棟瓦葺きであったことがわかる。その後、明治5年の浜田地震からの復興や建替えに伴い、周辺に赤瓦が普及していったと考えられる。なお、棟瓦は大棟から見て右側に棟が付く右棟瓦が多いが、少ない左棟瓦の分布や意義も検討されている（永田 1990・甲斐 2007・大脇 2007）。浜田城西側の庭園跡の調査では近世の黒色右棟瓦（浜田市教育委員会 2007a・第6図3, 4）、明治40年建築の御便殿に葺かれた黒色右棟瓦（浜田市教育委員会 2007b・第7図6, 8, 9）が出土している。赤瓦（いわゆる石州瓦）も管見では右棟瓦である。一方、現在の浜田城内に移築された旧津和野藩邸の門は黒色左棟瓦、浜田城の表採品は本丸周辺で黒色左棟瓦、水ノ手木戸周辺で黒色左軒棟瓦が見られる。

#### 松原町の調査区について

松原町の調査区は東側に南北に走る福浦通りがあり、通りにならんで武家屋敷があった。絵図等から中級武士の屋敷であり、江戸後期の石高61,000石の松平右近将監家で西側の中門通りの岩田家が70石の石高になる（浜田市教育委員会 2004, p10）。

調査地は通りから約30m奥の位置にあたり、屋敷地は米子に比べ石高に対し広い敷地を押領したようで、屋敷以外に広い庭や空闊地（火除地）、畠があったと見られる。絵図からおよその敷地割りを推定すると28m×40mの1,120m<sup>2</sup>となる。

松原町での出土遺物は砂層から近世初頭から肥前I・II・IV・V期の遺物（肥前系陶磁器・在地系陶器）が混在して認められた。遺物の産地は多い順で肥前系陶磁器・在地系陶器（石見焼など）、須佐唐津焼・萩焼・佐野焼、京都・信楽系陶器、備前系陶器、瀬戸美濃系磁器等になる。土層から基本的に海からの風成砂が堆積しているが、江戸時代でも浜田藩成立（1619）以前の肥前I期にあたる胎土目積みの肥前系陶器（120）から遺物が見られる。中世まで遡る遺物は確認できなかったが、近世城下町の整備以前に何らかの町があった可能性がある。口縁が屈折し粗い擂目が内面上端につく擂鉢（133）も在地産で



第9図 殿町79-47 調査区と内堀周辺  
(S = 1/1,000)

肥前Ⅱ～Ⅲ期頃の可能性がある。特に肥前Ⅳ期の丸型椀が目立つが、時期が下るほど流通量が増えるため遺跡のピークではない。

史料から慶応2年（1866）に周辺の屋敷地が焼失したことがわかるが、焼土や建物の痕跡も確認できなかったため状況は不明確である。明治31（1898）年の地図からは幕末の焼失もあり、屋敷が減っていたことが伺える。

松原町の福浦通り周辺の状況を史料から抜粋すると以下のとおりである。

『江戸時代（1686以降）の絵図』

侍屋敷の北端にあたり、北側に隣接して松原浦の町屋がある。

『周辺の史料（小出邸・渡辺邸は共に松原にあった屋敷）』

（小出1926,pp.17～18）「自分のうちと思はるる辺りがごんごん焼けて居るので…」

（小出1931,pp.17～18）「道路の両側には浅い溝があつて土塀がありて各戸共門がありて戸締りの出来るようになって居た」

（須藤1983,pp.2～7）中級家臣の武家屋敷（福浦）渡辺邸 約55坪（畠数40）約15m×15m

「明治31（1898）年の地図」（浜田市1982,p88）

福浦の南西側には宅地表示はなく草地状になっている。

浜田城の東側は内堀・外堀とともにほぼ埋め立てられ、江戸時代の様相は分かりにくい。今回の調査において、城の東側で初めて江戸時代の城下に関する遺跡を確認し、江戸時代の生活面は砂地で造成が行なわれた可能性がある。弥生時代や中世の遺物も少量出土し、近世以前の遺跡があった可能性もある。浜田でも現在の市街地の下に江戸時代の城下町遺跡が残っていることを発掘調査で明らかにできた。

（柳原）

註

- (1) 今回の調査では、産地不明の中から器種と釉調をもとに在地系陶器を判断したが、陶器でも小物は胎土が比較的緻密で灰色のものが多い。大正以降の石見焼は胎土が様々で器形や釉調が規格的になる。大振りな器種（いわゆる丸物）が多く、椀なども器壁がやや厚く小型品は少ない。在地系陶器の確定な例は肥前Ⅰ～Ⅱ期併行の唐人焼（鹿児島吉賀町）を除くと後述の通り肥前Ⅳ期の18世紀末だが、宝永ごろ（1704～11）に作られた（平田1981）とされている。大型の熊胴壺などの大物と小形の皿や鉢などの小物の二系統がある（鳥根県立博物館1987・平田1987・村上2002）。

石見地域の在地系陶器は肥前V期から目立ち、前述の唐人焼を除くと最も年代の古い資料は1801（享和1）年頃の祇園町遺跡4-S2（津和野町教委1999）、18世紀末～19世紀前半頃の仁右エ門山遺跡（鳥根県教委1992）にみられる。共に肥前V期でも広東形椀を出土する時期（1780～19世紀前半）で、仁右エ門山遺跡では器形は広東形椀模倣・光沢のある淡緑色釉をかけた陶器（鳥根県教委1992第62～8）もある。同じ津和野藩領でも前者では須佐焼を中心の組成、後者は現在の石見焼に通じる中型甕（褐色釉に黒釉流し）などやや異なる。

近世の石見焼は主に銀山領・浜田藩領・津和野藩領とわかれ、各地で磁器を含めた陶磁器生産への関与と流通が異なったと見られる。陶器や瓦職人は浜田藩領（江津・浜田）を中心に各地へ動いていたようだが、石見東部では西の浜田藩領・津和野藩領とやや異なる可能性もある。銀山領は温泉津がECと陶器の生産地でもあり、後述の遺跡でも弓谷たたらは広瀬藩飛地、谷戸経塚は銀山領にあたる。それぞれの地域で海運や陸路・江川水運を利用して物資が流通していたのであろう。

その後、1819（文政2）年に埋納された谷戸経塚（川本町教委1987）・1837（天保8）年頃の弓谷たたらE-0区崖面（頃原町教委2000）・19世紀前半頃の相生遺跡（鳥根県教委1992）では、大甕や厚手の椀盤など中・大型品を中心現在の石見焼に通じる器種が掲げられる。これらの遺跡は肥前V期でも1820年頃から増える端反形椀を含み、相生遺跡では器形は端反形椀と蓋を模倣・光沢のある淡緑色釉・黒褐色釉をかけた陶器（鳥根県教委1992第108図8、15）もある。一方で1853（嘉永6）年頃の祇園町遺跡4-S1（津和野町教委1999）では石見焼に近い行平鍋・土瓶・燭台の他に小型の在地系甕・須佐焼がある。甕でも褐色釉をかけた口径約21cm以上の中・大型甕が頭部の波線・体部への黒色釉流し掛けで特化するのに対し、小型の甕はあまり規格化せず大正頃には並釉をかける蓋つ

ばに置き換わるのであろう。小物雑器の生産も継続されており、弓谷たたらでは体部に丸みをもち口縁周縁に銅線釉を流し掛ける小挽（額原町教委 2000・第 39 図 10）、口縁を波状につくる彫（額原町教委 2000・第 39 図 13）が見られる。動木 1 号窯でも同様の個体が見られる。

1903（明治 36）年の石見焼陶器製造業組合設立後は、「石見焼（窯を示す記号）製」の刻印を共通して用い、現在まで続く「石見焼」の生産が確立すると見られる。それ以前は「江津焼」「温泉津焼」など各産地の名前がつけられていたようである（阿部 2011）。石見焼窯跡の発掘調査は大規模で遺物量も多い大正期以降の例が多く、近世の在地系陶器もそれを通って判断することが多い。

19 世紀に遡る浜田市港町動木の陶器製造は美術品及び雑器をやいたことがはっきりしているが、悉くいわゆる石見焼をさすものかという疑問がだされている（伊藤 1967・1985）。同書では石見焼は「石見の窯から作られる丸物などの健康で美しい日用粗陶器である」としている。この動木窯跡（三澤 1998・鳥根県教委 2001・東森 2001）は 3 基の窯跡が確認されており、「石州浜田万年焼」という型押皿の押型も残っている。19 世紀頃から昭和 34 年まで操業したようで、最初の 1 基は雑器中心、2 基目は雑器少量と中型品、3 基目は中型品と生産品目が変わるものである。

石州浜田万年焼のような「小型雑器」、18 世紀末頃から明治期の「石見地域で焼かれた中大型品を中心とした粗陶器」、1903（明治 36）年以降の底面に刻印を押す（阿部 2011）大正期以降の「石見焼」は、より規格性が強くなる面からも、ある程度区別する必要がある。

## 参考文献

- 引用参考文献の一部が入手できるホームページ  
鳥根県道路資料リポジトリ  
(<http://rar.lib.shimane-u.ac.jp/Repository/>)  
東京大学埋蔵文化財調査室 (<http://www.aruu.tokyo.ac.jp/>)  
浜田市 (<http://www.city.hamada.shimane.jp/>)

## 近世城下町道路・遺物関係

- 伊藤菊之輔 1967「石見焼について」『季刊文化財』第3号  
鳥根県文化財愛護協会  
伊藤菊之輔 1967「鳥根の陶窯」国書刊行会  
平田正典 1979「石見粗陶器史考」石見地方史研究会  
伊藤菊之輔 1980「山陰の陶窯」国書刊行会  
原 宏 1981「鳥根のやきもの」『日本やきものの集成8 山陰』  
平凡社  
平田正典 1981「石見焼と北前船」『日本やきものの集成8 山陰』  
平凡社  
平田正典 1987「石見の小物雑器」『博物館ニュース』No.49  
鳥根県立博物館  
鳥根県立博物館 1987「鳥根の工芸」  
鳥根県邑智郡川本町教育委員会 1987「邑智郡川本町 谷戸経塚・木谷石塔発掘調査報告書」  
村上 助 1987「谷戸経塚の甕について」『邑智郡川本町 谷戸経塚・木谷石塔発掘調査報告書』鳥根県邑智郡川本町教育委員会  
大橋康二・西田宏子監修 1988「別冊太陽 古伊万里」  
水田鉄雄 1990「出雲大津座業誌」  
成瀬 崇内 1990「消費遺跡における陶磁器の基礎操作と分析」『東京学部附属病院地點』東京大学埋蔵文化財調査室  
山藤忠 1990「石州瓦の資料」『郷土石見』No.25 石見郷土研究懇話会  
東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会 1992「東京都新宿区内藤町遺跡」  
鳥根県教育委員会 1992「石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書」  
市本芳三 1995「瓦」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社  
東洋一 1995「平瓦製作における中世の技術革新について 第1部 - 鎌倉出土瓦を中心に-」『研究紀要』第1号 京都市埋蔵文化財研究所  
江戸陶磁土器研究グループ 1996「シンボジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題 2」  
東洋一 1996「平瓦製作における中世の技術革新について 第2部 - 中世株平瓦製作技法の復元 浅田瓦工場での手作り技法の紹介を兼ねて-」『研究紀要』第3号 京都市埋蔵文化財研究所 警視庁・新宿区南山伏町遺跡調査会 1997「東京都新宿区 南山伏町遺跡」  
堀内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的の考察」『東京大学構内遺跡調査年報』第1号 東京大学埋蔵文化財調査室  
三澤治雄 1998「動木窯の物原を探る」『史跡探訪会(20周年)記念発表』史跡探訪会  
東京大学埋蔵文化財調査室 1998「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)」『東京大学構内遺跡調査研究年報2別冊』  
津和野町教育委員会 1999「津和野城下町 瓦園町遺跡」  
頼原町教育委員会 2000「弓谷たたら跡」  
杉本 宏 2000「核瓦考」「考古学研究」第46卷第4号 考古学研究会  
大宰府市教育委員会 2000「大宰府条坊跡X-V -陶磁器「分類編-」」  
江戸遺跡研究会(編) 2001「国説 江戸考古学研究事典」柏書房

鳥根県教育委員会 2001「石見焼開道遺跡調査報告書」

- 東森晋 2001「发掘成果からみた石見焼の歴史」第52回浜田市文化講演会資料  
村上 助 2002「石見焼」「角川日本陶磁大辞典」角川書店  
九州近世陶磁学会 2002「九州陶磁の編年」

大橋謙 2002「雲南荒紀行」「帝塚山大学考古学研究室報告」IV  
関西近世考古学研究会 2003「関西近世考古学研究」X 1

大橋康二 2004「シリーズ「遺跡を学ぶ」005世界をリードした  
迢路・肥前窯」泉屋  
第11回中国・四国区域城館調査検討会 2006「城郭瓦の変遷-  
織島期から近世へ-」

甲斐弓子 2007「左札瓦-天下分け目の右・左-」「帝塚山大学  
考古学研究所研究報告」IX 帝塚山大学考古学研究所

大橋謙 2007「左札瓦紀行」「帝塚山大学考古学研究所研究報告」  
IX 帝塚山大学考古学研究所  
岩崎仁志 2008「佐野焼の生産と流通」「山口考古」第28号  
山口考古学会

村上 助 2009「パリア海退が中世地域社会に与えた影響につ  
いて」「西国城館論集 I」河瀬正利先生追悼論集「中国・四国地  
域城館検討会」

佐伯昌治 2010「近世須佐焼に関する一考察」「山口考古」第30  
号 山口考古学会

大成可乃 2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)  
器種(小器種)」の出土状況」「東京大学構内遺跡調査研究年  
報7」2007-2008 東京大学埋蔵文化財調査室

阿部志朗 2011「北海道にある石見焼について」

『郷土石見』No.87 石見郷土研究懇話会

守岡正司・新川隆2011「陶磁器から見た石見銀山遺跡」「  
石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1」鳥根県教育委員会・  
大田市教育委員会

津和野町教育委員会 2011「②石見瓦の街並み景観」「津和野  
町歴史文化基本構想・保存活用計画書」

## 浜田城下町・本文関係文献

- 小出 圭 1926「浜田に於ける記憶の概略」「浜田會誌」第56號  
濱田會  
小出 圭 1931「浜田に於ける記憶の概略の追記」「浜田會誌」  
第61號 濱田會  
浜田市役所 1950「浜田」  
桑原韶一・の場幸雄 1962「浜田郷土史年表(藩政時代)」浜田  
市文化財保存会  
川原和人 1970「石西の須恵器」  
須藤喜六 1983「浜田藩・鶴田藩 藩主住居のあれこれ」「亀山」  
第10号 浜田市文化財愛護会  
神山典之 1985「浜田城焼失の報告」「亀山」第12号 浜田市  
文化財愛護会  
須藤喜六 1988「はまだはん雑記」  
村田松一 1988「石見国浜田城と天守閣」「歴史懇談 第二号」  
大阪歴史懇話会  
浜田市教育委員会 1992「ふるさとを築いたひとびと」  
神山典之 1992「幕末の浜田藩」「亀山」第18号 浜田市文  
化財愛護会  
の場幸雄 1992「近世災害年表」「亀山」第18号 浜田市文  
化財愛護会  
佐々木徳三郎 1983「浜田城落城余話」「郷土石見No.12」石見郷  
土研究懇話会  
渡邊幸男 1995「浜田地図」  
『1912(明治45)年浜田測候所がまとめた「浜田地震報告書」  
を整理補填したもの』  
浜田市教育委員会 2002「浜田の文化財」  
浜田市教育委員会 2004「松平右近将監家とその家臣」

- 浜田城跡関係文献
- 浜田会 1892 「浜田城地目録」『浜田会誌 第貳號』・「浜田城地目録」『浜田会誌 第三號』
- 藤井宗雄 1899 「浜田鷹」安達共榮堂
- 鳥根縣 1930 「鳥根縣史」九
- 大島幾太郎 1935 「濱町史」一誠社
- 鳥根県 1965 「新修 鳥根縣史」史料編3 近世(下)
- 鳥根県 1968 「新修 鳥根縣史 通史篇1」
- 浜田市 1973 「浜田市誌 上巻」
- 田村祐一 1975 「城 石見浜田城」岡西城郭研究会
- 藤岡大捨他編 1980 「日本城郭体系 第14巻 鳥取・鳥根・山口」新人物往来社
- 浜田市 1982 「写真集はまだ」
- 内藤正中編 1983 「山陰の城下町」山陰中央新報社
- 矢守一彦 1988 「城下町のかたち」筑摩書房
- 谷口昭 1992 「転封考 資料編」『名城法學 第四回 第三号』名城法學会
- 三浦正幸 1992 「浜田城」『復元体系 日本の城 6 中国』ぎょうせい
- 浜田市教育委員会 1992 「ふるさとを榮いた人々 浜田藩追憶の碑人物伝 -」
- 浜田市教育委員会 1993 「浜田城跡発掘調査概報」『亀山』第20号 浜田市文化財愛護会
- 平凡社 1995 「日本歴史地名大系第33巻 鳥根県の地名」
- 浜田市教育委員会 1997 「岸靜江とその時代 激動の幕末と浜田藩」
- 鳥根県教育委員会 1997 「1.15 浜田城跡」『鳥根県中近世城館分布調査報告書 <第1集> 石見の城跡』
- 岩崎健 1998 「浜田城」『Nice To Meet You VOL.153』 ladies ますだ
- 浜田市教育委員会 1999 「松平周防守家の成立と浜田」浜田市世界こども美術館
- 三浦正幸 1999 「城の鑑賞基礎知識」至文道
- 山陰中央新報 2000年10月1日～2001年5月13日『浜田城探訪』井上寛司 2001 「中世の港町・浜田」浜田市教育委員会
- 藤田亨 2001 「浜田城址公園について」『文化財愛護会 平成13年4月例会 発表資料』
- 原裕司 2001 「浜田城調査について - 中間報告として -」『シンボジウム 浜田城を語る』浜田市文化財愛護会・山陰中央新報社
- 藤田亨 2002 「浜田城址公園の変遷」『亀山』第28・29号 浜田市文化財愛護会
- 中井均 2004 「浜田城」『歴史群像シリーズ よみがえる日本の城 6』学習研究社
- 浜田市教育委員会 2005 「浜田城」パンフレット
- 白峰旬 2006 「天保7年の石見国浜田城引き渡しについて」『別府大学大学院紀要 第8号』別府大学大学院文学研究科
- 浜田市教育委員会 2007a 「浜田城跡(庭園跡の調査1)」
- 浜田市教育委員会 2007b 「浜田城跡(庭園跡の調査2)」
- 浜田市教育委員会 2007 「東宮殿下浜田御旅館 御便殿」パンフレット
- 郷土出版社 2009 「石見ふるさと大百科」
- 浜田市教育委員会 2010 「浜田城下町(殿町)発掘調査現地説明会資料」

		浜田(石見)	肥前系陶器	在地系陶器(石見周辺含む)	
15世紀	1443	嘉吉3 天正3	宝福寺大般若経 中貴家久公御上宣日記		
	1575	天正15	元州道の記	1580頃	肥前陶器(TB)・屏風承
	1600	慶長5	徳川氏の直轄地となる 坂崎出羽守が津和野藩主・大久保長安が銀山奉行となる	I	船土目積み(TB2e)・鉄絵
	1601	慶長6	坂崎出羽守が津和野藩主・大久保長安が銀山奉行となる 石見銀山道となる	1594～1610	
	1603	慶長8			
	1615	元和1	一国一城令	1610～1640	初期伊万里
	1617	元和3	亀井政相が津和野藩主となる 古田重治が浜田藩主となる	1615以降～ 1630	砂目積み(TB2b) 刷毛手・三鳥手・二彩手
	1619	元和5	(5万5千石)		
	1620	元和6	堀城着手		
	1623	元和9	城と城下町の整備完了	II	
17世紀	1643	寛永20	加藤明友が吉永藩主になる ～1682	1630以降	高台内鉢
	1649	慶安2	松平康暉が浜田藩主となる (前期 松平周防守家)	1637以前	講縁皿(TB2)
	1686	貞享3	浜田城下町繪図	III	1634以前～大正末 須佐唐津窯
	1737	元文2	元文二年浜田御城下松平・浜田御城内外涌浦町惣管敷付	1650以降 17世紀中葉 17世紀後半	ハリ支え・高台蛇目袖利多 肥前磁器主体(JB) 京焼風陶器(TB1b)・刷毛目陶器 器皿手鏡
	1759	宝曆9	本田忠敏が浜田藩主となる	17世紀末	コニニヤク印判(JB2) 陶胎染付(TB1f)・銅綠釉陶器 (蛇目高台)
18世紀	1769	明和6	松平康福が浜田藩主となる (後期 松平周防守家)	IV 18世紀前半 18世紀中 18世紀後半	見达五弁花文・渦桟 型紙刷り(1690～18c前半流行) 蛇目四形高台(JB2) くらわんか輪(JB1g) 外青磁碗・丸形碗・筒形椀
	1771	明和8	石見浜田藩内図		

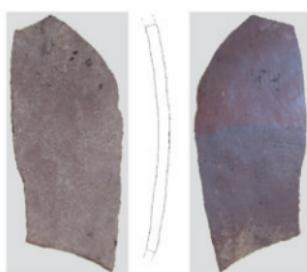
19世紀	1805 文化2	自唐鍾錦至長浜瀬海岸絵図	1780頃 1780~19世紀前半	足付ハマ瓶 広束形瓶(JB1m)	1780(天明年間)頃 1793(寛政5) 19世紀初頭? ~ 1838?(天保9) 1801(享和1)	田原氏庭園、光明寺本堂、常光寺本堂瓦 「赤瓦」史料の初出 (宋侍種の使用?) 鶴木1号窯 (石州浜田万年焼・楓葉型) 津和野祇園町道跡4-S2 須佐燒塗跡第4期		
					18世紀末~19世紀前・1822(文政5年)前後 1804(文化1)	仁右エ門山窯(本瓦・枝瓦・陶器) 榮棄寺所用鬼瓦・安国寺鬼瓦		
	1813 文化10	浜田城石垣絵図			1819(文政2) 19世紀前半	谷戸經塙の甕 (宋侍種・黒色釉流しきけ) 相生窯(本瓦・枝瓦・陶器・丸物?) 鶴田A道跡(丸物・瓦・陶器)		
					1819(文政2) 19世紀前半	谷戸經塙の甕 (宋侍種・黒色釉流しきけ) 相生窯(本瓦・枝瓦・陶器・丸物?) 鶴田A道跡(丸物・瓦・陶器)		
	1836 天保7	松平齊厚が浜田藩主となる(松平右近翁監修)・竹崎事件発覚・浜田城地目録・大和山尊勝寺被災		V 1820頃	1837(天保8) 1845(弘化2) 1854~1945 (安政1~昭和20) 1848(嘉永1) 1853(嘉永6) 1858~1902 (安政5~明治35)	空堀商店裏塙跡(丸物?) 弓谷たたらE-0区西側崖面 「赤瓦」史料の初出 喜阿弥焼 (陶器・鍊瓦・花瓶・茶器など) 因分寺鬼瓦 津和野祇園町道跡4-S1 白上焼(磁器・椀皿類)		
					1864~1883 (元治1~明治16) 幕末? ~ 1866(慶応2)	北ヶ道塙跡 (丸物・瓶類→本瓦・枝瓦) 鶴木2号窯(小瓶・皿・押鉢他) 浜田城下町道跡 (駿河7番地47)燒土		
	1862 文久2	石見国亀山城	明治	19世紀後半 プリント	1894(明治27) 幕末~大正・1899 (明治32)前後	石見国商便覧 (温泉津焼・江津焼)		
	1871 明治4	浜田城図			1903(明治36) 明治末~戦後	大田屋塙跡(丸物)		
	1872 明治5	浜田地図(推定M7.1)			大正時代	石見焼陶器製造業組合設立・「石見燒」印増加?		
	1879 明治12	浜田市街之図			1918(大正7)	空田屋塙跡(枝瓦→丸物・椀類)		
	1898 明治31	陸軍測量図			1920年代 ~1965(昭和40) ~1959(昭和34)	押日上塙に強いナデ消し+沈線 長東坊家塙跡(丸物)		
	1907 明治40	御便殿建築			(1934~1970) 昭和9~45	安国寺鬼瓦 上府八反原塙跡(丸物)		
	1921 大正10	山陰本線浜田駅開通				鶴木3号窯(押鉢・片口・壺類)		
	1957 昭和32	城山公園整備事業 (失業対策事業~1960)	大正(1912)~昭和40年頃 20世紀前半			平野塙跡 (押鉢他・1962年頃から棚板使用)		
	1962 昭和37	浜田城が鳥取県指定史跡(6月12日)に指定される						

\*帯前系陶器の記号は東大分類(東京大学埋蔵文化財調査室 1988, 大成 2011)による

表3 関連年表



第10図 殿町79-47 砂層1



14 陶器  
肥前



15 陶器  
在地被熱



18 陶器  
不明



19 弓生土器  
高杯



20 土師器  
要



21 土師器  
要



22 土師器  
三



23 土師器  
四



24 土師器  
三



25 土師器  
灯明皿



26 土師器  
灯明皿



27 石製火鉢



第11図 殿町79-47 砂層2



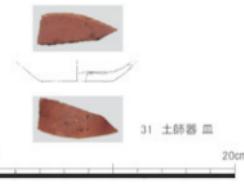
28 瓦 丸瓦（有段）



29 瓦 製斗瓦  
被熱

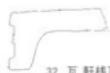


30 土器器 灯明皿



31 土器器 皿

第12図 殿町79-47 石列裏込



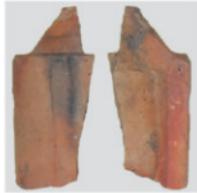
32 瓦 軒棟瓦（右桂）



34 瓦 軒瓦



33 瓦 軒棟瓦（右桂）



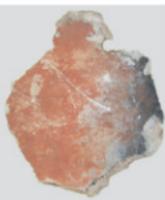
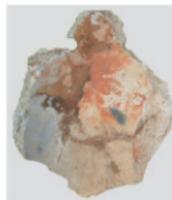
35 瓦 丸瓦（有段）



36 瓦 丸瓦（有段）



37 瓦 棟瓦（右桂）



38 瓦 棟瓦



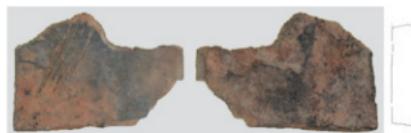
第13図 殿町79-47 焼土層1 (36～38：被熱)



39 瓦 棱瓦（右棟）



40 瓦 棱瓦（右棟）



41 瓦 跃斗瓦



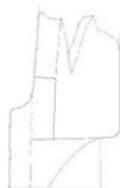
第14図 殿町79-47 焼土層2(39~41:被熱)



42 瓦 距斗瓦



43 瓦 雁振瓦



44 瓦 轴进



45 瓦 轴进



46 瓦 轴进



47 瓦 轴进



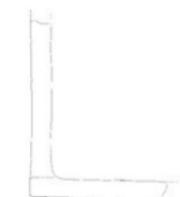
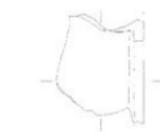
第15図 殿町79-47 燃土層3 (42~44・46・47:被熱)



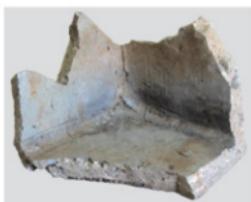
48 瓦 抽瓦



49 瓦 不明



50 瓦質土器 不明



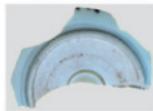
51 瓦質土器 不明



52 瓦質土器 火消し壺の蓋？



53 磁器 小碗  
肥前



54 磁器 盆（蛇ノ目回型高台）  
九周Ⅷ期（1780～1860年代）



第16図 殿町79-47 焼土層4 (49・53・54:被熱)



第 17 図 殿町 79-47 焼土層 5 (被熱)



65 青磁 盆  
同安窯 I 類 2a, b



66 磁器 梗  
肥前



67 磁器 梗反板  
九陶V期 (1780 ~ 1860 年代)



69 磁器 梗  
肥前



70 磁器 段重  
肥前



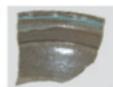
67 磁器 梗反板  
九陶V期 (1780 ~ 1860 年代)



71 京燒風陶器 梗  
九陶III期 (1650 ~ 1690 年代)



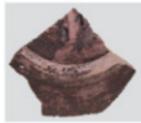
72 陶器 茶壺  
鍋前



74 陶器 鉢  
在地



75 陶器 鉢  
在地



73 陶器 檻鉢  
須佐



76 陶器 豪  
在地



77 陶器 行平  
在地



78 陶器 檻鉢  
在地

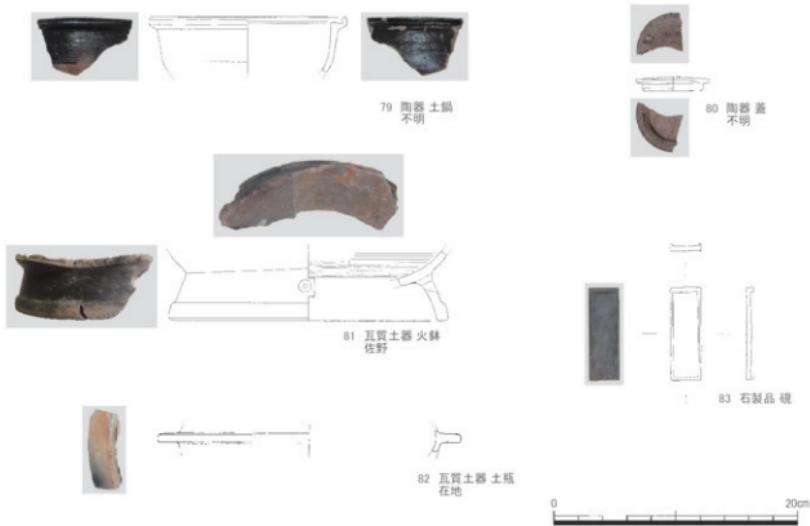


0



20cm

第 18 図 殿町 79-47 焼土層 6



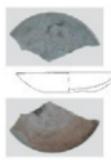
第19図 殿町79-47 焼土層7



84 瓦 軒瓦

85 瓦 軒瓦  
被熱

86 白磁 梢

87 磁器 梢  
瀬戸美濃88 陶器 梢  
不明 被熱89 陶器 梢  
肥前90 陶器 摺鉢  
肥前91 陶器 摺鉢  
在地

95 弥生土器 梢



96 弥生土器 梢



97 弥生土器 梢

94 土師質 七輪  
佐野

98 土師器 梢



99 土師器 梢



100 土師器 梢



第20図 殿町79-47 近現代層



101 瓦 軒丸瓦



102 瓦 軒棱瓦



103 瓦 軒棱瓦



104 瓦 軒棱瓦



105 瓦 軒棱瓦



106 瓦 軒棱瓦



107 瓦 丸瓦



108 瓦 棱瓦（左様？）

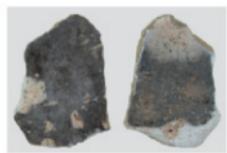


109 瓦 棱瓦



110 瓦 厚板瓦





113 磁器 広東模様  
九間V期 (1780～1860年代)



113 磁器 広東模様  
九間V期 (1780～1860年代)



114 磁器 小桙  
肥前



114 磁器 小桙  
肥前



115 磁器 広東模様  
九間V期 (1780～1860年代)

116 磁器 皿 (基筋底)  
肥前



119 陶器 皿 (陶胎染付)  
九間Ⅱ期 (1690～1780年代)



118 磁器 小丸桙  
九間V期 (1780～1860年代)



120 陶器 皿 (胎土目)  
九間Ⅰ期 (1580～1610年代)



121 陶器 滅綠皿  
九間Ⅱ期 (1610～1650年代)



122 陶器 皿 (砂目)  
九間Ⅱ期 (1610～1650年代)



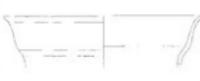
123 陶器 豊  
肥前



124 陶器 土鍋  
肥前

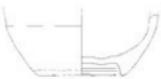
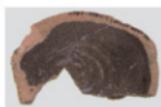


125 陶器 甕  
萩

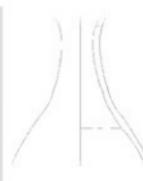


126 陶器 瓢  
萩?

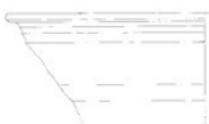




128 陶器 瓶  
秋 or 肥前



129 陶器 德利  
肥前



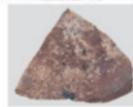
130 陶器 横鉢  
須佐



131 陶器 横鉢  
肥前 or 須佐



132 陶器 横鉢  
在地



134 陶器 壺  
不明



135 陶器 壺  
不明



136 陶器 横鉢  
不明



第23図 松原町 268-5 3



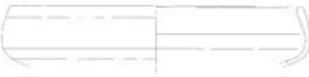
137 陶器 売鉢  
不明



140 土師器 皿



138 土師器 焙爐  
不明



139 土師器 焙爐  
不明



第24図 松原町 268-5 4



調査前



作業状況



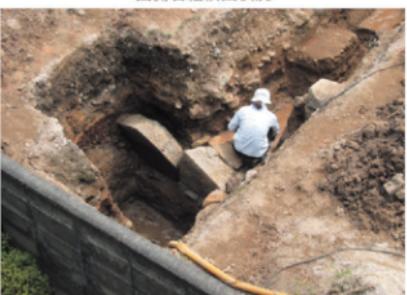
焼土検出状況



西側石組検出状況



調査区全景（西側より）



石列検出状況（西側より）



石列西側土層



石列西側土層（石列周辺）

殿町 79 番地 47



石列西側土層（南壁）



石列西側土層（北壁下側）



石列西側土層（北壁下側）



石列（南側より）



石の加工状況



調査終了状況

殿町 79 番地 47



調査前



調査区全景（南側より）

松原町 268 番地 5

# 報告書抄録

ふりがな	しまねけんはまだしいせきちずよん（やさかじちく）・はまだじょうかまちいせきしつちょうさ							
書名	鳥根県浜田市遺跡地図IV（弥栄自治区）・浜田城下町遺跡試掘調査							
副書名	平成22年度市内遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	柳原 博英・藤田 大輔							
編集機関	鳥根県浜田市教育委員会							
所在地	〒697-8501 鳥根県浜田市殿町1番地 Tel.0855-25-9731 bunka@city.hamada.shimane.jp							
発行年月日	2012年3月							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
浜田城下町遺跡 (殿町79番地47)	鳥根県浜田市 殿町79番地47	32202	L274	34°54'2"	132°4'40"	20100601～ 20100806	15m <sup>2</sup>	試掘調査に より発見
浜田城下町遺跡 (松原町268番地5)	鳥根県浜田市 松原町268番地5	32202	L275	34°54'16"	132°4'43"	20100601～ 20100806	10m <sup>2</sup>	試掘調査に より発見
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
浜田城下町遺跡 (殿町79番地47)	その他	弥生・中世・近世	石列		弥生土器・貿易陶磁器・ 肥前系陶磁器・近世瓦	浜田城内掘東側 の大手通～ 侍町		
浜田城下町遺跡 (松原町268番地5)	その他	近世			肥前系陶磁器・近世瓦	浜田城外掘北 東側の侍町		
要約	<p>浜田城下町遺跡は鳥根県史跡浜田城跡の北東から東側に所在し、調査地点は浜田市殿町と松原町にある。殿町の調査区は浜田城内掘東側の大手通にあたり、区画の石列を確認した。石列は被熱した遺物を含む焼上に覆われており、周辺は慶応2年（1866）の石州口の戦の際に焼失していることからその後の整地の可能性がある。遺物は近世の陶磁器・瓦類が多いが、弥生土器片・中世の貿易陶磁器も少量出土した。松原町の調査区は浜田城北東側の侍町にあたり、近世の陶磁器・瓦類が出土した。</p> <p>現在の浜田市街地の下に近世の城下町道路が残っていることを確認できた。</p>							

鳥根県浜田市遺跡地図IV（弥栄自治区）・浜田城下町遺跡試掘調査

平成22年度市内遺跡発掘調査報告書

発行 鳥根県浜田市教育委員会 2012年3月

鳥根県浜田市殿町1番地

印刷 有限会社 原印刷

